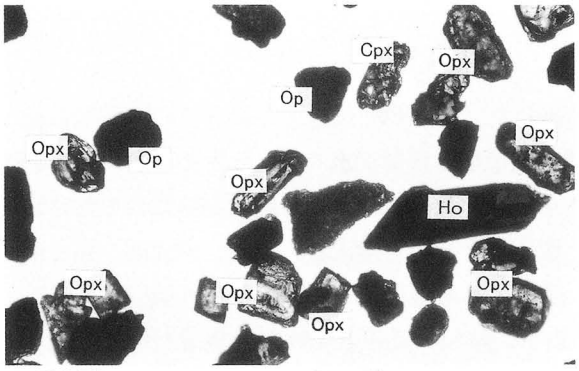
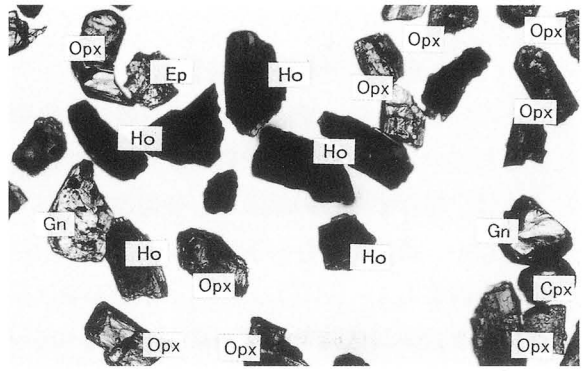
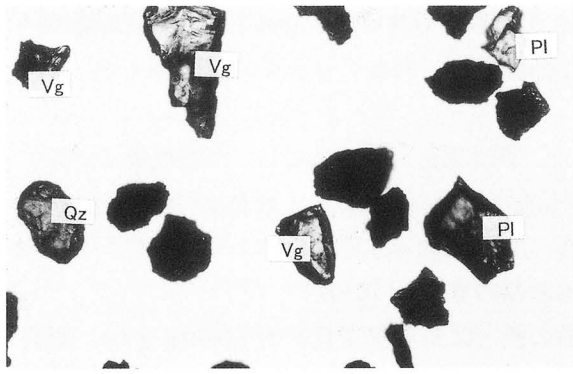
第69図　重軽鉱物・珪藻化石



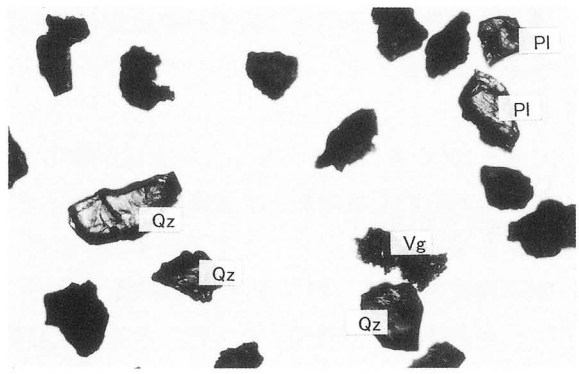
1. 重鉱物(A-1工区　SD01　最下層)



2. 重鉱物(A-2工区　東壁　落ち込み部埋土)



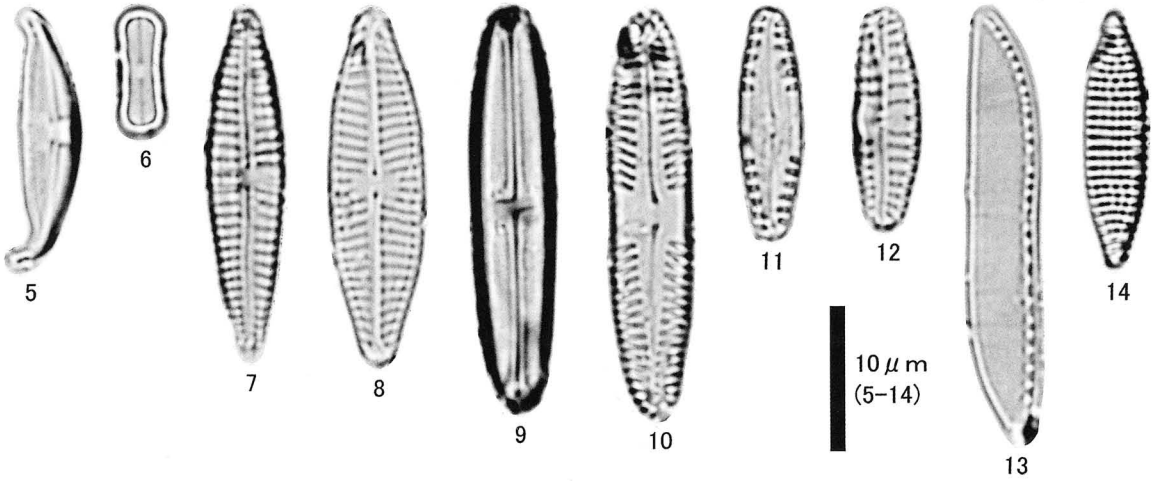
3. 軽鉱物(A-1工区　SD01　最下層)



4. 軽鉱物(A-2工区　東壁　落ち込み部埋土)

Qz:石英　Pl:斜長石　Opx:斜方輝石　Cpx:単斜輝石　Ho:角閃石
Ep:緑レン石　Gn:ザクロ石　Op:不透明鉱物　Vg:火山ガラス

0.5mm
(1-4)



5. *Amphora montana* Krasske(A-2工区　東壁　落ち込み部埋土)
6. *Diadesmis contenta* var. *biceps* (Arnott ex Grunow) Hamilton (A-1工区　SD01　最下層)
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(A-1工区　SD01　最下層)
8. *Navicula veneta* Kuetzing(A-2工区　東壁　落ち込み部埋土)
9. *Neidium alpinum* Hustedt(A-1工区　SD01　最下層)
10. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer(A-1工区　SD01　最下層)
11. *Pinnularia subcapitata* Gregory(A-1工区　SD01　最下層)
12. *Reimeria sinuata* (W.Greg.) Kociolek et Stoermer(A-1工区　SD01　最下層)
13. *Nitzschia parvuloides* Cholnoky(A-2工区　東壁　落ち込み部埋土)
14. *Nitzschia amphibia* Grunow(A-1工区　SD01　最下層)

第Ⅶ章　総　　括

第１節　遺跡の構造と性格

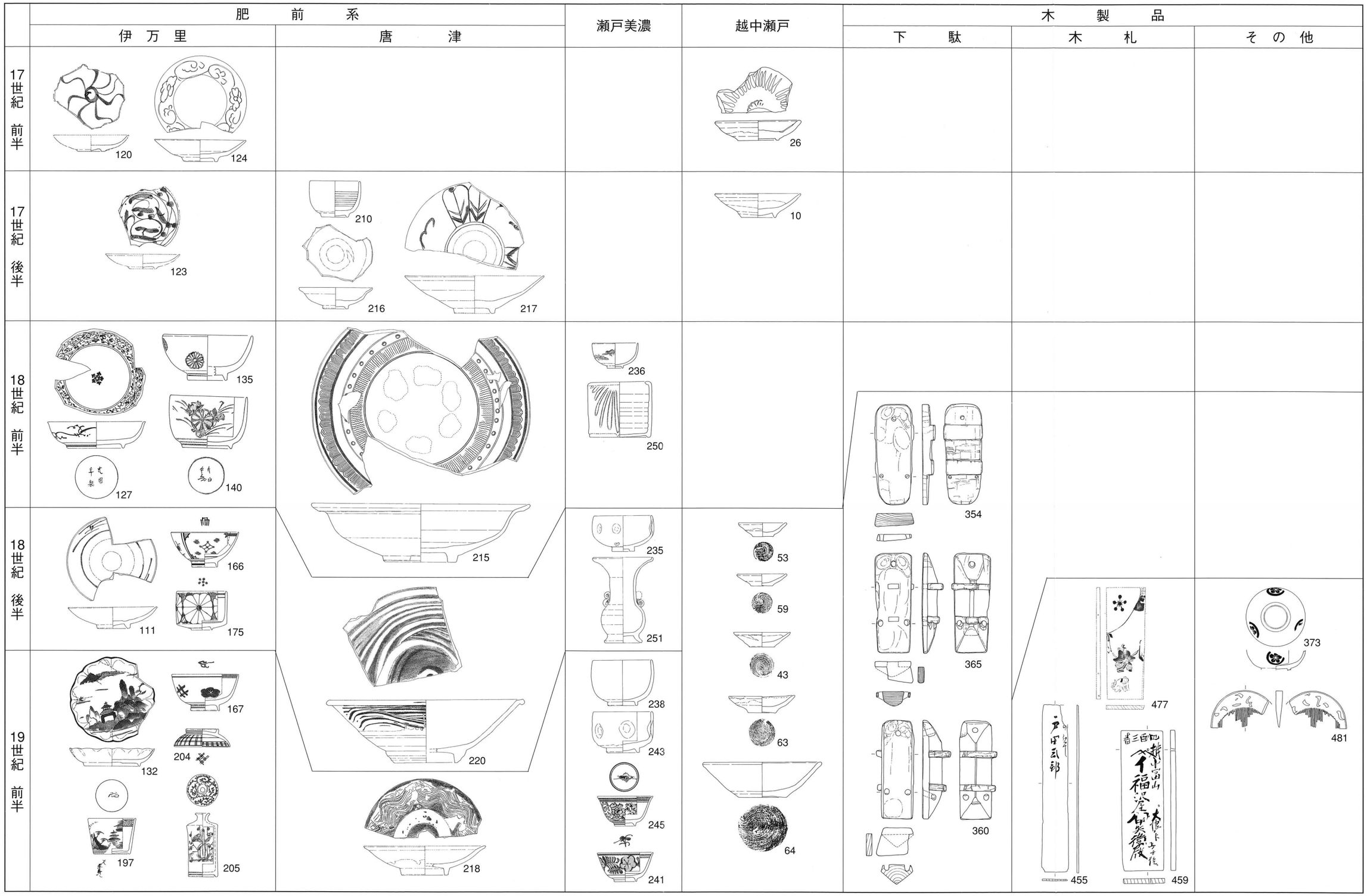
Ａ－１・2区を跨いで東西方向の石組み水路を検出した。第２節で後述するように、古絵図に記載されている北側の武家屋敷地、南側の町屋敷地の境となる背割下水であると考える。この背割下水は、現存するどの絵図にも普遍的に存在するものであるそのため、何度も同位置にて作りかえを行い、最終的に今回検出された石組み水路を構築したものと考える。また、調査区全体を南北に縦断するＡ－１区SD79及びC－2区SD08は同一遺構である可能性が高く、これも絵図に記載されている武家屋敷地境の排水溝と考えられる。（以下、絵図に見られる武家屋敷地と町屋敷地境の溝を「背割下水」とし、北側を「武家屋敷地」、南側を「町屋敷」と表記する。また、武家屋敷地の地境となる溝を「武家屋敷地境の排水溝」、町屋敷地の地境となる溝を「町屋敷地境の排水溝」と表記する。本調査区では背割下水が「石組み水路」、地境の排水溝が「SD08・79」に相当する。）

Ａ－1区から、鉄滓を多く含む土坑が検出された。調査区南西側に集中し、町屋敷地に位置する。これらの土坑中からは遺物は出土せず、欠損した羽口が出土した。これらは町屋敷内において鍛冶を行なっていたことを示唆する。また、Ａ－2区の石組み水路覆土内より鉄滓を多く含む層が確認された。（第Ⅳ章遺構編参照）ここからも鉄滓の他に羽口が出土した。

石組み水路は東側にかけて深くなる。水路底面の標高はＡ－1区西側で標高6.94m（ア）、中央で6.93m（イ）、Ａ－2区東側で6.76m（ウ）、6.70m（エ）を測る。よって流水方向は西から東である。SD79は北側で標高7.53m、石組み水路に直結する南側で6.26mを測る。SD08は北側で6.74m、南側で6.02mを測る。いずれも流水方向は北から南であり、石組み水路へと流れている。しかし、SD08・79が同一遺構であるならば、流水方向が北から南であるのにも関わらず、SD08の方が深くなる。同様に、石組み水路はSD79に直結する部分が6.28mを測り最も深くなる。さらに、石組み水路より下層から検出された古相を示す溝は西側で標高6.88m（ア）、中央で6.32m（イ）東側で6.50m（ウ）、6.42m（エ）を測り、中央が最も深くなる。深くなる理由は不明であるが、Ａ－1区の南西側において鍛冶を行なった不要物（鉄滓、羽口等）を石組み水路に流した際にＡ－2区石組み水路の深い箇所に溜まった可能性がある。Ａ－1区南西側の鉄滓を多く含む土坑からは土器が出土しなかったのに対し、石組み水路の鉄滓層からは多量に土器が出土した。これは、鉄滓を廃棄し流した際に遺物（土器）を包含しながら堆積したことを示唆する。

石組み水路の深くなった箇所以外にこの周辺から鉄滓が出土しなかったことより、やはり南西側の町屋敷にて鍛冶が行なわれていた可能性が高い。しかし、鍛冶を行なっていた集団が居住していた鍛冶町は寛文絵図によると城郭の南東、新寺町に近接し五番町に続く地に古鍛冶町の町名があり、五番町の北側三番町と材木町に挟まれた地に鍛冶町とある。また、後年火を扱う職業であったことから火災防止のため鼬川に近い東部に移った（田中喜男1993）。なぜ調査区南西側で鍛冶が行われていたかは不明であるが、有力商人が小鍛冶を行なっていた可能性はある。

Ａ－1区は大型の土坑、いわゆる「ゴミ穴」が多く存在する。これは絵図から見ると町屋敷の裏手にあたり、ここにゴミを廃棄した場所であった可能性がある。ゴミ穴はSD01を切って構築しており、出土遺物からも、ゴミ穴の帰属時期は19世紀前半に比定され、調査区内でゴミ穴は新相を示す。



第70図　本調査区出土遺物の様相

0　1：6　30cm

0　1：8　40cm（下駄）

SD01の覆土は類似した層が厚く堆積し、自然堆積ではなく、埋められた可能性がある。上層からは18世紀～19世紀の比較的新しい遺物が出土しているが、これはSD01埋没後、上面に構築されたゴミ穴の影響を受けているか、最終堆積がこの時期であるためと考えられる。SD01の構築時期の指標となる下層からは、遺物の出土量は希薄であったものの土師器皿、越中瀬戸など古相を示す遺物が出土していることもあり、これらを踏まえると、この溝は17世紀代に構築された可能性がある。また、鉄滓を多く含む土坑はSD01によって切られるため、SD01よりも古相を示すこととなる。遺構の変遷としては鉄滓を多く含む土坑→SD01→ごみ穴と推移する。鉄滓を多く含む土坑、SD01は富山城跡の江戸時代前期の様相を知る上で貴重な資料となると考える。

A－2区の南側は全体に落ち込み鞍部状を呈する。その落ち込みを整地し、平坦面を作り出していると考える。これは、第Ⅵ章自然科学分析において述べたように、人為的な造成土である可能性が指摘できるためである。この造成土は遺物編で提示したように比較的新しい遺物を包含しており、造成が行なわれた時期は18世紀後半頃と考えられ、その後に石組み水路を構築していることが分かる。江戸時代の前半においても石組み水路の南側は町屋として存在していたため、鞍部状に落ち込んでいるのであれば屋敷を建設することは困難である。この箇所は旧地形が落ち込んでいるのを富山城の地割を行なう際に造成したのではないだろうか。掘削と造成を繰り返し、18世紀後半頃に最終的な造成を行なったと考えられる。

C区は武家屋敷地に位置する。C－2区東側からB区にかけて比較的新しい遺構が多い。C－1区はピットが多く、遺構密度は低い。また、大型の土坑は検出されなかったため、C－1区は母屋もしくはその周辺であった可能性がある。そのためにゴミ穴や大型の土坑などが検出されなかったのではないだろうか。しかし、建物に付随する遺構が検出されなかったため確実ではない。

C－2区からは地境の排水溝となるSD08が検出された。この遺構の東側に緩やかな落ち込みを確認した。石組みを構築するための掘方もしくはSD08以前の地境の排水溝と考えられたが、SD08出土遺物の年代とほぼ差がないことや、覆土が単層であることから、古相の溝ではなく、SD08を構築する際の掘方とした。SD08は東側でSK10・11・12に、中央でSK52・43・15によって切られる。

SK10・11・12は大型のゴミ穴で多量の遺物を包含する。第Ⅳ章遺構編で述べたように、ゴミを捨てた後に蓋をするように土を被せ、さらにゴミを廃棄するという行為を行なったため遺物や有機物を含む層と含まない層が交互堆積している。SK10・11・12は同一遺構の可能性がある。断面観察から確認し得た遺構同士の切り合いはこのゴミを廃棄した堆積状況を表わしている可能性がある。各遺構の出土遺物にも時期差は認められない。

出土遺物から本調査区は19世紀前半が主体である。絵図などを概観すると武家屋敷地、町屋敷地は普遍的に存在していたことが窺えるが、17世紀から18世紀にかけての江戸時代前期の明確な遺構は検出されなかった。その理由として、18世紀から19世紀の大型の遺構によって破壊されたと考えられる。また、土地の所有者が変わっても屋敷地内の構造に変化が無く、同じような場所で、建物やゴミ穴を何度も構築したのではないか。もしくは、A－2区の造成土のように造成と掘削を繰り返し、江戸時代前期の遺構は削平されてしまったということも考えられる。

また、本調査区から出土した遺物のセット関係及びどのようなものが使用されていたのかを概観するため、帰属時期の特定できる遺物に関して遺構に見る陶磁器の様相（第70図）を掲載した。しかし、越中瀬戸は特に18世紀～幕末までの様相は資料数が少ないこともあって判然としない。

第Ⅵ章第6節において詳しく述べるが、皿の帰属時期を検討した結果、18世紀後半と19世紀前半に帰属するものが明確に区分することはできない。18世紀後半と19世紀前半の様相は変化しないものと現時点では考えられる。下駄についても同じことがいえ、第Ⅶ章第4節で詳しく述べるが、比較資料の希薄から時期差を明確に区分するまでには至らなかった。（小川）

第2節　絵図からみた調査区

本調査区は富山城本丸の南側、大手門通りの東側壱番町に位置し、富山城跡の武家屋敷地及び町屋敷地に該当する。本調査区が詳細に記載されている富山城跡の古絵図は『万治年間富山旧市街図』（1658～1661年）[以下万治絵図]、『寛文六年十月御調理富山絵図』（1666年）[以下寛文絵図]、『御城内外御焼失御絵図面』（天保年間1830～44年）[以下天保絵図]、『越中富山御城下絵図』（安政元年1854年）[以下安政絵図]の4枚が現存し、これらの絵図を用いて本調査区の様相を検証する（第71図～第74図）。しかし、寛文6年（1666年）から天保（1830年）の17世紀中頃から19世紀前半までの間は、富山城下町の詳細図が現存していないため詳細は不明である。

本調査区と絵図等の対比から、江戸時代を通して背割下水の南側は町屋敷地であり、北側は武家屋敷地となる。武家屋敷地は以下のように変遷する。

①正保頃（1640年代）……町屋敷
②寛文初年（1660年）……中級（馬廻組250石）藩士屋敷
③寛文6年（1666年）……中級（200石）藩士屋敷
　　普請奉行
④天保2年（1831年）……上級（1000石）藩士屋敷
　　馬廻組頭、寺社奉行、学校奉行
⑤安政元年（1854年）……上級（1000石）藩士屋敷
　　高知組
　　中級（230石）藩士屋敷
　　足軽頭
⑥慶応頃（1860年代）　　上級・中級藩士屋敷

背割下水よりも北側には上記のような変遷の武家屋敷が存在していることが分かる。武家屋敷地内での区割りは変化しても、少なくとも寛文頃から江戸時代を通して武家屋敷地と町屋敷地という区画は変わらない。町屋敷地は絵図において「町屋」とだけあり、居住者や地割などは不明である。本調査区に該当する武家屋敷地の変遷を以下列挙する。なお、大手通り東側に面する武家屋敷地は寛文絵図、天保絵図、安政絵図には蟹江家とあることから、寛文以降は変わらず蟹江氏の屋敷であったであろう。

『万治年間富山旧市街図』（1658～1661年）
三輪伝蔵（足軽組）、赤尾覚太夫（馬廻組）、山村与左衛門（役職不明）
『寛文六年十月御調理富山絵図』（1666年）
三輪伊織（伝蔵の子か）、赤尾覚太夫（馬廻組）、辻三全（役職不明）
『御城内外御焼失御絵図面』（天保年間1830～44年）
戸田（表目付か）、空白地、町会所（寄合場所）
『越中富山御城下絵図』（安政元年1854年）

戸田中務、空白地、加藤外記、町役前（寄合場所）

これらの絵図を、平成16年度に空中写真撮影を行い作成した空中写真オルソ画像と、本調査区の遺構平面図を重ね合わせ検証を行う。オルソ画像とは中心投影により撮影された空中写真を空中三角測量により国家座標を付与し、数値地形モデルにより正射投影変換したものである。作成されたオルソ画像は実物と同位置関係であり1／2500の縮尺を有する写真図である。絵図の合わせ方として、絵図に見られる大手門通りと現在の大手町通り及び外堀と武家地の間の通りと現在の総曲輪通りは合致するため、それらの通りの位置関係を基準にオルソ画像と各絵図を合わせた。この手順を踏むことによって、合成させた絵図は1／2500に近い精度をもつ絵図となる。第71図～第74図の図画割の対象範囲は北西端の国家座標がX＝76600、Y＝3960とし、南東端の座標がX＝76360、Y＝4280とした。

その結果、A区に存在する石組み水路は武家屋敷地と町屋敷地の境となる背割下水とほぼ合致した。この背割下水は普遍的に存在するため、ほぼ同一箇所に存在していたことがわかる。また、第Ⅳ章遺構編で述べたように、A－2区SD79及びC－2区SD08は同一遺構であると考えられる。SD08・79は、武家屋敷地同士を区画する地境の排水溝の可能性がある。

以下各絵図の合成図に関して詳細を述べる。

・『万治年間富山旧市街図』（1658～1661年）〔第71図〕

武家屋敷地内において石組み水路より北側、C－1区及びC－2区の西側約1／3は三輪伝蔵家、C－2区残り2／3及びB区の約半分は赤尾覚太夫家、残りB区は山村与左衛門家に位置する。SD08・79は三輪伝蔵家、赤尾覚太夫家の地境の排水溝とは一致しない。

・『寛文六年十月御調理富山絵図』（1666年）〔第73図〕

武家屋敷地内において石組み水路より北側、C－1区及びC－2区の約1／3は三輪伊織家、C－2区残り2／3は赤尾覚太夫家、B区は辻三全家に位置する。SD08・79は三輪伊織家、赤尾覚太夫家の地境の排水溝とは一致しない。

・『御城内外御焼失御絵図面』（天保年間1830～44年）〔第72図〕

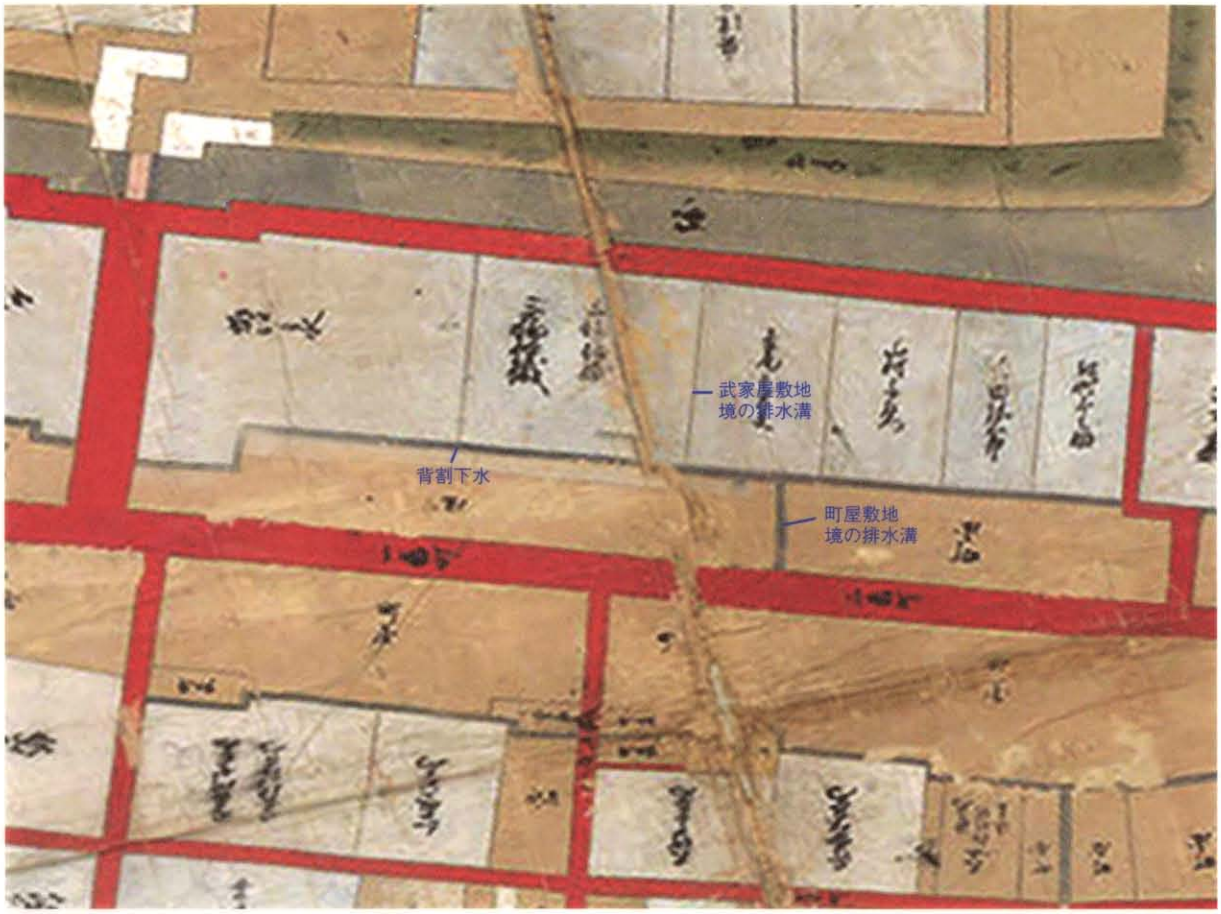
武家屋敷地内において石組み水路より北側、C－1区及びC－2区の西側約1／4は戸田家、C－2区残り3／4及びB区の約半分は空白地、残りB区は町会所に位置する。SD08・79は戸田家、空白地の地境の排水溝と合致する。

・『越中富山御城下絵図』（安政元年1854年）〔第74図〕

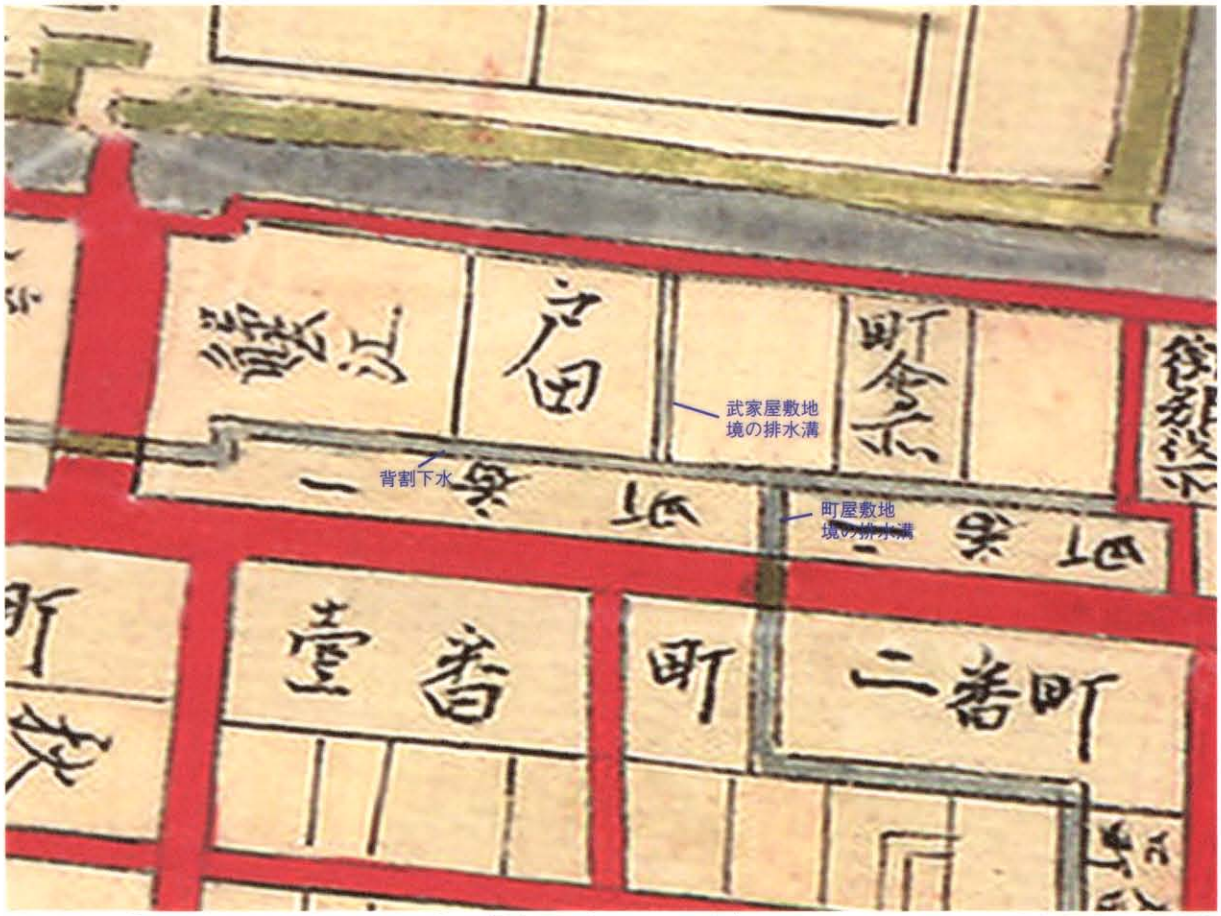
武家屋敷地内において石組み水路より北側、C－1区及びC－2区の西側約半分は戸田中務家、C－2区残り半分及びB区の1／3は空白地、残りB区は加藤外記家に位置する。SD08・79は戸田家、空白地の地境の排水溝とは一致しない。

以上のことから、万治絵図、寛文絵図は石組み水路以外に一致しない。このことは、調査区内に江戸時代前半に属する遺構が検出されていないことと整合する。しかし、SD08の南側断面図から、東側掘方に切られる石組みの遺構が確認された。（第Ⅳ章第25図断面図の遺構A・遺構B）これは、絵図の整合性から地境の排水溝の可能性がある。SD08構築の際及びSK10・11・12などにより破壊され、南側断面に辛うじて残っているのではないだろうか。

天保絵図において、SD08・79は戸田家、空白地における地境の排水溝と合致する。このことはSD08から出土した遺物が19世紀前半に比定されることからも、この絵図に記載されている地境の排水溝である可能性が高い。天保絵図おいて地境の排水溝が南側で背割下水にぶつかり、東



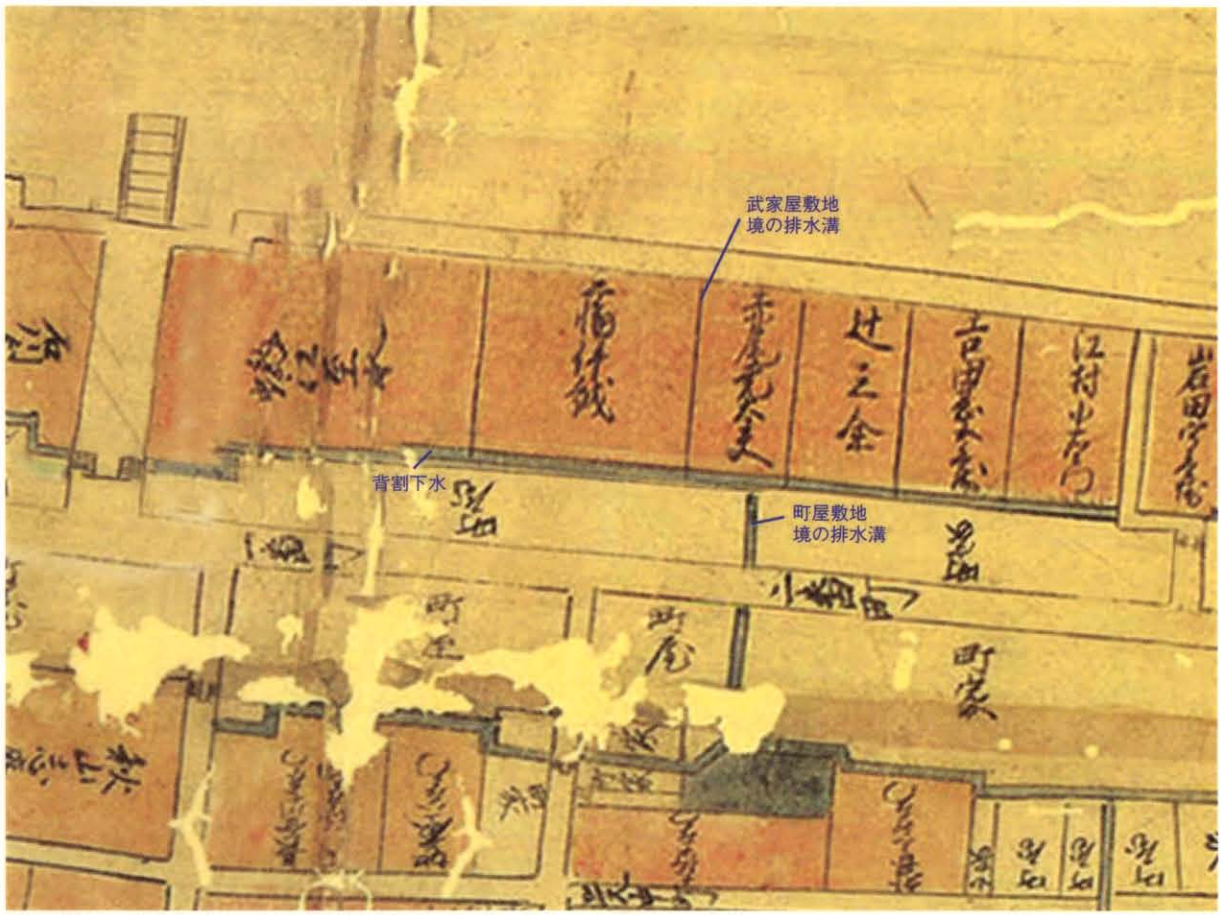
第71図　『万治年間富山旧市街図』万治年間（1658～1661年）頃　　富山県立図書館蔵



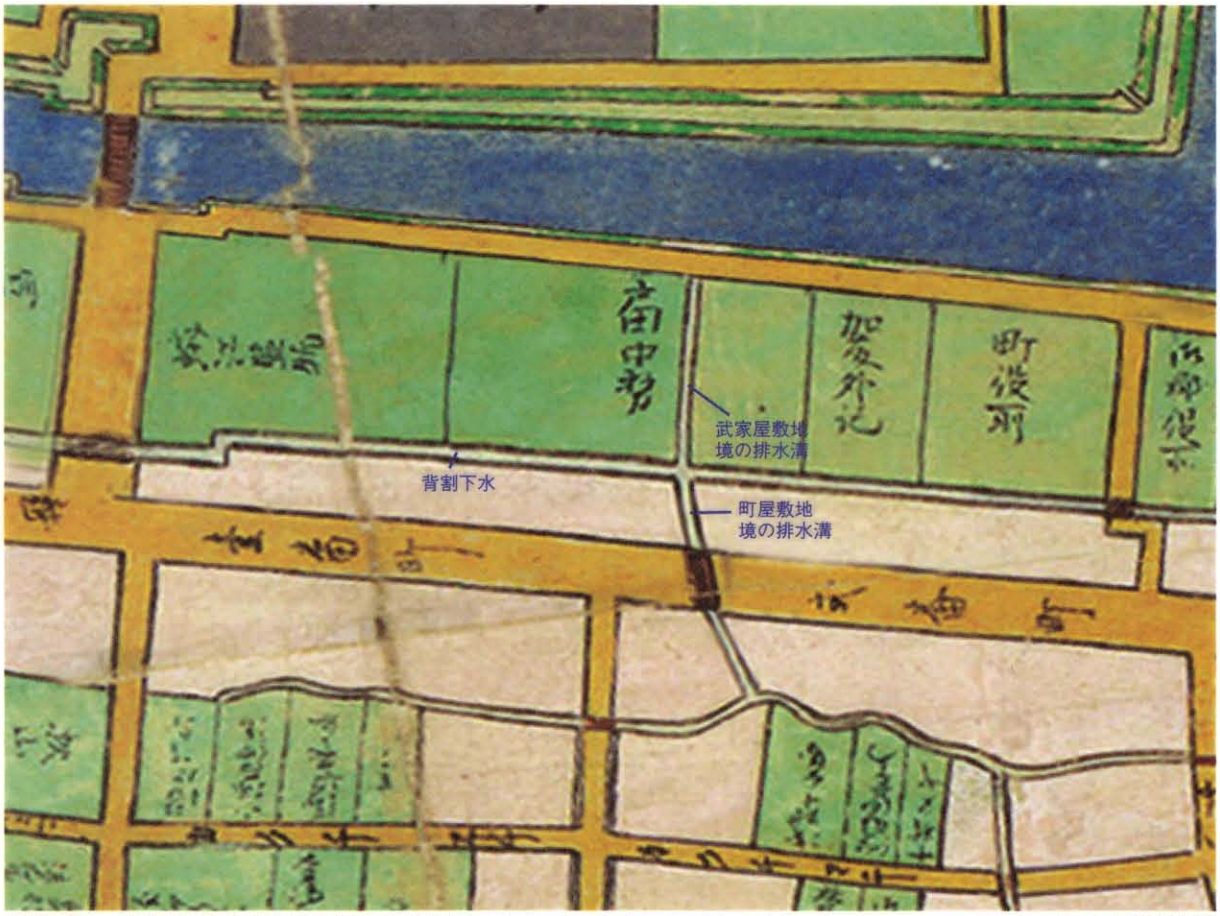
第72図　『御城内外御焼失御絵図面』天保年間（1830～44年）　　富山県立図書館蔵

C-1区
SD08
C-2区
B区
SD79
石組み水路
A-1区
A-2区

C-1区
SD08
C-2区
B区
SD79
石組み水路
A-1区
A-2区

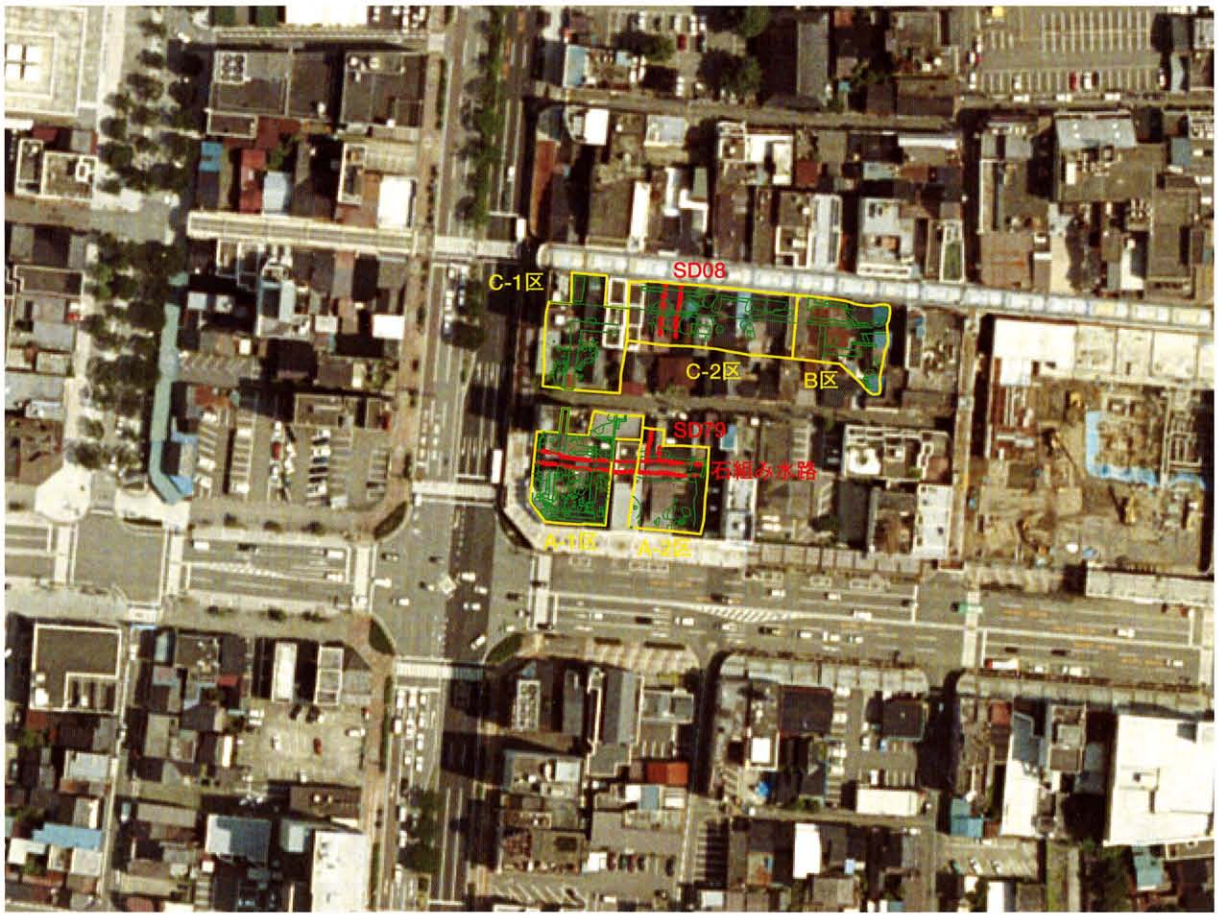


第73図　『寛文六年十月御調理富山絵図』寛文六年（1666年）　富山県立図書館蔵



第74図　『越中富山御城下絵図』安政元年（1854年）　富山県立図書館蔵

C-1区
SD08
C-2区
B区
SD79
石組み水路
A-1区
A-2区


C-1区
SD08
C-2区
B区
SD79
石組み水路
A-1区
A-2区

側にクランクして町屋の地境の排水溝につながるが、安政絵図では地境の排水溝が直線的に町屋の地境の排水溝に直結している。安政絵図では、戸田中務家と空白地における地境の排水溝が東側に移動し、天保から安政にかけて戸田家の敷地が東側に移動していることが分かる。それに加え、天保絵図にて合致した地境の排水溝（SD08・79）が天保年間（1830年～1844年）から安政元年（1854年）までの間に地割が変化する。その際に、武家屋敷地境の排水溝（SD08・79）を埋め、さらにその後埋められたSD08上にSK10・11・12を構築し、ゴミを廃棄したものと考えられる。以上のことから、SD08は天保（19世紀前半）までの遺構であり、SK10・11・12は安政（19世紀中頃）以降の遺構であることがいえる。また、SD08より新相を示し、SK10・11・12とほぼ同時期に構築されたと考えられるSK53より「戸田式部」と墨書された木札が出土したことも、戸田家の屋敷地であったことを物語っている。しかし、ここで疑問が残るのは、作りかえを行なったそれ以前の武家屋敷地境の排水溝が本調査区から検出されなかったことである。

４枚の絵図を比較してみると、天保絵図以外の絵図では地境の排水溝は東側に位置しており、本調査区C－2区の中央において検出されるはずである。しかし実際に検出されていないのは、第Ⅲ章基本層序において述べたように、C－2区中央付近にて地山が急変することに関係があると考える。これは、比較的新しい時期に地盤改良が行なわれていた可能性が指摘できる。C－2区中央からB区にかけて攪乱が多く、江戸時代の明確な遺構が検出されなかったのもそのためであろう。

石組み水路の下層から古相の溝が検出された（第Ⅳ章第17図断面図参照）。これは石組み水路を構築する前の背割下水であると考えられる。背割下水は普遍的に存在するものの、石組み水路以前の背割下水が周辺からは検出されなかった。これは、造成や水路の改変などにより作り変えが行われていたとしても、ほぼ同位置において作り変えが行なわれていたと考える。最終的なものが今回検出された石組み水路であり、その帰属時期は19世紀前半のものである。

また、武家屋敷地境の排水溝は各絵図において移動していたのに対し、町屋敷地の地境の排水溝の位置が変化していないことが見て取れる。町屋敷地の内部の区割りなどは変化していたのであろうが、区画そのものは変化していないのではないだろうか。個々の武家屋敷地が拡大・縮小を繰り返しており、その都度地境の排水溝の移動、作り変えが行われていたと考える。藩士の知行の増減により敷地が増減していたか、あるいは地位の向上・転落のため移動があったのかは不明であるが、武家屋敷地の区画が頻繁に変化していたことには間違いない。以上絵図を基に検証を行なった。武家屋敷地と町屋敷地では土地利用の仕方が若干違い、武家屋敷地は転出入が多く地割りが頻繁に変化するのに対し、町屋敷地は一つのブロック内においてはほとんど地割りが変化していないのではないだろうか。武家屋敷地での土地利用法や町屋敷との関係、石組み水路の流水方向など検討する予知がある。今後更なる考古学的資料、文献資料等の充実化を図り考究の進化を図りたい。（小川）

第３節　板絵の内容について

SK10・11・12のサブトレンチから出土の板絵は、左側面に３ヶ所の釘跡（おそらくは竹釘と推定される）があり、右側縁は割れた痕跡を示す。このことから絵札の右側には絵柄が続き、全体としては17.2cm（５寸７分）四方の板絵で、左右または周囲に額板を配していたと推定される。

描かれている絵柄は、梅鉢紋を染め抜いた紋幕、束帯姿の武官、吽形の狛犬で構成される。

束帯姿の武官は、纓の部分が垂れている垂纓の冠を被り、冠の左右には馬毛の緌（おいかけ）

を付け、長弓を携え、３本の飾矢を入れた胡籙（ころく）を腰に着ける。衣服は、袖が両側に張り出し長い袍を着用し、袴を穿いている。

狛犬は獅子顔で、耳をだらりと下げている。頭頂には一角があり、口は左右に開いて歯を僅かに見せる。

これらの構成は、神社幕＋随神＋狛犬と理解される。随神は主神を護持するもので、向って左に描かれたこの武官は矢大臣（右大臣）を表現している。随神の右上、板絵中央には主神が描かれるはずであるがここでは欠損している。

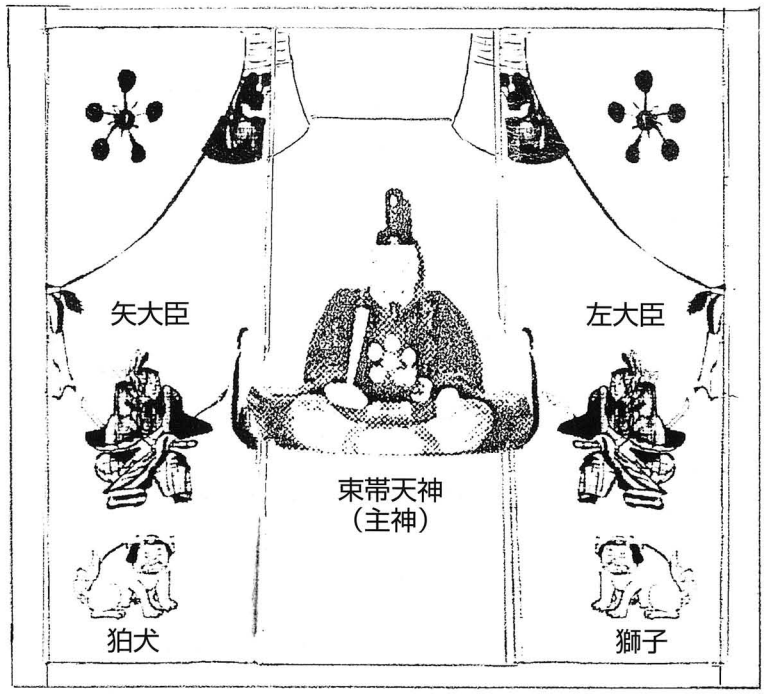
主神は、紋幕に梅鉢紋を使用していることから、天神（菅原道真公）と推定される。富山藩では初代藩主前田利次が天神町浄禅寺境内に天満宮を置いて祈願所としており、天神信仰に篤かったといわれる。

以上より欠損している右３分の２を復元すると第75図のようになる。中央の主神である天神は束帯姿で、その右下には矢大臣に対置して束帯姿の左大臣、その下には阿形の獅子姿の狛犬が復元されるであろう。

このような神社幕＋主神＋随神＋狛犬を上から順に描く形式の図像は、室町期の明神図以降に多くみられる。

富山においては、弘化３（1846）年以降土天神と呼ばれる土製天神人形が流行する。これは主に武家・大商家などの上流階級に好まれたもので、土天神＋左大臣＋右大臣＋狛犬＋燈籠で１セットとなる。紋幕と燈籠は副次的な構成要素として捨象すればその基本構成は板絵と一致しており、天神人形のセットが板絵からそれを具現化した土製神人形のセットへの変遷が看て取れる。

このような形で天神信仰は富山において普及が始まったとみられる。出土した板絵は、藩政期の上流階級における天神信仰形態を示す資料として重要であるといえる。（古川）



第75図　天神板絵の復元試案

第４節　主要遺構から出土した下駄の形態分類

各遺構から多数の下駄が出土した。特にC－2区のSK10・11・12、及びSD79・08（武家屋敷地の地境の排水溝）から集中的に出土した。富山城跡において近世の下駄がまとまって出土した例がなく、比較資料が希薄である。そこで、ここでは下駄にどのような形態が存在するかを各属性の形状ごとに分類を行い、検討を加えて行く。また、遺構の帰属時期は第2節での検討及び肥前陶磁器、越中瀬戸焼から18世紀後半から19世紀前半に比定されることより、本遺構から出土した下駄もこの帰属時期に属すると考えられる。

まず整理作業の結果確認された個体数は201点である。この中には完形もしくはそれに近い状態のものから、遺存率50%前後の状態の悪いものも含まれる。これらを分類するにあたって設定した基準は以下の通りである。

Ⅰ．全体の形状　　一木連歯下駄　　下駄
　　下駄以外
　　差歯下駄　　陰卯下駄
　　露卯下駄

本項で言う「下駄」とは「台木に三孔をあけ、逆Y字型の鼻緒をすげた歩行や労働用の履物」のことである。本分類中、「一木連歯下駄－下駄以外」としたものは、外見は、「革靴の底」に類似した形状で、緒穴も確認されない。台部上面数箇所に何かを固定した釘が残っているものもあり、完形のものが出土しなかったため確認できないが、何らかの「履物」であろうことは想定できる。本項で扱う「下駄」とは異なるものである。

Ⅱ．台部の形状　　平面形状　　長方形
　　前後が曲線（小判形）
　　前後一方が曲線（半小判形）
　　不明
　　断面形状　　四角形
　　五角形
　　逆台形
　　不明

台部の形状については、平面形状と断面形状の２点で分類を実施した。不明としたものは欠損等により、全体形状が確認できないものである。断面形状について、「四角形」としたものは、正確には「台形」に近いものも含まれる。五角形としたものは「台形の下底に三角形の底辺を合わせた」様な形状のものである。逆台形としたものは「上底の方が下底より長い台形」状のものである。

Ⅲ．歯部の形状　　銀杏歯
　　四角形
　　不明

「銀杏歯」とは上辺から下辺に向かって次第に広がる、「台形状」の平面形状のものである。「四角形」は上辺と下辺の長さがほぼ同一のものである。「形状不明」としたものには、遺存状態が不良で判断不可能なものと、欠落により不明なものの両方が含まれる。

Ⅳ．装飾の有無　　漆塗り有
　　漆塗り無

出土品の中には漆塗りのものが多数確認された。遺存状態の悪いものも多く含まれ、「漆塗り無」としたものの中には、漆が塗られていた可能性が窺えるものがあるが、本項目では「漆の皮膜が肉眼で確認できるもの」のみを「漆塗り有」と分類した。

Ⅴ．後緒穴の位置　後歯前方
　　後歯後方
　　不明

鼻緒をすげる緒穴のうち、前緒穴については古代のものでは、右足用は左側に、左足用は右側に偏って作られた例が各地の出土例で確認されているが、本調査区の帰属時期である近世以降では通常中央部に作られる。本調査区の出土例にも偏ったものは確認されず、すべて中央部に作られている。後緒穴については、上記2種が確認された。不明としたものは、該当箇所付近が欠損しているため、確認できないものである。

以上の各分類項目を組み合わせると、500種類以上が想定されるが、本調査区から出土した下駄で確認されたのは54種類である。さらに「Ⅳ．装飾の有無」以外の項目が同一で、装飾のあるもの（漆塗り有）を「本種」、無いものを「亜種」として分類する。ただし、上記条件で装飾の無いものだけが確認された場合は、それを本種とした。種類は39種15亜種となる。その内、遺物図版を掲載したものは15点である。

〔出土品の傾向と検討〕

ここからは分類結果を基に、本調査区から出土した201点について、形状の傾向を見てみる。

検討１　全体の形状

比較１	対象点数	201点
	結果	一木連歯：差歯下駄＝53点（26.4%）：148点（73.6%）
比較２	対象点数	148点（差歯下駄総数）
	結果	陰卯下駄：露卯下駄＝137点（92.6%）：11点（7.4%）
データ１	一木連歯の内、下駄と判断されるもの	28点
データ２	資料総数に占める一木連歯下駄の割合	13.9%

比較1及びデータ１・２から分かるように、圧倒的に差歯下駄が多く、さらに比較２から陰卯下駄の割合が最も多いことが分かる。こうした状況が本調査区における特徴的な傾向と言えるかどうかは、今後、他の遺跡との比較が必要であろう。

検討２　台部の形状－平面形状

比較１	対象点数	127点（台部形状不明49点＋下駄以外25点）
	結果１	長方形：小判形：半小判形＝ 52点（40.9%）：38点（29.9%）：37点（29.1%）
	結果２	長方形：それ以外＝52点（40.9%）：75点（59.1%）
比較２	対象点数	99点（差歯下駄）
	結果１	長方形：小判形：半小判形＝ 44点（44.4%）：36点（36.4%）：19点（19.2%）
	結果２	長方形：それ以外＝44点（44.4%）：55点（55.6%）
比較３	対象点数	28点（一木連歯下駄）
	結果１	長方形：小判形：半小判形＝

8点（28.6%）：2点（7.1%）：18点（64.3%）

結果2　　長方形：それ以外＝8点（28.6%）：20点（71.4%）

比較1から分かるように、平面形状を長方形、小判形、半小判形の3種類で比較すると、長方形を呈するものが他のものよりも多い傾向を示す。これを長方形とそれ以外で比較すると、長方形を呈するものが少ないことが分かる。これは比較2をみると分かるように、差歯下駄でも同様の傾向を示す。ただし、これに関しては、全体の対象点数に占める差歯下駄の割合が高いため、比較2の結果が比較1の結果に大きく影響している可能性がある。

次いで比較3をみると、結果2は比較1・2と同様の傾向であるが、結果1を比較2－結果1と比べると、異なる傾向が見て取れる。差歯下駄では長方形が最も高い割合を示したが、一木連歯下駄では半小判形が高い割合を示す。これがいかなる理由によるものかは今後の検討課題であり、また差歯下駄の資料点数（対象点数）が少ないため、断定は出来ないが、本出土品で見る限り、一つの特徴といえる。

検討3　台部の形状－断面形状

比較1　　対象点数　　176点（分類上、下駄以外とした25点を除く。）

結果1　　四角形：五角形：逆台形：不明＝

28点（15.9%）：139点（79.0%）：6点（3.4%）：3点（1.7%）

比較2　　対象点数　　28点（一木連歯下駄）

結果　　四角形：五角形：逆台形：不明＝

28点（100%）：0点（0%）：0点（0%）：0点（0%）

比較3　　対象点数　　148点（差歯下駄）

結果　　四角形：五角形：逆台形：不明＝

0点（0%）：139点（93.9%）：6点（4.1%）：3点（2.0%）

台部の形状の内、断面形状についてその傾向をみると、特徴的な傾向が分かる。ここでは下駄以外とした25点を除く176点を対象とした。まず総数176点に対する割合を見ると、断面五角形を呈するものが最も多く、79.0%を占め、次いで断面四角形が15.9%を占める。これを一木連歯下駄と差歯下駄に分けてその割合を比較してみると、一木連歯下駄では28点全て断面形状が四角を呈する。一方、差歯下駄では93.9%にあたる139点が断面五角形を呈する。断面逆台形を呈するものは差歯下駄で6点確認されたのみで、一木連歯下駄には類例は確認されなかった。

検討4　歯部の形状

比較1　　対象点数　　80点（歯部が遺存する状態で出土したもの）

結果　　銀杏歯：四角形＝74点(92.5%)：6点(7.5%)

比較2　　対象点数　　74点（銀杏歯のもの）

結果　　差歯下駄：一木連歯＝56点(75.7%)：18点(24.3%)

比較3　　対象点数　　6点（四角形の歯）

結果　　差歯下駄：一木連歯＝0点（0%）：6点（100%）

比較1を見ると、圧倒的に銀杏歯が多く、四角形の歯は極少数であることが分かる。これに加えて、本調査区からは「歯部のみ」の状態で出土したものも多数あり、それらの中から四角形のものは確認されていない。このことから、四角形の歯もしくは四角形の歯を持つ下駄は、特殊な下駄の可能性が窺える。その「特殊な」状況の一旦として、比較2・3を見ると、銀杏歯は差歯

下駄・一木連歯両方で使用されているが、四角形の歯は差歯下駄では使用されていないことが分かる。こうした状況をみると、四角形の歯は一木連歯にのみ使用された可能性が考えられ、「歯部のみ」の出土例の中に四角形の歯が確認できないのは、使用例が一木連歯に限られるためとも考えられる。

検討５　装飾の有無

比較１	対象点数	176点（下駄総数）
	結果	装飾有り：装飾無し＝41点（23.3%）：135点（76.7%）
比較２	対象点数	28点（一木連歯）
	結果	装飾有り：装飾無し＝11点（39.3%）：17点（60.7%）
比較３	対象点数	148点（差歯下駄）
	結果	装飾有り：装飾無し＝30点（20.3%）：118点（79.7%）

比較１・３は概ね似通った数値となっている。比較２における一木連歯の装飾有りの比率が若干高くなっているが、対象点数が少ないこともあり、３比較結果を通じて、装飾有りの比率は２～３割程度である。

検討６　後緒穴の位置

比較１	対象点数	176点（下駄総数）
	結果	後歯前方：後歯後方：不明＝ 85点(48.3%)：74点(42.0%)：17点(9.7%)
比較２	対象点数	28点（一木連歯）
	結果	後歯前方：後歯後方：不明＝ 21点(75.0%)：1点(3.6%)：6点(21.4%)
比較３	対象点数	137点（陰卯下駄）
	結果	後歯前方：後歯後方：不明＝ 64点(43.2%)：63点(46.0%)：10点(7.3%)
比較４	対象点数	11点（露卯下駄）
	結果	後歯前方：後歯後方：不明＝ ０点(０%)：10点(90.9%)：１点(9.1%)

比較１は下駄総数を対象に比較したものであるが、比較３と類似した数値を示している。これは全体に占める、比較３の対象である陰卯下駄の比率が高いためであろう。その比較３をみると、陰卯下駄においては後緒穴の位置は後歯の前後、ほぼ同比率である。比較２・４はいずれも対象点数が少数であるが、それぞれ特徴的な数値を示している。まず比較2であるが、対象は一木連歯28点である。結果をみると、75%が後歯前方に後緒穴が位置することが分かる。後緒穴の位置が確認できない６点を除くと、その比率は95.5%に上り、ほぼ全てが後歯前方に後緒穴が位置する結果となる。対して比較4では不明の1点を除くと全て後歯後方に後緒穴が位置することが分かる。

〔まとめと今後の検討課題〕

以上の各検討結果から、最も比率の高い点・特徴的な点を抽出すると次のようになる。

１．全体形状は差歯陰卯下駄

２．台部の形状は、平面長方形・断面五角形

３．歯の形状は銀杏歯

4．装飾は無い

5．後緒穴の位置は後歯の前後いずれか

これらの条件に全て充当するものを『下駄分類集計』に照らし合わせてみると、19点がこれに該当する。これを仮に本調査区出土品のモデルタイプとすると、全体に占める割合は9.5%に過ぎず、下駄ではないと判断した25点を除く176点に対しても、10.8%にしか過ぎない。従ってモデルタイプ以外の約90%については、上記5条件の内いずれか（もしくは複数）が異なるタイプということになる。このことからも、本調査区出土品が多種多様に及んでいる状況が分かる。このような状況が起こる一因として、江戸期に入り世情が安定するに従い、下駄が広く一般に普及していったことが挙げられる。特に安永・天明期以降、男性の間にもそれまで女性が使用していたような塗下駄を履く風習が広まったとされ、他人と異なる下駄を求める傾向が強まり、多種多様な下駄が発生したとされる。こうした時代背景に加え、地域間での製作・構造上の差異もあったものと思われる。

今回出土した多数の下駄に関する資料的価値を高めるための今後の検討課題として、以下のようなことが考えられる。

1．同地区異時期の遺跡からの出土遺物と比較する。

2．同時期他地区の遺跡からの出土遺物と比較する。

こうした作業を実施することによって、本調査区出土の下駄出土状況が一般的状況なのか、本調査区に特徴的な傾向と言えるのかが明確になってくるものと思われる。しかしながら、本調査区のように多量の下駄が出土した遺跡は少なく、比較対照するための好資料は限られている。

そうした中で、本項では石川県金沢市の『安江町遺跡』（金沢市教委　1997）・『本町一丁目遺跡』（金沢市教委　1995）からの出土遺物との比較を試みたい。上記2遺跡を比較対照に選定した理由は、帰属時期が比較的近いことと、江戸初期にいたっては富山城が加賀藩領内であったこと、分藩したが同じ前田家領内という特異性もあり、また、城下町の遺跡であるということに性格の類似性を見出せるためである。資料を比較する際の分類方法であるが、それぞれ異なる分類方法が採られており、3遺跡の内1遺跡もしくは2遺跡にしか出土していない分類・名称が使われている。また、上記金沢市内2遺跡については、報告書記載の図面で比較するしかなく、細部に渡る検証は困難である。その為、3遺跡に共通する差歯陰卯下駄・差歯露卯下駄・一木連歯の3分類を対象とした。下表がその結果である。

まず上記表についてだが、各遺跡とも1段目が各分類に属する点数である。2段目は全体数から「その他」に分類された点数を引き、その点数に占める各3分類の割合である。「その他」に分類された資料については、各遺跡によって分類項目（名称）が異なる為、比較対象が出来ないことから、除外した。3段目は差歯下駄と一木連歯の比率である。

この表から以下の点が読み取れる。

1．本調査区では差歯陰卯下駄、安江町遺跡では一木連歯、本町一丁目遺跡では差歯露卯下駄が、それぞれ最も高い比率を示す。

2．陰卯・露卯あわせた「差歯下駄」と一木連歯の比較では、本調査区と本町一丁目遺跡が近い数値を示す。（一木連歯の比率が類似する。）

3．安江町遺跡・本町一丁目遺跡と比較すると、本調査区の差歯露卯下駄の数値が極端に低い。（比率が1桁のものはこれだけである。）

下駄の比較検討					
	総点数	差歯陰卯	差歯露卯	一木連歯	その他
本調査区	201点	137点	11点	28点	25点
	176点	77.80%	6.30%	15.90%	
		84.1%		15.9%	
安江町	107点	14点	26点	35点	32点
	75点	18.70%	34.70%	46.70%	
		53.3%		46.7%	
本町一丁目	37点	8点	20点	4点	5点
	32点	25.00%	62.50%	12.50%	
		87.5%		12.5%	

第17表　下駄の比較検討表

まず上記１についてだが、時期差の点で考えると、安江町遺跡については出土した文字資料の中に19世紀中期から後期に市内に所在した商家の屋号等が含まれる。また本町一丁目からは19世紀前半のゴミ穴遺構が多数検出されている。従って地域差も少なく、時期差も極めて少ないことが分かる。本調査区については18世紀後半～19世紀前半の遺物が出土しているが、中心は19世紀前半であると考えられ、上記２遺跡と大差ないことが分かる。

上記２については本調査区と本町一丁目遺跡が似通った比率を示している。さらに安江町遺跡についても、差歯下駄が多い点では一致する。これについては本調査区と本町一丁目遺跡の状況から、富山と金沢という地域差は見られず、先に述べたように、この３遺跡間で大きな時期差は見られない。このように地域差・時期差が少ない状況において、比較結果が似通った数値を示すのは当然の結果であろう。

ただし上記３を見ると、上記２に関連して一つの特徴的な状況が見て取れる。差歯下駄が多い点は3遺跡に共通する状況であるが、本調査区では差歯露卯下駄の比率が極端に低い。差歯露卯下駄の比率を見ると、安江町遺跡では一木連歯下駄の46.7%に次いで34.7%の比率を示す。本町一丁目遺跡では最も比率が高く、62.5%を示す。この状況は先に「地域差・時期差がなければ当然似通った数値を示す」と述べたところであるが、やはり何らかの差異があると見るべきであろう。これに関連する一つの状況として本町一丁目遺跡の考察の中で『江戸では明暦（1655～57）から貞享（1684～87）にかけて露卯下駄から連歯下駄に主流が変化していくとされているが、金沢では江戸時代初期の段階の様相は当遺跡からわからないが、18世紀後半以降は露卯下駄が主流のようである』（金沢市教委　1995）と記載されている。これについて、何通りかの捉え方ができる。１つは「江戸の様相変化に影響を受けることなく、金沢は独自の様相を呈する」というものであり、もう１つは「江戸の様相変化が金沢に伝播するには時間が必要で、同時期に移行しない」というものである。本町一丁目遺跡において62.5%を示した露卯下駄の比率が安江町では34.7%に低下し、逆に本町一丁目遺跡で12.5%であった一木連歯の比率が安江町遺跡では46.7%に上昇する状況を見ると、やはり金沢においても江戸の様相変化の影響を受け、伝播する時期こそ遅れたものの、次第に露卯下駄から一木連歯下駄に移行していったのではないだろうか。陰卯下駄については7%の差があるものの、2遺跡間で大きな変化が見られず、周囲の状況変化に左右されない（ある種、流行に左右されない）使用状況にあったのではないだろうか。

一方、本調査区において陰卯下駄が極めて高い比率を示す状況は、やはり何らかの地域的制約に

よるもの、つまり地域的特色といえるのではないだろうか。ただし、富山市においては富山城跡から下駄が出土した発掘調査例が少なく、本調査区の調査成果がそのまま富山城の状況を示しているとはいえない。今後調査例が増加し、加えてこれまでに小規模で実施されている各地の調査成果を再検討するなどし、さらに詳細な富山城の状況を把握する必要があろう。また同じ北陸に位置する福井県の状況なども比較対象の資料として検討することも、今後必要となると思われる。

〔下駄歯部に関する若干の考察〕

最後に本調査区から出土した中で差歯下駄の歯部のみが多く出土した。そこで、整理作業中に気付いた点について以下若干の考察を述べる。

本調査区では台部から欠落した歯部が133点出土している。それらを集計したものが表17である。出土した歯部は全て銀杏歯である。計測箇所は上端・下端のそれぞれの幅、磨耗により擦り減っているものが大半であるが上端から下端までの高さ、中心部分で計測した厚さの４箇所である。表中「上辺破損・下辺破損」としたものは、破損の程度が高く、本来の数値が推定不可能なものである。破損の程度が低く、本来の姿が復元可能（本来の数値が推定可能）なものは「上辺復元・下辺復元」とした。

ここでは以下の２点について述べることとする。

A．歯部上端の形状について

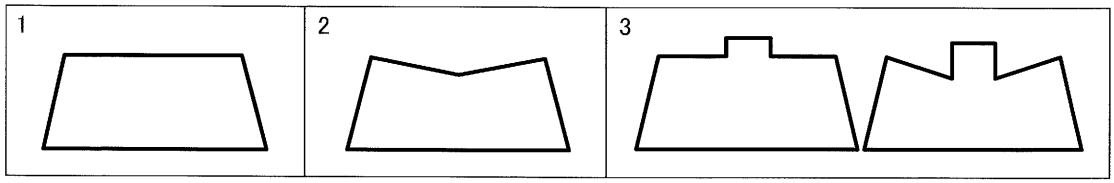
B．歯部と台部の固定方法について

まずAについてだが、整理作業中、歯部上端の形状が以下の３種類あることが確認された。(図76)

１．上端部が直線的なもの　92点

２．上端部中央が凹み、V字状を成すもの　33点

３．上端部中央に凸部があるもの　８点



第76図　下駄歯部の形状

３については露卯下駄の歯部である。８点中７点については、上端部左右から中央にかけては直線的で、中央部が直角に立ち上がり、凸部を成す形状であり、残り１点については、上端部左右から中央にかけて緩やかに凹み、中央部が鋭角的に（台部に関しては直角的に）立ち上がり、凸部を成す形状である。

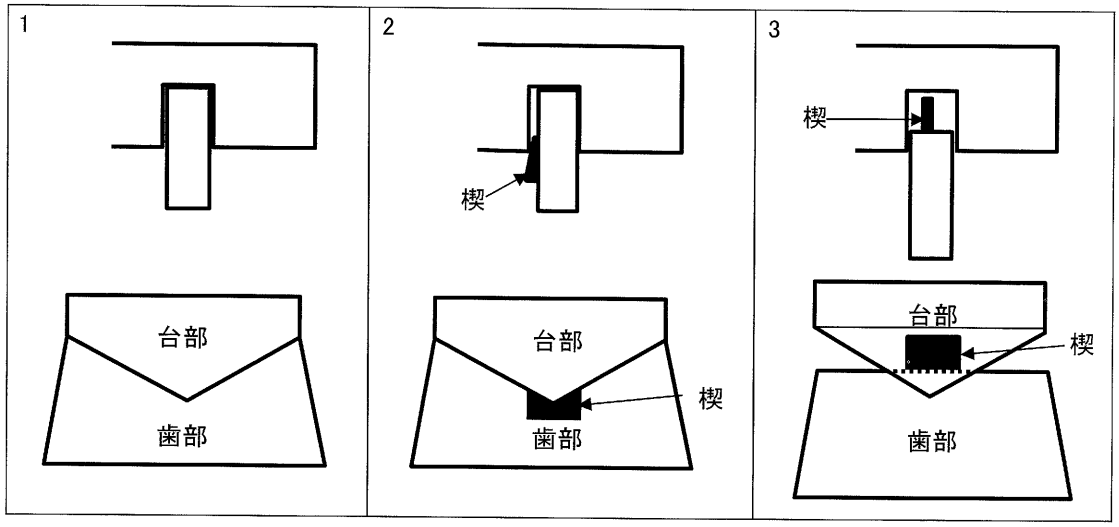
上記３形状と台部の形状（断面形状）との関係であるが、整理作業中、台部と歯部が接合した状態のもの数点について、歯部を抜き取って確認した結果、全てについて確認できた訳ではないが断面形状が五角形、つまり下部が「V字形」を成すものについては、歯部上端部が上記1のものと２のものの両方が確認された。従って、一見して関連性が窺える両者の形状的組み合わせについては、単に表面的形状に関しては、関連性は確認できなかった。

次にBについてだが、台部と歯部の固定方法について、以下の３種類が確認された。

１．台部に溝を掘り、歯部をはめ込んだだけのもの。

２．歯部の外側、台部との隙間に楔状の木片を差し込んだもの。

3．歯部上端、台部の溝の内側にあたる部分に楔状の木片を打ち込んだもの。

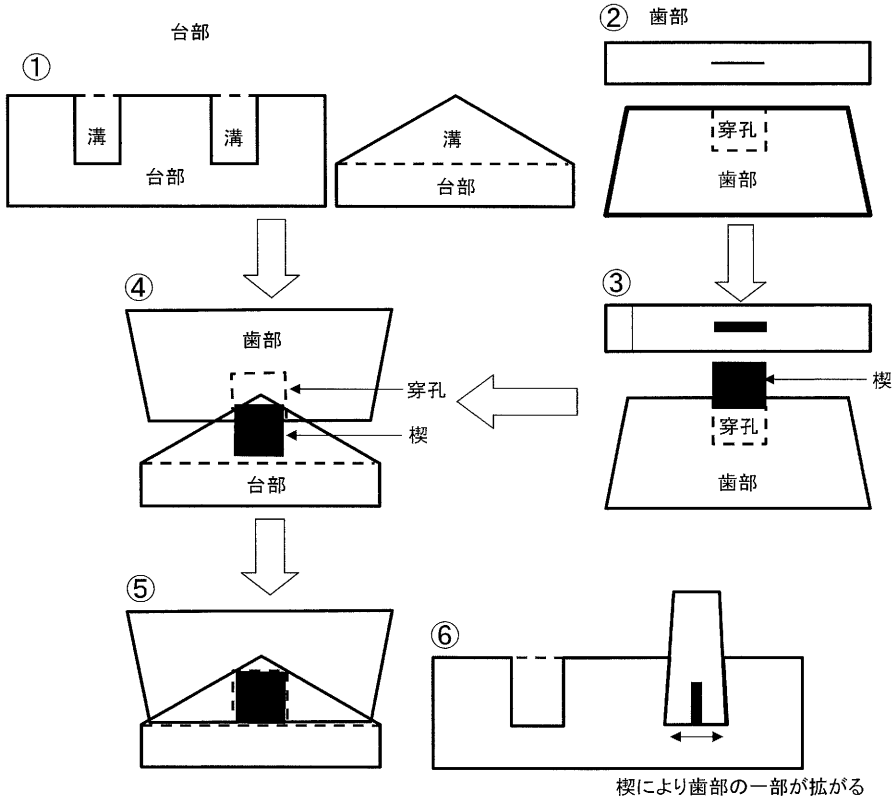


第77図　下駄歯部と台部の固定方法

上記３種類についてだが、厳密には歯部のみを観察した結果得られた「推測」によるものが含まれる。２については、歯部上端の前後いずれかに楔状の木片によるものと思われる圧痕が認められたものも含まれる。圧痕は下駄を正位で置いた場合の溝下辺部にあり、外側から（台部と歯部の隙間から）何かが打ち込まれた状況を示すものである。３については、接合しているものからは確認されていないが、台部の溝の一部に圧痕が認められるものがあった。それは下駄を正位で置いた場合、溝上辺部にあり、外側から打ち込まれたものではなく、何かが挟まったような状況を示すものである。1については、2・3との比較から、楔状木片や釘などを使用して固定した痕跡が認められないものである。

３については推測する製造過程に基づき、さらに説明する。図78の①～⑦はその製作工程順である。

① まず台部に歯部をはめ込むための溝を掘る。
② 歯部上面の左右中央部付近に楔を打ち込むための狭い穿孔を施す。
③ ②の穿孔に軽く楔を打ち込む。
④ 楔が上部に露出した状態で台部の溝に歯部をはめ込む。
⑤ 歯部を台部に打ち込む（はめ込む）ことにより、露出していた楔が歯部内に入る。
⑥ 楔が入ったことにより、歯部上端の一部が外側に圧迫され膨らむ。
⑦ 膨らんだ歯部により、台部の溝上辺部に圧痕が残る。



第78図　下駄歯部製造過程

以上はあくまで推定であり、上記製造過程には、本来の手法と異なる部分があるかもしれない。ここでは、上記２の状況と台部の溝上辺部に残された圧痕について検討すべく、このような状況が起こり得る製造方法を推定したものである。

３のような製造方法（固定方法）が一般的な方法であるのか、現在も使用される方法であるのか、詳細な調査は今回出来なかったが、現在は上記1の方法が主流と言えるようである。当時上記３種類の方法がどのように使い分けられていたか、本成果からは判明しないが、今後の資料増加や民俗学的な調査事例などとも合わせれば、明らかになるであろう。

〔編年について〕

本調査区出土品について編年を試みたが、以下の2つの理由から不可能であった。

１．遺跡自体の帰属時期について、時期幅が狭いこと。（中心は19世紀前半で、若干18世紀後半・19世紀中頃の遺物も見られるが、18世紀後半のものについては伝製品として使用されている可能性が高く、該期の遺構が確認できない。19世紀中頃については資料数が少なく、比較対照ができない。）

２．微妙に時期差がある遺構間で、同様の（同種の）資料が得られている。

北陸の研究成果を調査したところ、石川県では中世の資料に関しては三浦ゆかり氏等が報告されている。しかし、近世の資料に関してはほとんど集成が進んでいない。同期の研究成果として、江戸の資料を得ることが出来たので、今回はそれを紹介したい。

『江戸の考古学』の中で、古泉氏は江戸の下駄の変遷を以下のように報告されている（古泉1987）。

1．露卯下駄は江戸初期から明暦ころにかけて盛行していた。しかしそれ以降次第に減少していく。

2．連歯下駄は江戸初期から明暦ころにかけては少なかった。しかし明暦以降急激に普及し、江戸後期にかけても増加していく。

3．陰卯下駄は、少なくとも18世紀後葉以前にはほとんど使用されていなかった。

これを見ると、本遺跡の帰属時期である19世紀の江戸の様相は、連歯下駄が盛行し、差歯下駄では陰卯下駄が多いことが分かる。露卯下駄から陰卯下駄への変換期について同氏は、『図説江戸考古学研究辞典』の中で、「江戸の出土資料から見るかぎり、露卯から陰卯への変換は『我衣』や『守貞謾稿』の記述よりはるかに遅く、1800年前後に急速に進んだと考えられる」と述べられている（柏書房江戸遺跡研究会　2001）。

ここで本調査区の状況に再び立ち返って見ると、差歯陰卯下駄が多く、露卯下駄が少ない。また連歯下駄が一定量出土していることから、江戸文化の影響を受けているとすれば、露卯下駄から陰卯下駄への変換に関してはほぼ同時期に移行したものと考えられ、連歯下駄の普及が遅れている状況が見て取れる。先に述べたように石川（金沢・加賀）においては露卯下駄が多く出土することから、同じ前田家の領地であっても、加賀藩と富山藩では中央の文化の伝播に差異があることが窺える。ただしこれはあくまで、「地方文化が中央文化の影響で変化する」と仮定した場合の話であり、影響を受けず、独自に発展したと考えるならば、状況は異なり、地方の独立性が際立つ結果ともいえよう。

（藤井）

第５節　主要遺構から出土した陶磁器の組成

ここでは遺物の出土量が多い石組み水路（背割下水）及び、第２節で述べたように、遺構の年代がある程度推察されたC－2区のSK10・11・12、及びSD08・79（武家屋敷地境の排水溝）から出土した陶磁器の産地別構成比率・器種別構成比率・産地別構成比率を算出した（表18～表20）。出土遺物全体からどの産地の陶磁器を多用しているのかについて数値化した。それらをまとめ、各遺構の性格を考えてみたい。石組み水路は遺物量も多いが、そのほとんどが流れ込みの遺物であるため、一括性が乏しい。しかし、本調査区から検出された遺構の中で最も出土遺物総数が多いことから、今回は比較資料として取り扱うこととする。

なお、各遺構から出土した陶磁器の遺存状態は良好であるものの、口縁部のみ、もしくは底部のみが遺存しているものが多いため、各比率の算出には口縁部計測法、底部計測法を併用した。用いる方法により若干の測定誤差は認められるが、両方法から確実に指摘できる事を特徴とした。

産地別構成比率を算出するにあたり、遺物の分類には過度の細分は行わず、越中瀬戸・伊万里・唐津・瀬戸美濃・その他の５分類とした。その他の中には肥前系陶磁器、京・信楽など含まれるが、各数量が少ないためその他とした。また細片のため産地の特定が不明確のものや、産地不明の陶磁器などもその他とした。

また、近世陶磁器の器種は多種多様に富むため、産地別比率では基本的日常雑器である碗・皿・擂鉢・甕の4分類とした。

産地別器種構成比率では、擂鉢・甕は個体数が少なく、口縁部・底部も大きいため、1点の差が顕著に表れ、大きく比率数値の変化が生じてしまう。よって今回は数量が多く、比較的分類の行いやすい碗・皿のみとした。以下、構成比率を算出した各遺構について個々に詳細を述べる。

〔石組み水路〕（第18表）

産地別構成比率では、伊万里・越中瀬戸・唐津が約30%ずつと主体をなし、瀬戸美濃・その他の遺物は約10%程度である。（総数：口縁部計測法365.535個体、底部計測法570.315個体）

器種別構成比率では、碗が50%前後、皿が40%強と大半を占め、擂鉢、甕は10%以下と極少数である。やはり、日常雑器としての碗・皿が大半を占める数値が算出された。（総数：243.415個体、394.655個体）

産地別器種構成比率では、碗は伊万里45%と約半数を占め、次いで唐津の40%前後、越中瀬戸、瀬戸美濃に至っては５%以下と低い数値を示す。皿は伊万里が15%強、越中瀬戸が50%と半数を占める。唐津も20%前後、瀬戸美濃、その他に関しては10%以下と低い数値を示す。（総数：碗－口縁部計測法108.485個体、底部212.7個体、皿－口縁計測法99.92個体、底部計測法175.755個体）

〔SD08・79〕（第19表）

産地別構成比率では、伊万里が多く40%前後、次いで越中瀬戸は20%前後、唐津が10%以下、瀬戸美濃に至っては3%強と低い数値を示す。（総数：口縁部計測法274.93個体、底計測法446.35個体）器種別構成比率では、碗が60%強と半数以上を占め、皿が40%弱とやはり碗・皿が大半を占める。擂鉢、甕は5%以下と極少数である。（総数：口縁部計測法172.46個体、底部計測法320.24個体）

産地別器種構成比率では、碗は伊万里60%強と約半数以上を占め、唐津・瀬戸美濃は10%以下、越中瀬戸は１%と低い数値を示し、伊万里が圧倒的に多く、他は極少数である。皿は越中瀬戸が最も多く約50%と半数を占め、伊万里が30%弱、唐津は４%前後、瀬戸美濃は１%と低い数値を示す。（総数：碗－口縁部計測法107.53個体、底部計測法171.85個体）

〔SK10・11・12〕（第20表）

産地別構成比率では、伊万里が多く30%強、次いで越中瀬戸は15%前後、唐津が10%強、瀬戸美濃に至っては４%強と低い数値を示す。やはり伊万里が主体をなし、次いで越中瀬戸、唐津となり両者の割合は少なくほぼ同数である。瀬戸美濃は主体をなさない。（総数：口縁部計測法227.76個体、底部計測法219.28個体）

器種別構成比率では、碗が60%前後と半数以上を数え、皿が40%弱とやはり碗・皿が大半を占める。擂鉢、甕は５%以下と極少数である。（総数：口縁部計測法138.58個体、底計測法320.24個体）

産地別器種構成比率では、碗は伊万里が50%と約半数を占め、唐津10%強、越中瀬戸・瀬戸美濃は10%以下と低い数値を示す。伊万里が半数と多く、次いでその他、他は極少数である。皿は伊万里・越中瀬戸が25%前後であり、唐津は３%強、瀬戸美濃は１%と低い数値を示す。（総数：碗－口縁部計測法24.19個体、底部計測法119.61個体）

〔3遺構のまとめ〕

以上、石組み水路（背割下水）、SD08・79（武家屋敷地境の排水溝）、SK10・11・12（ゴミ穴）の３遺構の構成比率について比較検討する。いずれも19世紀前半（幕末）の遺構と考えられる。

産地別構成比率では、３遺構の統計は不規則である。伊万里は30～40%と全体の約３割を占める。越中瀬戸は20%前後と比較的安定した数値を算出するが、唐津はバラつきがあり、石組み水路は30%と高い割合を占める。全体の傾向としては、伊万里が主体であり、越中瀬戸は20%程度、瀬戸美濃は極少数で主体をなさないことが分かる。これは、流通の問題、あるいは趣味趣向、用途などの違いであると考えられ、検討する余地はある。

器種別構成比率では碗が3遺構とも50～60%と半数以上を占め、皿が30～40%と碗・皿が主体をなす。日常雑器としての碗・皿が主体をなす。

産地別器種構成比率では、碗では伊万里が3遺構とも50%の約半数を占め、越中瀬戸、瀬戸美濃の割合は低い。石組み水路から出土した唐津は30～40%と高く、SD08・79及びSK10・11・12は10%前後と低い数値である。伊万里が主体であり、越中瀬戸・瀬戸美濃は主体をなさないことには変わりない。

皿は伊万里が3遺構とも20%前後であり、一定量使用していたことが分かる。越中瀬戸の割合は石組み水路とSD08・79に関して50%と碗と比較して増加する。SK10・11・12は越中瀬戸の割合が20%程度と伊万里とほぼ同数だが、碗と比較するとやはり増加している。唐津・瀬戸美濃はやはり主体をなさない。碗は伊万里を主体として、唐津などを用いるのに対し、皿は越中瀬戸を多用していたことが分かる。また、擂鉢・甕については、前述した事由によりデータとしては算出しなかったが、観察した結果、擂鉢は越中瀬戸と唐津のみで構成され、その中でも、在地の越中瀬戸が多いように見受けられる。甕は唐津・瀬戸美濃・越前で構成され、唐津が最も多く、瀬戸美濃、越前が少数である。また、大きさによって産地に違いがあると考えられ、小甕・中甕は唐津・瀬戸美濃で、大甕は越前を使用していたという傾向が見て取れる。

〔まとめ〕

石組み水路とSD08・79及びSK10・11・12から出土した遺物の構成比率は若干の差異が認められる。石組み水路は普遍的に存在している遺構であり、同位置に作り変えを行っているため、様々な遺物が入り込む余地がある。石組み水路は背割下水であり、武家屋敷地・町屋敷地の遺物（ゴミ）の両方が入り込み、SD08・79及びSK10・11・12は武家屋敷地から出た遺物（ゴミ）のみが入り込んだため差異が生じたのではないか。使用していたものが武家と町人とでは違いがあるのかもしれない。

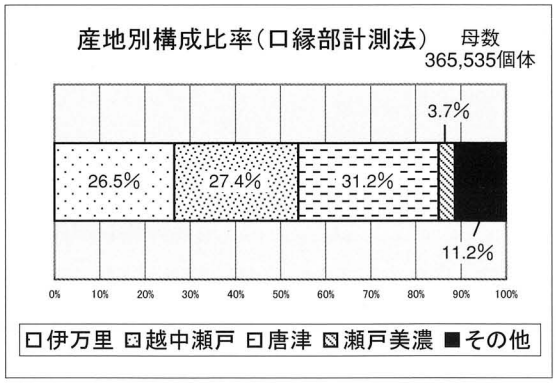
伊万里は碗・皿が大半を占め、その他に仏飯器・蓋・仏花瓶などが出土している。越中瀬戸は皿が大半を占め、壺・建水・擂鉢などが出土している。唐津は碗・大皿・擂鉢を中心にその他雑器類が出土している。瀬戸美濃は碗を中心に雑器が出土している。

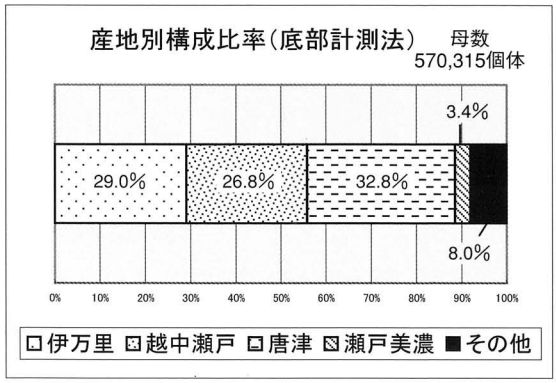
各遺構について皿は日常雑器としての嗜好が強いためか、在地の越中瀬戸を多用し、碗は用途上の問題か伊万里を多用している。また、本調査区において土師器皿は極少数しか出土していない。越中瀬戸皿には灯心油痕が残るものが多数出土したことから、灯明皿など他地域では土師器皿を利用するものでも富山城においては越中瀬戸皿を使用しているのではないか。そのために碗として比較して皿は越中瀬戸が多く出土したと考えられる。あるいは、越中瀬戸の生産が皿中心であり、生産量の問題であるのかもしれない。いずれにせよ、陶磁器は用途によって産地の使い分けを行っていたと考えられる。

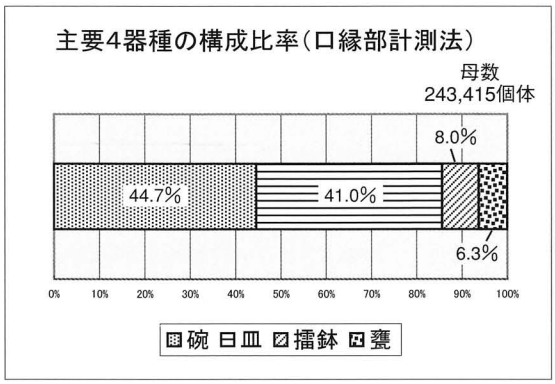
算出した産地別・器種別・産地別器種構成比率など、これらを１つの起因とし各遺構の性格や、ひいては本調査区の性格、当時の生活様式を知る一つの要因となるのではないだろうか。

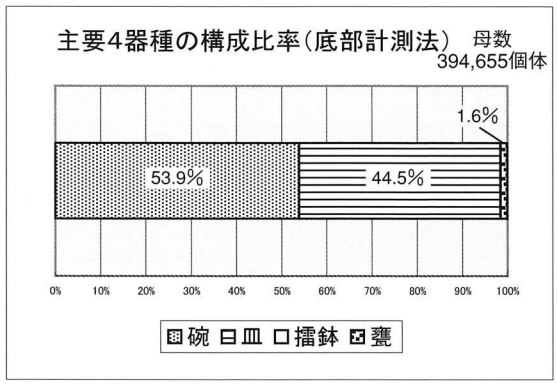
（小川）

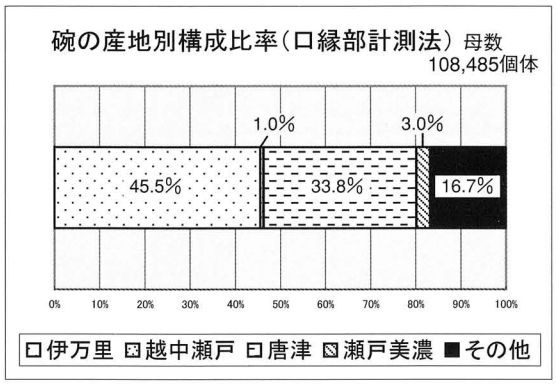
石組水路

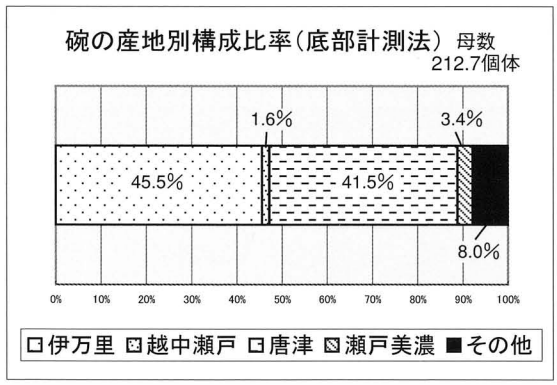


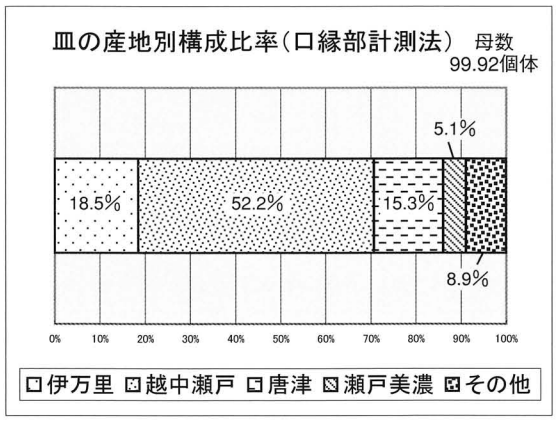


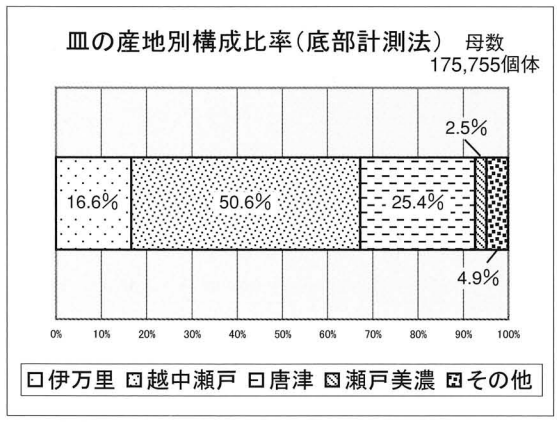






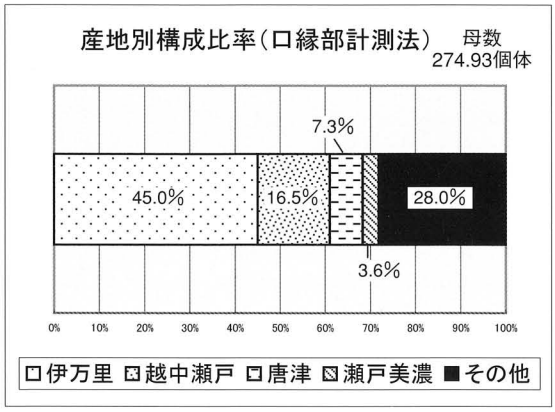


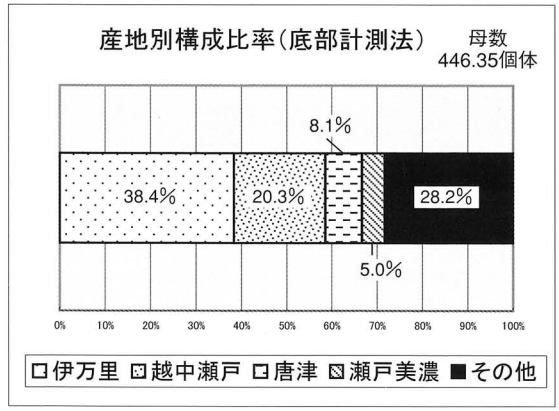


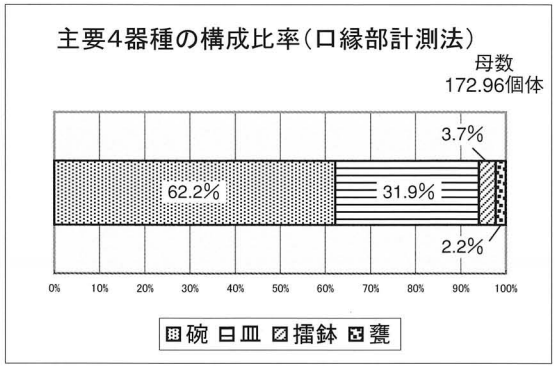


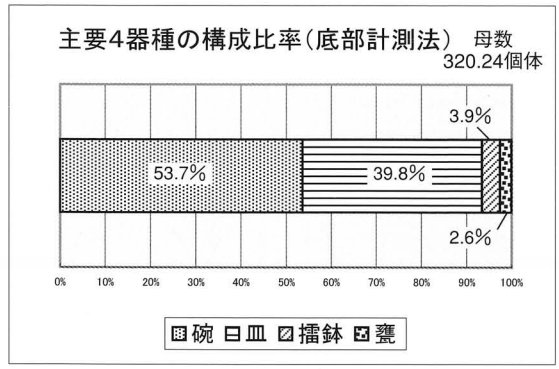
第18表　石組水路にみる陶磁器の構成比率

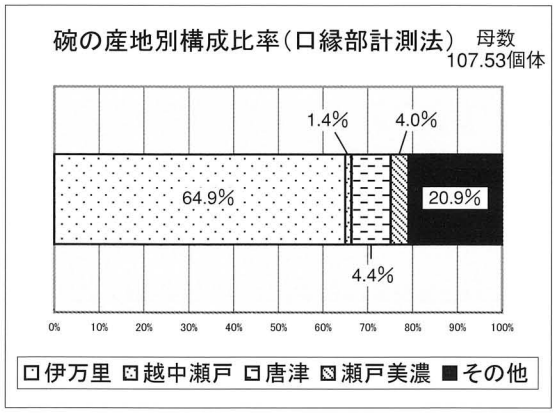
SD08・79

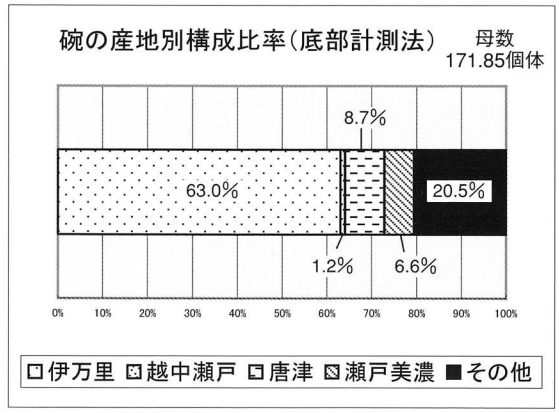


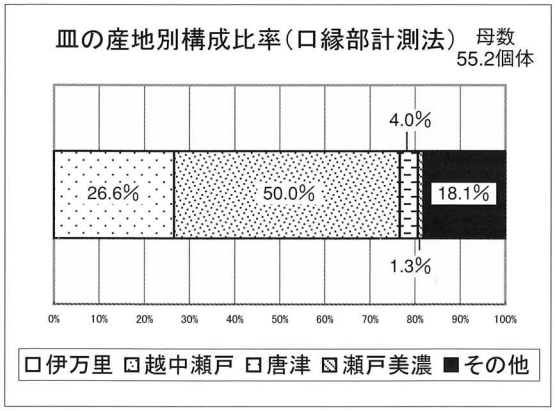


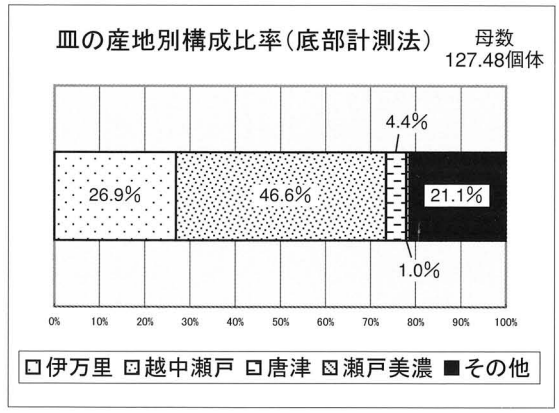






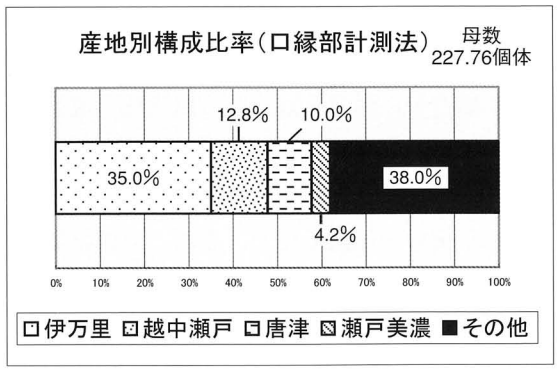


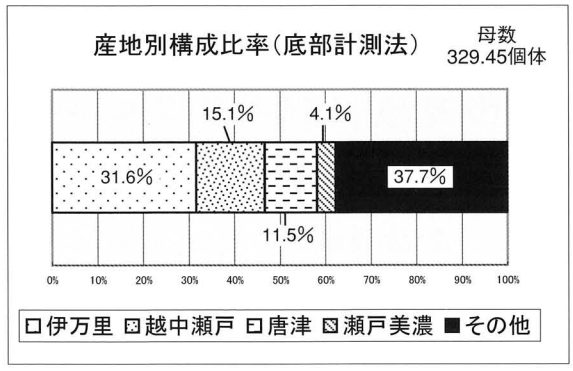


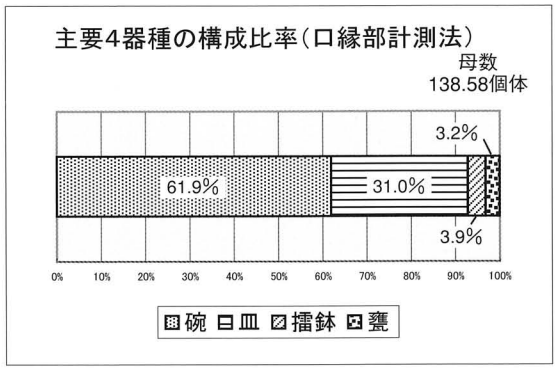


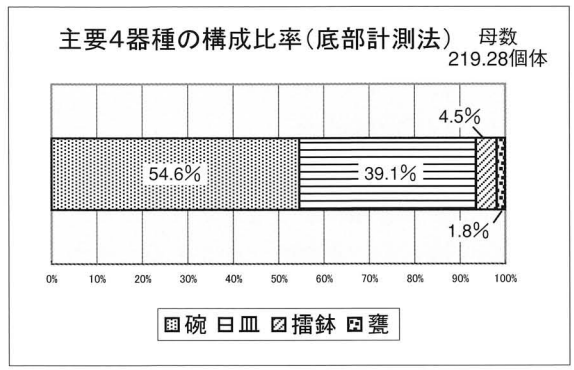
第19表　SD08・79にみる陶磁器の構成比率

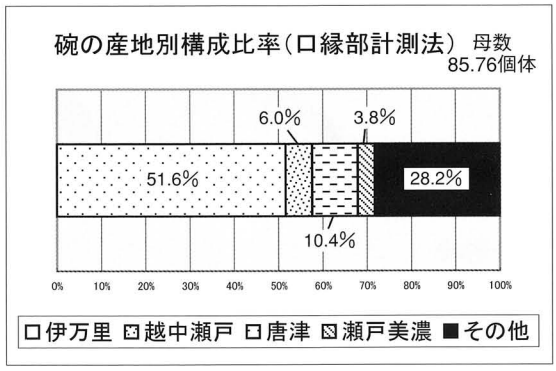
SK10・11・12

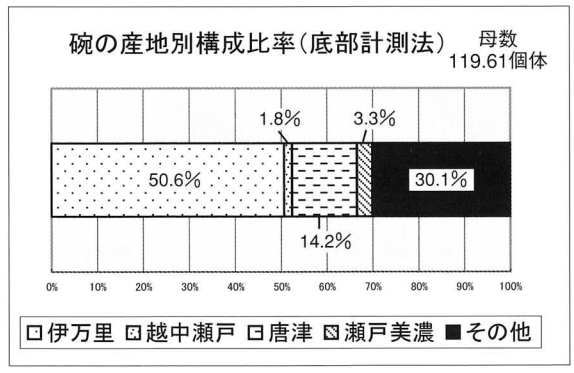


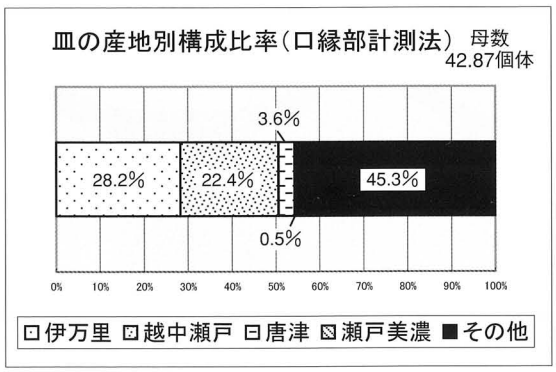


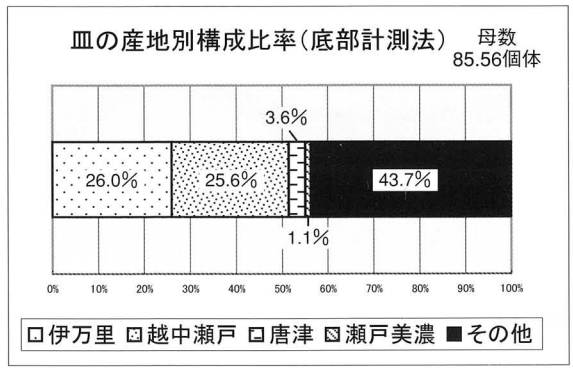












第20表　SK10・11・12にみる陶磁器の構成比率

第６節　主要遺構から出土した越中瀬戸皿の形態分類

主な遺構の帰属時期は19世紀前半であり、その中から多数の越中瀬戸が出土した。その中でも皿の出土量が大半を占める。越中瀬戸は様相が判然としておらず、特に18世紀～幕末までの様相は資料数が少ないこともあって判然としていない。編年研究や、瀬戸美濃焼との関連性、流通経路など不明確な部分が多分に存在する。皿は日常雑器としての用途が強いため、使用期間が短く、比較的帰属時期を確定しやすい。そのため、越中瀬戸の皿を抽出し、形態にどのようなものが存在するかを資料提示し、各属性の形状ごとに分類を行い、検討を加えて行く。また、帰属時期は肥前陶磁器を比較・検討することで当該期の越中瀬戸皿の帰属時期とする。

【口径】

口径の差異により以下に分類することができる。

小　　口径６cm～７cm代

中　　口径８cm～10cm

大　　口径10cm～12cm代

特大　口径17cm前後

【口縁形状】

口縁部から体部にかけてロクロによるナデ調整により成形を行っている。

Ⅰ類　滑らかに直線的に立ち上がるもの

Ⅱ類　口縁部が若干内弯し、口縁端部が丸くおさまるもの

Ⅲ類　口縁部が若干内弯し、口縁端部が上方につまみあげられたもの

Ⅳ類　口縁下部にナデを施すために口縁部が若干外反するもの

Ⅴ類　口縁端部が外側に折れるもの（折縁皿）

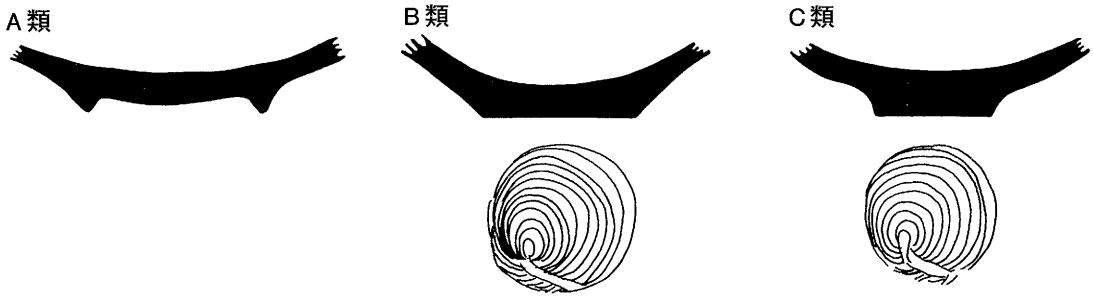
第79図　口縁部の形状

【底部形状】

A類　明確な高台を削り出すもの「削り出し高台」

B類　底部糸切り痕が残るもの

C類　底部が柱状で糸切り痕が残るもの



第80図　底部の形状

【施釉方法】

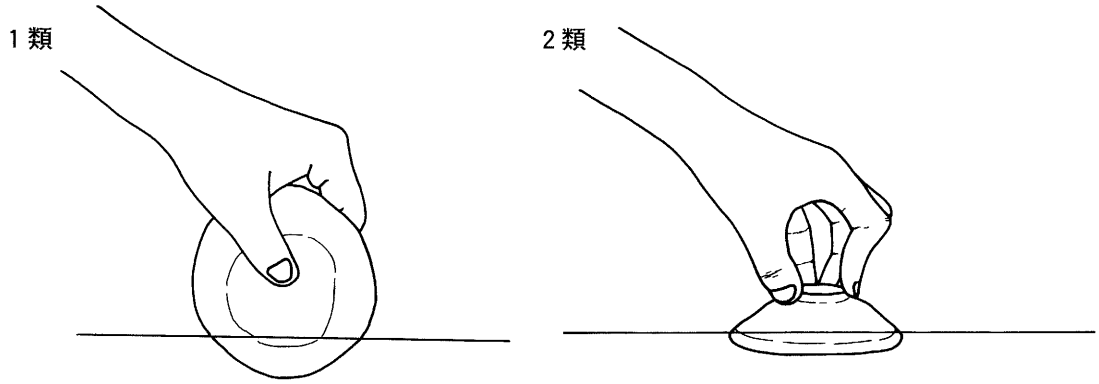
施釉方法の差異により以下に分類することができる。

1類　回し浸け掛けのもの

2類　内面全面及び口縁部外面付近に施釉されているもの（底部外面のみが露胎）

3類　施釉なし

1類の回し浸け掛けは瀬戸美濃の内禿皿とは異なり、内底面の釉を拭うのではなく、内外底面を指で挟んで回し浸け掛けを行っている（第81図）。回し浸け掛けの方法によって、見込みの露胎部分が円形や楕円形、菱形、扇形など様々な形状で現れている。2類の内面全面及び口縁部外面付近に施釉されているもの（底部外面のみが露胎）は、観察した結果、内面を刷毛状工具などにより施釉したのち底部を上にして口縁部まで釉薬に浸している。これは、回し浸け掛けをした場合のものと同様に釉垂れが目立つものが存在するため、釉薬を塗るのではなく浸していることが分かる。口縁部付近まで釉薬に浸し、内面見込みまでは釉薬に浸してはいない。これは内面見込み部分まで釉薬に浸した場合、外面底部付近まで施釉されるはずであるが、施釉されているのが外面口縁部付近までであるため、内面は別の方法により施釉しているものと考える。内面が比較的丁寧に施釉されているため、刷毛状工具などにより丁寧に施釉しているのではないだろうか。また、施釉の順序は内面を刷毛状工具により丁寧に施釉したのち、底部を上にして釉薬に浸していると考える。これは、内面見込み部分の釉薬の色調が若干薄いのに対し、口縁部内面に口縁部外面と同じ高さまで若干濃い釉薬が施釉されていることが観察できるためである。施釉するにあたり二段階の工程が踏まれたのではないだろうか。



第81図　指定施釉方法

【釉薬の色調】

釉薬の色調の差異により以下に分類することができる。

a類　鉄釉

b類　錆釉

c類　灰釉

d類　灰色の釉

e類　その他

施釉なし

c類の灰釉は自然釉のような緑色を呈するもので、d類の灰色の釉は乳白色を呈するものとし

た。また、口縁部に鉄釉・灰釉を丁寧に4度回し浸け掛けしているものが存在する。まず鉄釉を対角に浸け掛けしたのち、鉄釉が掛かっていない部分に灰釉を浸け掛けしている。これは極少数なためｅ類とした。ａ類～ｅ類の5種類以外に釉薬を施さないものも存在する。鉄釉と錆釉、灰釉と灰色の釉はそれぞれ同一の釉薬を使用していると考えられ、焼成温度などにより色彩が変化した可能性がある。また、錆釉とは焼成が不良の皿に鉄釉がのらず、染み込んだものであり、赤褐色を呈しているものと考えられる。よって、ここで使用している釉薬は鉄釉、灰釉の二種類である可能性が高い。釉薬の成分分析を行っていないため詳細は不明であるが、今回は細分化を図るため見た目の釉薬の色彩により分類を行った。

その他、口縁部に灯心油痕が残るものや、内面見込み部分に菊花文が押捺されているものなども存在する。

石組み水路は遺物量も多いが、そのほとんどが流れ込みの遺物であるため、一括性が乏しい。そのため、前述したように帰属時期が比較的顕著であり、一括性が高く、時期幅の少ないC－2区のSK10・11・12、及びSD08・79（武家屋敷地境の排水溝）から出土した越中瀬戸の皿の形態分類を行い、検討を加えて行きたい。越中瀬戸皿を以上の分類に即して数値化したものを一覧表に示した（第21表～22表）。そこから各属性の構成比率及び、各属性同士の組合せ構成比率をグラフ化し越中瀬戸皿における形態の傾向を考えてみることとする。

〔底部形状と施釉方法、釉薬の色調との検討〕

（SD08・79：口縁部計測法37.15個体、底部計測法70.1個体）

（SK10・11・12：口縁計測法31.25個体、底部計測法60.7個体）

構成比率を算出した結果、SD08・79、SK10・11・12ともに同じような数値が算出された。また、傾向が顕著に現れたものは底部形状と施釉方法、釉薬の色調である（第21表）。これらを中心に以下述べる。

両遺構とも、削り出し高台は10%強と少なく、糸切り、柱状糸切りは約40%強と大半を占め、ほぼ同数である。施釉方法は施釉なし（3類）が最も多く60%を占める。次いで内面全面及び口縁部外面付近に施釉されているもの（底部外面のみが露胎）（2類）が約20%強を占め、回し浸け掛けのもの（1類）が10%強である。釉薬が施されていないものが70%強と多く存在し、次いで鉄釉（ａ類）、錆釉（ｂ類）が10%強、灰釉（ｃ類）、灰色の釉（ｄ類）は10%以下と極少数である。

黒部市堀切遺跡E区（黒部市教育委員会2006）の石組み水路（SD465・466・467）おいて17世紀中頃～17世紀後半の越中瀬戸皿について形態分類を行っている。これを参照すると、17世紀中頃から後半の越中瀬戸皿は高台を付すもののみで構成され、施釉方法も回し浸け掛けのみが存在する。よって、高台を付し、回し浸け掛けの皿は前代の流れをくんだものであるといえる。

これを基に、底部形状と施釉方法の組合せによる構成比率を見ると、底部形状と施釉方法では削り出し高台（A類）は回し浸け掛けのもの（1類）しか存在せず、糸切り（B類）は2類がわずかに存在し、大半が施釉なし（3類）である。柱状糸切り（C類）は2類と3類が半分ずつ占める。

また、底部形状と釉薬の種類を算出した構成比率を見ると、削り出し高台（A類）は釉薬の色調及び組合せは多種多用であり、5種類を数える。糸切り（B類）は鉄釉（ａ類）がわずか数%存在するのみで、釉薬を施さないものが90%以上と大半を占める。柱状糸切り（C類）はａ類と

b類とも約30%前後であり、施釉なしが約半数を占める。

前述したように、a類・b類は同じ鉄釉であると考えられるため、糸切り痕が残るB類とC類とでは鉄釉が施されているものか施釉されていないものの2種類で構成されていることが分かる。削り出し高台（A類）と底部に糸切り痕が残る皿（B・C類）に時期差があるとすれば、施釉方法にも時期差が存在し、それが顕著に現れるという結果が算出された。さらに、底部形状と釉薬の種類においては、黒部市堀切遺跡E区で見ると17世紀前半の皿は釉薬の種類も多種多用であるが、17世紀後半に移行するにつれ鉄釉の割合が多くなる傾向があると指摘している。本遺構から出土した越中瀬戸皿も、削り出し高台の皿は釉薬の種類が多種多用である。また、削り出し高台の皿に施釉されている鉄釉は褐色系であるのに対し、底部糸切り痕が残る皿の施釉されている鉄釉は赤褐色を呈し、赤味が強いという観察結果を得た。同じ鉄釉であっても、釉薬の色調により差異が認められ、それによってもある程度の帰属時期は判別できるものと考える。

これらのことから、底部形状及び釉薬の色調、施釉方法により、越中瀬戸皿の帰属時期を判別することができる。削り出し高台で、釉薬を回し浸け掛けしており、釉薬の色調が多種多用に富むものは17世紀代のものであるといえる。底部に糸切り痕が残り、釉薬を浸し、内面見込み部分まで鉄釉が施釉しているもので釉薬が赤褐色を呈するもの、または無釉のものは19世紀前半に比定されるということがいえる。また、底部糸切り痕が残るもの（B類）と底部が柱状で糸切り痕が残るもの（C類）は出土数量に違いがみられないため、同時期に存在しており、型式差とはならないものと考えられる。

〔口径と口縁部形状との検討〕

次に、底部形状及び釉薬の色調、施釉方法以外の属性にも帰属時期を決定する要素がないかを確認するため口縁部の属性について検証する。

口径及び口縁形状に関して表に表した（第22表）。SD08・79、SK10・11・12ともに同じような数値が算出された。口径では大皿が最も多く、次いで特大皿、小・中皿を合わせて全体の約20%前後である。また、口縁形状は滑らかに直線的に立ち上がるもの（Ⅰ類）が70%と最も多く、次いで口縁下部にナデを施すために口縁部が若干外反するもの（Ⅳ類）が10%強、他（Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類）は10%以下と極少数である。算出した二つの比率を合わせたものが第22表である。小～特大の皿の出土量を100%とした口縁形状の割合は、口径の大きさに関わらず、直線的に立ち上がるⅠ類が最も多く、その他Ⅱ～Ⅴ類は少数である。口径の各大きさに対する口縁形状の割合はほぼ同じで、直線的に立ち上がるⅠ類が主体で一定量存在することが分かる。よって、口径の大小による口縁部の属性だけでは帰属時期は図れないということとなる。

ただし、小・中皿は内弯するⅡ・Ⅲ類がなく、小皿は直線的に立ち上がるⅠ類、外反するⅡ類で占められ、中皿はそれに若干折縁皿（Ⅴ類）を含む。特大皿は直線的に立ち上がるⅠ類が最も多く、内弯し口縁端部が丸くおさまるもの（Ⅲ類）と折縁皿（Ⅴ類）は存在しない。これらに対し、大皿は直線的に立ち上がるⅠ類が最も多いことには変わりないが、Ⅱ類～Ⅴ類は少数ではあるが一定量存在する。

口縁部形状と、底部形状を合わせた表を見ると、削り出し高台（A類）には内弯するもの（Ⅱ・Ⅲ類）がなく、糸切り、柱状糸切り（B・C類）には折縁皿（Ⅴ類）が存在しないということとなる。よって、帰属時期が17世紀代の皿と、19世紀前半に比定される皿の口縁部の属性から図れるものは、直線的に立ち上がるものが通して多く存在し、折縁皿は17世紀頃に存在すると

いうことのみいえる。また、ここでは口縁部が内弯するものが出土していないが、黒部市堀切遺跡E区において一定量存在するため、この遺構では出土しなかったものの、17世紀後半の様相としては存在するものである。また、黒部市堀切遺跡E区で出土した越中瀬戸皿は小・中皿が少なく、大皿が大半を占め、特大皿は出土していない。そのため本調査区において出土した特大皿は18世紀以降の特徴的なものといえる。

〔まとめ〕

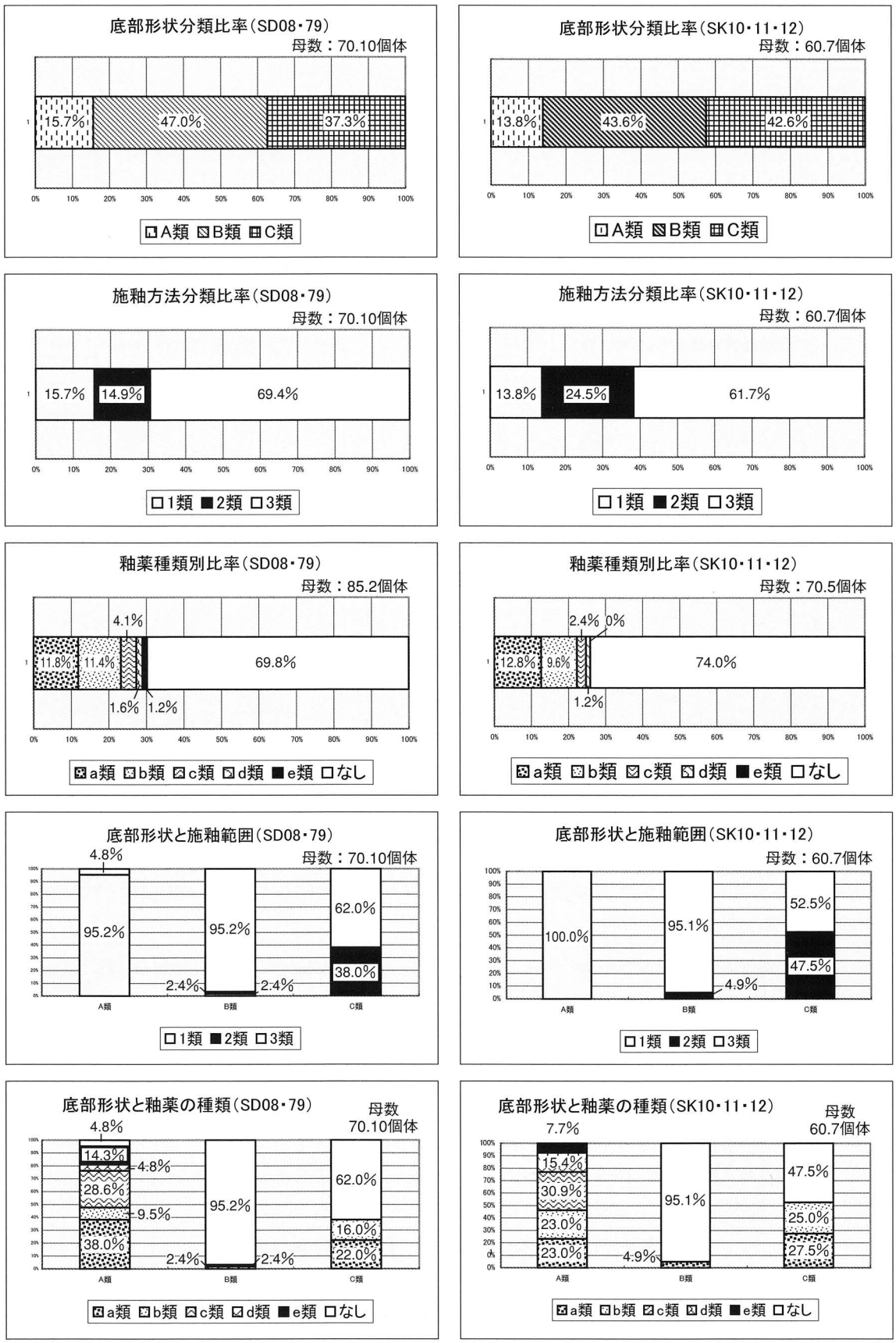
18世紀代の中間となる様相の皿は判然としない。第5節で述べたように、土師器皿を多用せず、越中瀬戸皿を多用しているため出土量も多いのにも関わらず18世紀代に帰属する越中瀬戸の皿が出土しないことには疑問が残る。17世紀後半のものと19世紀前半のものの中間的要素をもつ皿が出土してもいいようなものの、それが出土しなかったということは、17世紀代から後続する様相はなく、17世紀後半以降も削り出し高台のものを生産しており、18世紀代に削り出し高台から、底部糸切り痕が残るものに変化するのではないか。それに伴い、施釉方法も革新的に変化し、釉薬の種類は鉄釉もしくは施釉なしに変化すると考えられる。

以上、帰属時期が比較的顕著であるSK10・11・12、及びSD08・79から出土した越中瀬戸の皿について検証を行った。これらは、局部的な1遺跡の2つの遺構から出土したものにより検証したに過ぎず、これらの資料では限界が生じるためここでは問題提起とする。今後の発掘調査、または生産地での資料の増加を待ち、資料の充実が図られた上で更なる検討を行い、考究の深化を図りたい。

（小川）

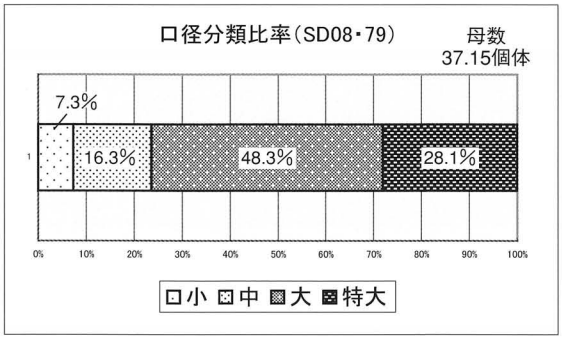
SD08・79

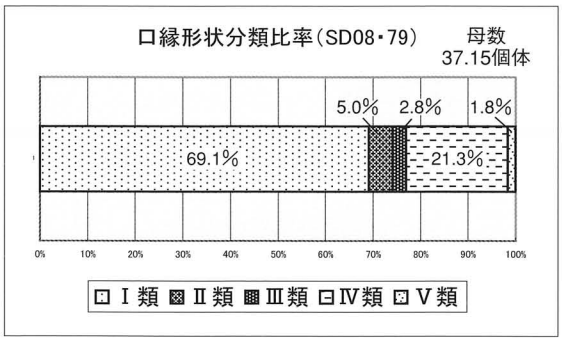
SK10・11・12

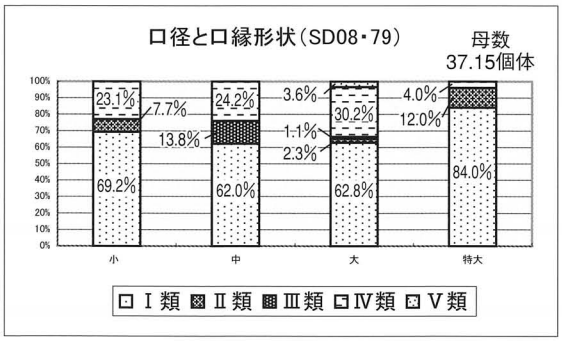


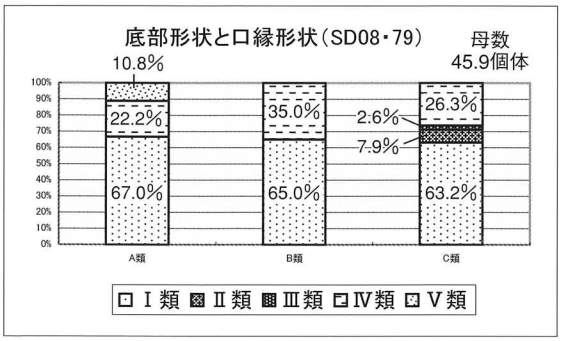
第21表　越中瀬戸の構成比率（底部形状・施釉方法・釉薬の色調）

SD08・79

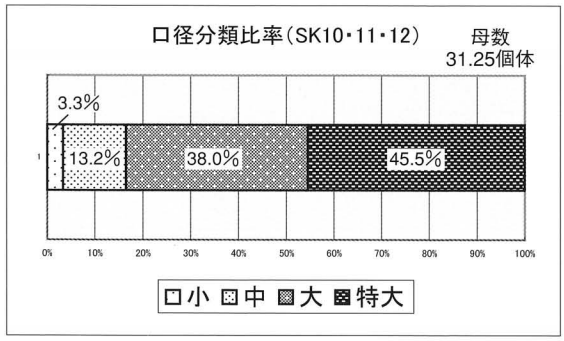


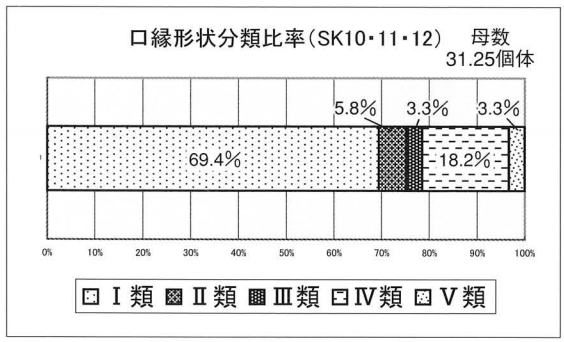


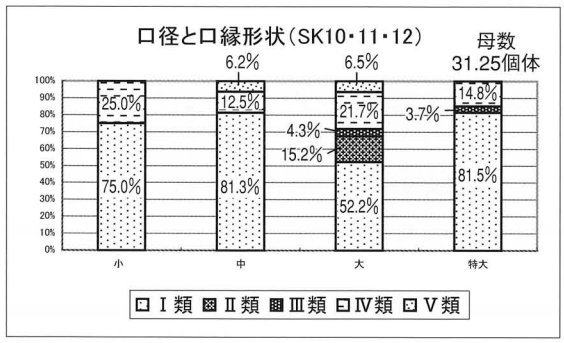


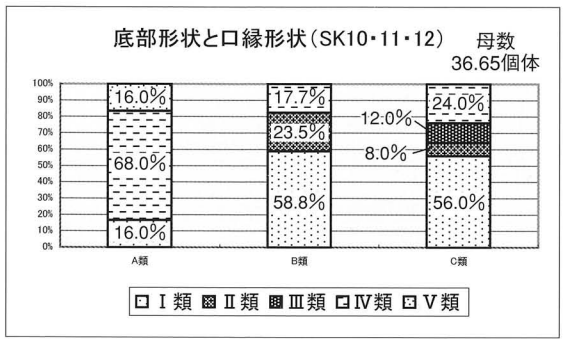


SK10・11・12









第22表　越中瀬戸の構成比率（口径・口線部形状）

第７節　富山城下町遺跡調査の意義

今回行った市街地再開発に伴う富山城下町遺跡の発掘調査の成果とその意義についてまとめてみたい。

富山市では、富山城下町主要部における発掘調査については、平成12年度以降市街地再開発事業を主として実施している。木造建築物が存在している箇所については地下の遺存状況が良好なため、特に重点的に調査を行ってきた。

富山城下町では17世紀代、19世紀代の城・城下町絵図史料が存在し、それを比較対照することで城下町域における武家・町屋敷地の変遷過程を読み取ることができる。

今回の調査地点については、17世紀代の３種の絵図、19世紀代の２種の絵図を比較対照する従来の研究方法に加え、ＧＩＳ手法により絵図内の地割を基準とした誤差修正を行い、絵図と発掘成果を高精度に合成したことにより、絵図にある記載データとの照合が可能になった点が大きく評価できる。富山藩政期絵図の特色としては武家屋敷に藩士名が記載してあり、これにより正確に調査地の屋敷を所有する藩士個人名を特定できるたことは意義が大きい。合わせて、頻繁に変動する武家屋敷境において、調査で検出された屋敷境の排水溝が絵図との照合の結果天保年間と特定されたことにより、遺構の形成廃絶時期の特定、遺物の所属年代の比較が可能となったことも、まだ確立されていない富山城下町近世遺物全般の編年研究に大きく寄与したといえる。

このような成果の具体的な内容は本章における前項までの考察で明らかにしてきたわけであるが、これによりこれまで考古学的に明らかでなかった富山城下町における上・中級武家層の生活・信仰などの諸相が次第に解明されつつあるといえる。その中で城下町における武家地・町人地の関係性を理解する上で特に注目される成果についてまず検討する。

富山藩政期における富山城下町においては、他の城下町もそうであるように武家地と町人地は明確に分離されている。特に両側町が形成される場合において二者が背面関係にある時には、背割下水を引設しこれを境界としている例が多い。このことは寛文絵図に見られる城下町内の街路における防御的施設（街路の屈曲、木戸）が、特に総曲輪の南を通っていた北陸街道縁辺で特に厳重に設けられている状況から見ても、武家地と町人地を分離する意識が強く存在することを示している。

ところが今回の発掘調査では、この背割下水を挟んで存在する武家屋敷と上級商家とみられる町屋敷間において、背割下水路上に両敷地にまたがる木橋橋脚と張出しが確認されており、実質的な行き来があったことが明らかになった。その商家は何を扱ったのかは記録がないが、武家屋敷のゴミ捨て穴周辺から出土した藩の鑑札とみられる木札には、福澤屋という屋号と「大根」とみられる文字が記載されていた。このことから商家は青果を扱う問屋であった可能性が高い。この福澤屋については史料がなく確認出来ないが、青果問屋とすれば藩士の日々の食料品についての納品上の便宜的な措置として木橋が架けられた可能性もあろう。

また町屋敷側においては背割下水寄りから数箇所の小鍛冶遺構が検出された。遺構自体は小規模なものであり、作業地点を変えて行われた結果、累積して多数の遺構が形成されたと理解される。小鍛冶の目的は明確でないが、商家内の一角で小規模とは言え繰返し小鍛冶作業が行われたとすると、日常的な鋳掛や器物修繕の域を超え、商行為に伴う必要品（鉄製道具）の自給的な生産を暗示する。先に推定したように青果問屋とすれば、取引運搬保管等に必要な数々の道具が推定されよう。調査ではそれを直接示す遺物の抽出は出来なかったものの、上級商家においては東に離れた職人町への外部発注ではなく、屋敷内で自給自足的に小鍛冶を行っていた実態が明らか

になったことは注目される。

次に17世紀から19世紀に至る城下町変遷について検討する。検出された遺構の主体は19世紀代の武家屋敷に属するものであるが、町屋敷側で唯一下層から検出された溝SD01は、出土遺物からみて17世紀第1四半期頃に位置付けられる。この時期は前田利長の隠居所としての慶長期富山城・城下町の形成期であり、この整備に伴う城下町遺構である可能性が高い。この溝の延伸方向は背割下水と同じ方向であることから、近世城下町建設当初の東西地割が、富山藩初期寛文期の再整備の際にもその地割方向が維持されたことを示している。この溝の規模は背割下水と近似することから、慶長期における背割下水あるいは排水路としての性格が想定される。慶長期城下町の地割を残すと評価されている正保絵図と万治・寛文絵図とを比較した場合、総曲輪周辺では大きな変更が認められる。変更のない外堀を基準にみると、慶長期における外堀沿いは武家屋敷でなく町屋敷であり、外堀側を奥にし入口を南側を通る北陸街道側に向けている。正保絵図によればこの時期の北陸街道は、万治・寛文期の北陸街道（一番町通）より北側の外堀側に寄っていると判断される。後の万治・寛文期には北陸街道を南にずらし、１街区を大きくした上で東西に背割下水を通して二分し、北半分に武家地を新設し、南半分を町屋敷にした。町屋敷の入口はその南の北陸街道側に、武家屋敷の入口は新設された北側の外堀沿い街路側に変更した。これにより外郭の防備としては手薄となったといえるが、北陸街道とそれに連結した主要街路を中心とした交通網が整備され、それらを利用した経済流通が促進されたと評価することができよう。

このような地割の変化からみて、SD01は旧北陸街道に設置された両側側溝の南側の一つと考え、北側のもう片方の側溝が背割下水に転用されたと理解することも不可能ではない。地形のレベルという視点から見ると、SD01が東から西へ流れているのに対し、背割下水は逆に西から東へと傾斜を見せる。このような変化は、寛文期の新町割における地割方向が基本的には踏襲されたものの、３次元的に見ると基盤高さの調整、すなわち相当量の盛土・削平作業を伴っていた可能性が指摘できる。町屋側の一角では17世紀前半以降敷地全体が泥質化が認められ、深く掘削・再盛土されている。周辺の地山は砂礫・シルト・泥炭層がめまぐるしく変化し、神通川自然堤防の後背湿地エリアの特徴が残される。万治・寛文絵図でも近隣に池状の残地が認められており、特に湿気などが発生しやすい湿地上の屋敷地では防湿用の地盤改良を行った可能性がある。

さて、発掘調査地の地名は「総曲輪」(そうがわ)と呼ばれる。総曲輪は惣構と同意で、城下町の外郭を囲郭する土塁・堀により囲まれた範囲を示す。富山城下町における惣構の形成は、富山藩による万治・寛文期整備に伴い行われたことがこれまでの研究によって明らかにされている（深井1995）が、この総曲輪の位置はその時期における惣構の存在する位置ではない。正保絵図にみる慶長期富山城の構造からみると、三の丸と呼ぶ外郭内は武家屋敷のみで構成され、町人地をその外側に置く町郊外型プランの城下町構造と評価している（深井前掲、古川2006）。外郭の周囲には外堀・土塁が巡るが、その周囲に広がる城下町外側には防御施設がなく開放されている。したがって慶長期においては外郭部分が惣構構造となっている。このことから、総曲輪の地名が慶長期富山城形成期の惣構構造に由来することがわかるが、地名として定着した時期については別途検討が必要であろう。

以上検討したように、今回調査で富山城下町主要部の構造や変遷の詳細が明らかになったことによって、富山城下町研究上重要な歴史的資料が得られたといえる。今後は富山藩士の日常生活の実態の解明に向けた出土品の評価、文字資料の解読等を通して、さらに詳細な城下町研究が進展することが期待される。

（古川）

《引用・参考文献》

参考文献

相羽重徳　2003「越中瀬戸広口壺に関する粗描―県内出土の報告例から―」『研究紀要　第４号』財団法人新潟県埋蔵文化財事業団
青柳正美　1986『学芸の神菅原道真　天神信仰と富山』北日本新聞出版社
宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
江戸遺跡研究会　2001『江戸考古学研究事典』柏書房
大橋康二　1984『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁器』佐賀県立九州陶磁文化館
大橋康二　1994『古伊万里の文様』理工学社
大橋康二・西田宏子　1998別冊太陽　『古伊万里』平凡社
小田原市教育委員会　1990『小田原城とその城下町』
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』
九州近世陶磁学会　2001『国内出土の肥前陶磁　東日本の流通をさぐる』
九州近世陶磁学会　2002『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』
九州陶磁文化館　1988『国内出土の肥前陶磁』
九州陶磁文化館　1993『柴田コレクション展』
黒部市教育委員会　2006『堀切遺跡Ｅ区発掘調査報告書』
古泉　弘　1987『江戸の考古学』ニュー・サイエンス社
瀬戸市教育委員会　1990『尾呂』
瀬戸市史編纂委員会　1993『瀬戸市史　陶磁史篇四』
瀬戸市史編纂委員会　1998『瀬戸市史　陶磁史篇六』
瀬戸市埋蔵文化財センター　2000『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』
瀬戸市歴史民俗資料館　1987『研究紀要Ⅵ』
瀬戸市歴史民俗資料館　1988『研究紀要Ⅶ』
瀬戸市歴史民俗資料館　1989『研究紀要Ⅷ』
竹内秀雄　『天満宮』吉川弘文館 1968
武田健次郎　2004「富山平野における古代基礎地域の再考」『富山考古学研究』
田中　喜男　1993　『城下町富山の町民とくらし』高科書店
東京都東京江戸博物館　1996『掘り出された都市』東京都歴史文化財団・東京都教育文化財団
富山市　1987『富山市史』通史編
富山市教育委員会　2004『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会　2005『富山市富山城跡発掘調査概要』
都立学校遺跡調査会2000『日影町遺跡Ⅲ－1、2』
西村　忠　『北陸の天神様かざり』2004
深井甚三　1995「近世城下町富山の建設・再建」『近世の地方都市と商人』吉川弘文館
古川知明　2006「慶長期富山城と城下町構造」『富山史壇』第150号　越中史壇会
増山仁他　1995『本町一丁目遺跡』金沢市教育委員会
増山仁他　1997『安江町遺跡』金沢市教育委員会
宮田進一　1997「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
宮田進一　1998「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史―地域間交流の視点から』
三輪茂雄　1986『石臼と木磨臼』日本民族文化体系14

引用文献

Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信,1991,中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,28－36.

安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.

伊藤　良永・堀内　誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌　6,23-45.

In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

Wentworth,C.K.,1922,A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol,30,377-392.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久,1991,九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発,23-27.

Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.

小杉　正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.

砕屑性堆積物研究会編,1983,堆積物の研究法.地学双書,24,地学団体研究会,377p.

土壌環境分析法編集委員会編,1997,土壌環境分析法.博友社,427p.

富山県,1992,1/10万　富山県地質図.内外地図株式会社.

農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.

原口　和夫・三友　清史・小林　弘,1998,埼玉の藻類　珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.

Hustedt, F.,1937-1939,Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java,, Bali und Sumatra. Archiv fur Hydrobiology, Supplement,15:131-177,15:187-295,15:393-506,15:638-790,16:1-155,16:274-394.

Bowen,H.J.M.,1983,環境無機化学－元素の循環と生化学－.浅見輝男・茅野充男訳,博友社,297p.

ペドロジスト懇談会編,1984,土壌調査ハンドブック.博友社,156p.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980,土壌の化学.岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳,学会出版センター,309p.

Fork,R.L. and Ward,W.,1957,Brazons river bar,a study in the significance of grain size parameters. J.Sed.Petrol,27,3-26.

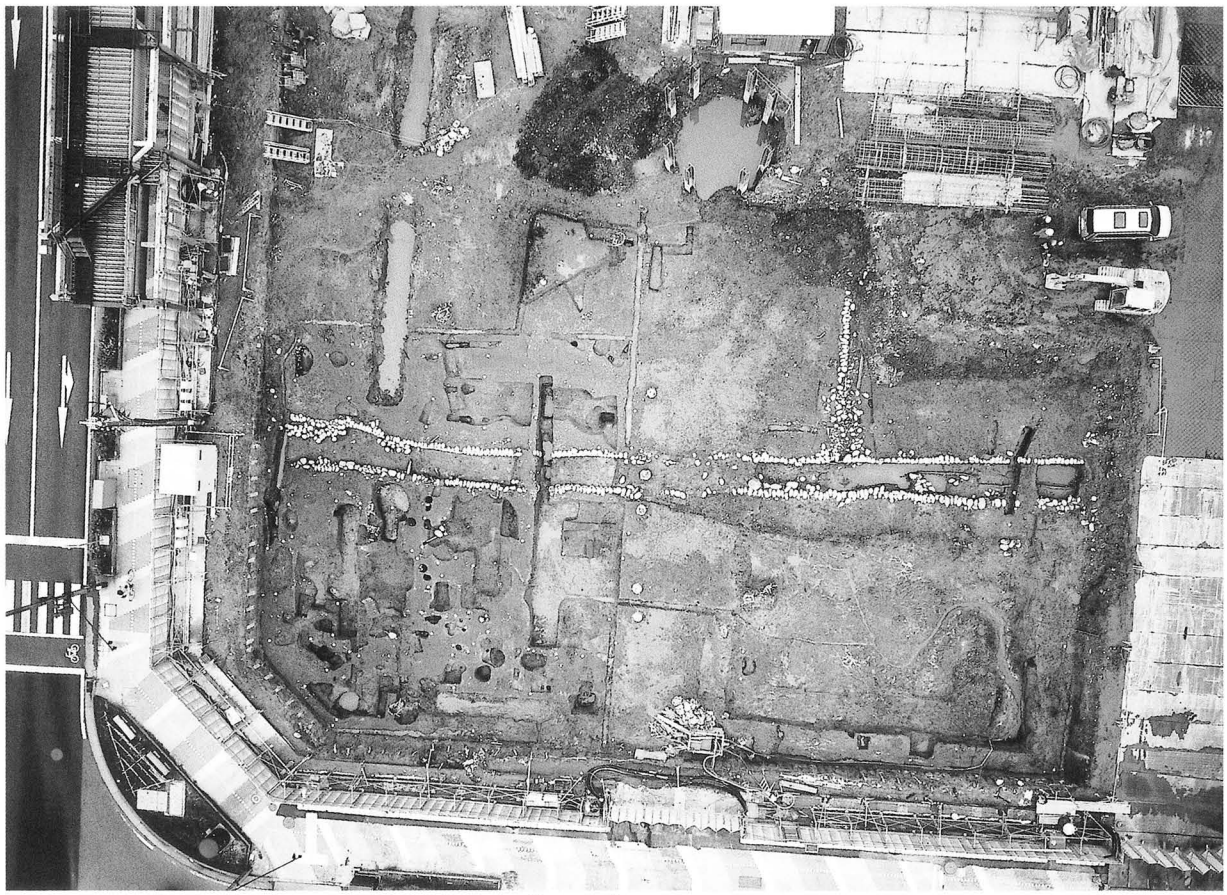
Lowe, R.L,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p.

Round, F. E.., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.

渡辺 仁治,2005,淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAIpo,pH耐性能. 内田老鶴圃,666p.

図版1　A区全景

① A区遠景（東から）



② A区真上から

図版2　A区遺構(1)

① A区石組水路（西から）

② A区トレンチにかかる石組水路（南西から）

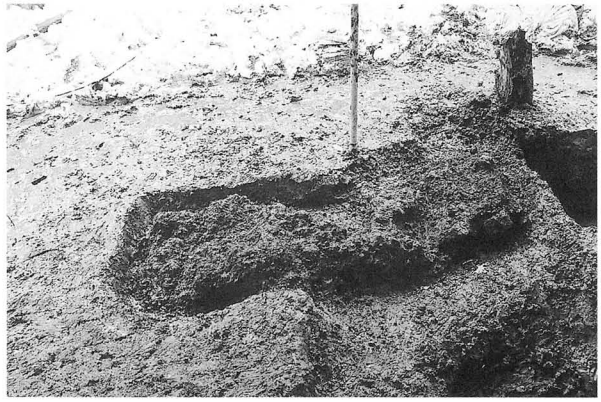
③ A区石組水路断面調査区東壁（西から）

④ A区SD79（北から）

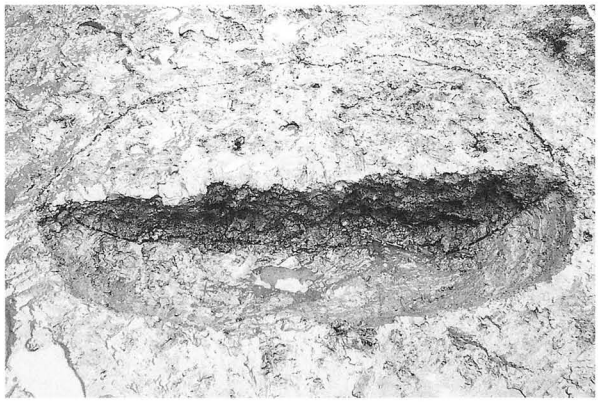
⑤ A区SD79（南から）

① A区SD01完掘状況（東から）

② A区SD01・SK97（南東から）



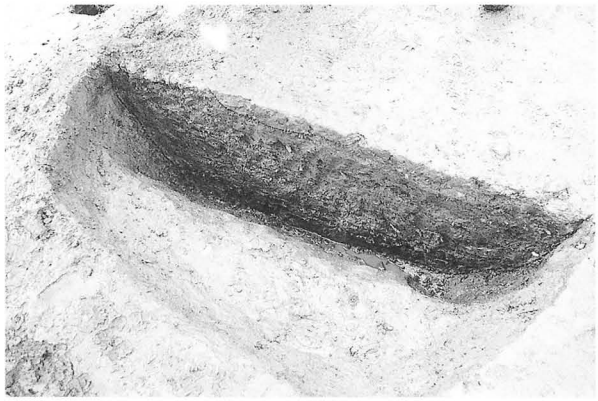
③ A区SK37検出状況（東から）



④ A区SK20（南から）

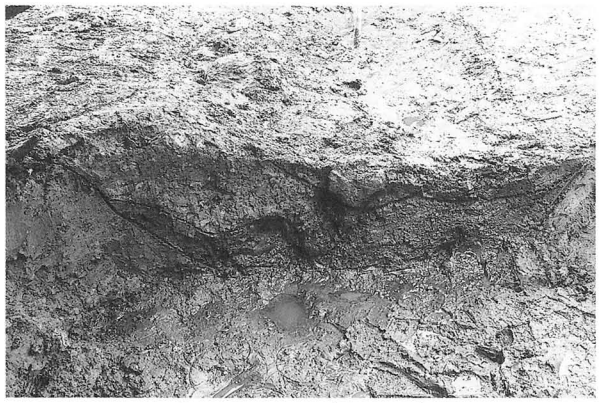
⑤ A区SK44遺物出土状況（東から）

図版4　A区遺構(3)

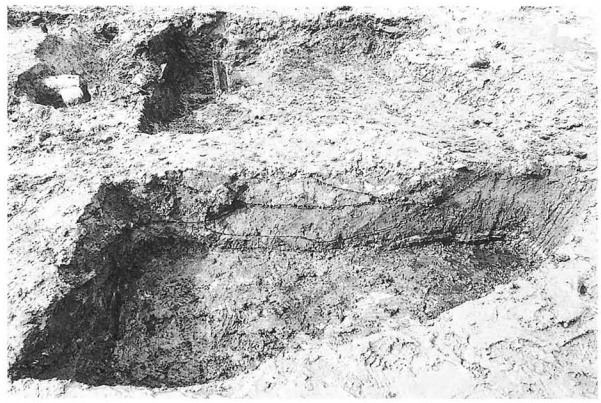


① A区SK04（東から）

② A区SK08・09（西から）

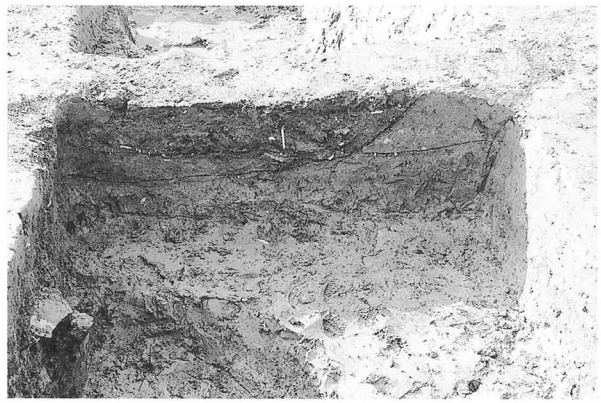


③ A区SK10（南から）



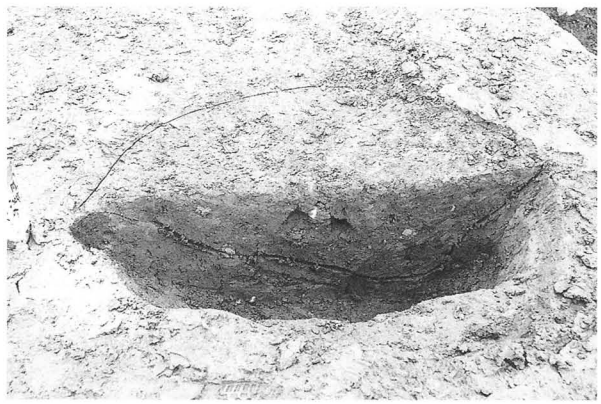
④ A区SK38（東から）

⑤ A区SK69・70・71（東から）



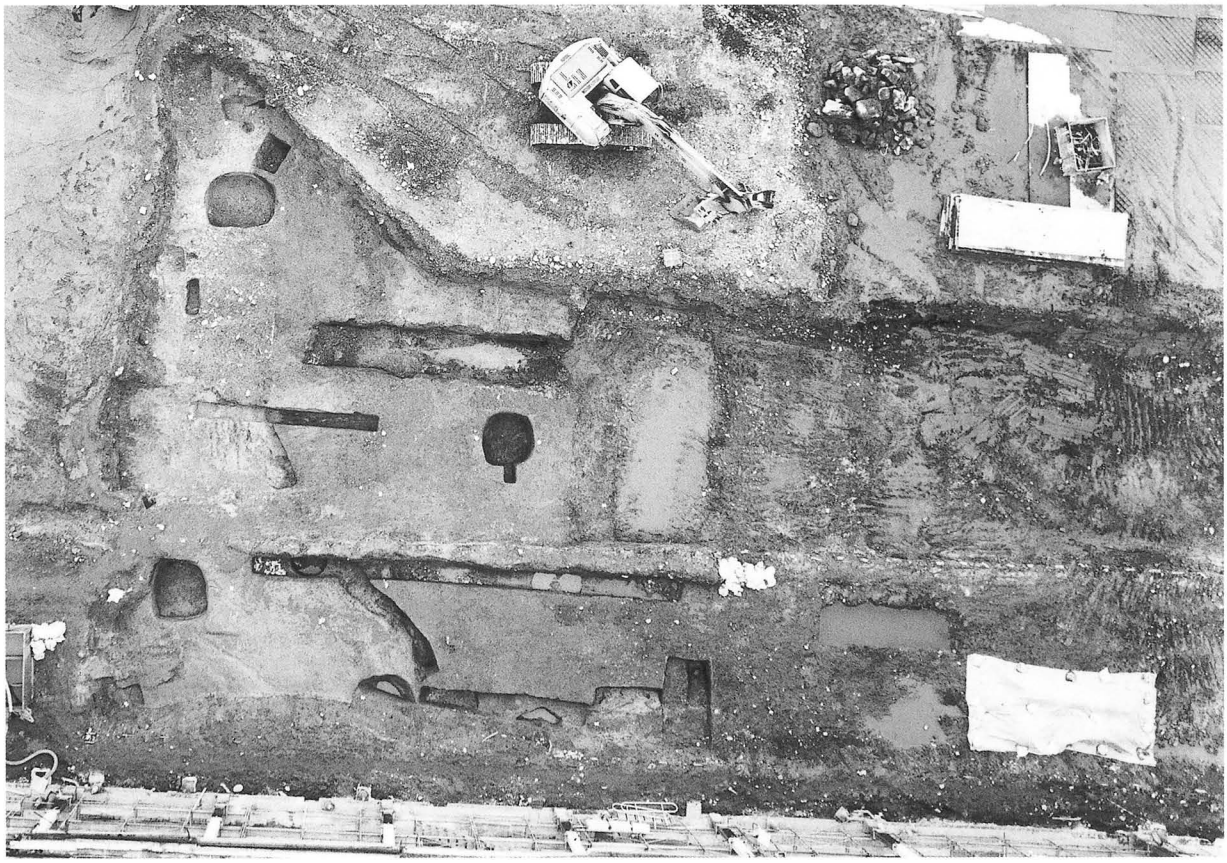
⑥ A区SK85・93（東から）

⑦ A区SK93（南から）



⑧ A区SP64（南から）

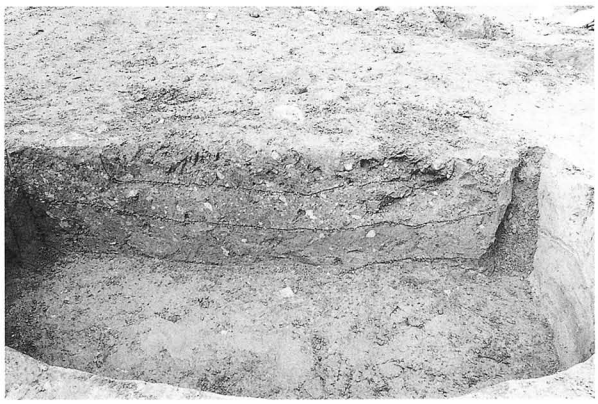
図版5　B区全景　遺構(1)



①B区（真上から）

②B区SK02（南から）

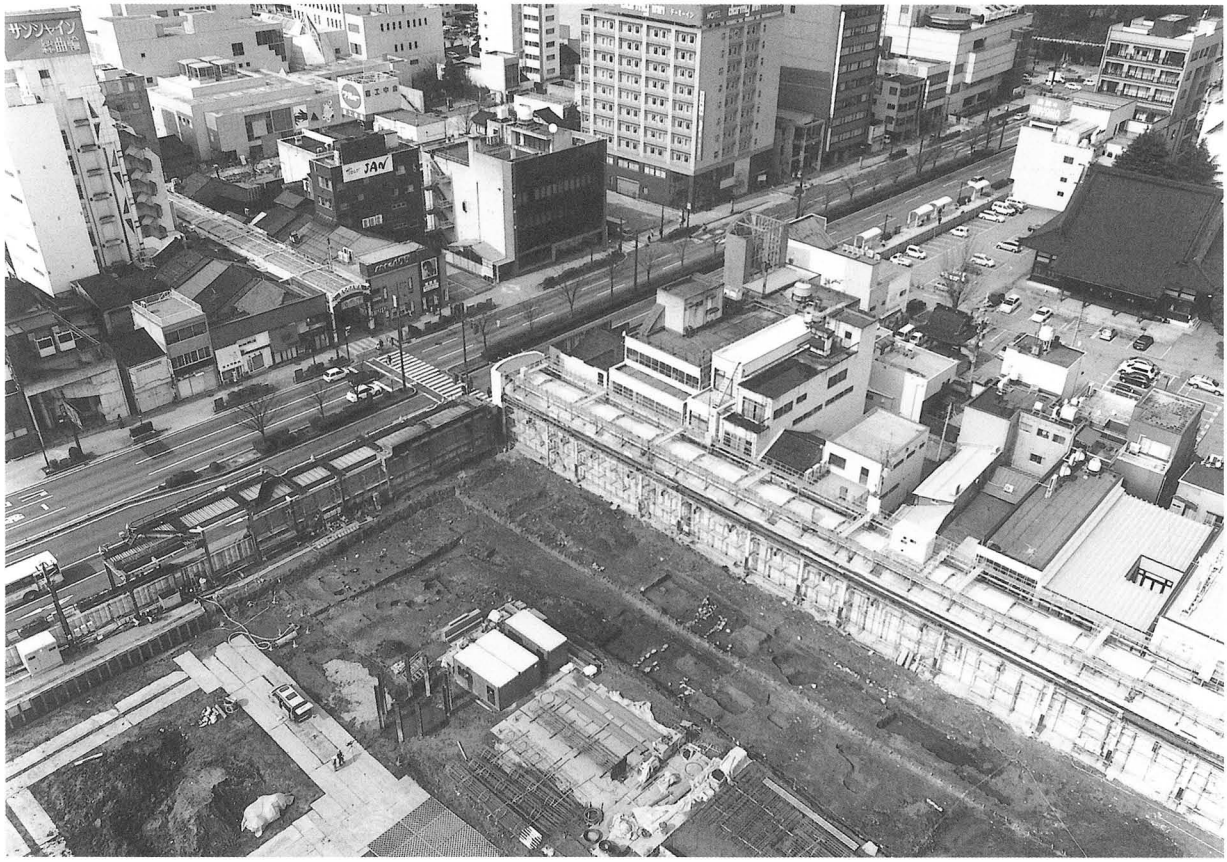
③B区SE03（北から）



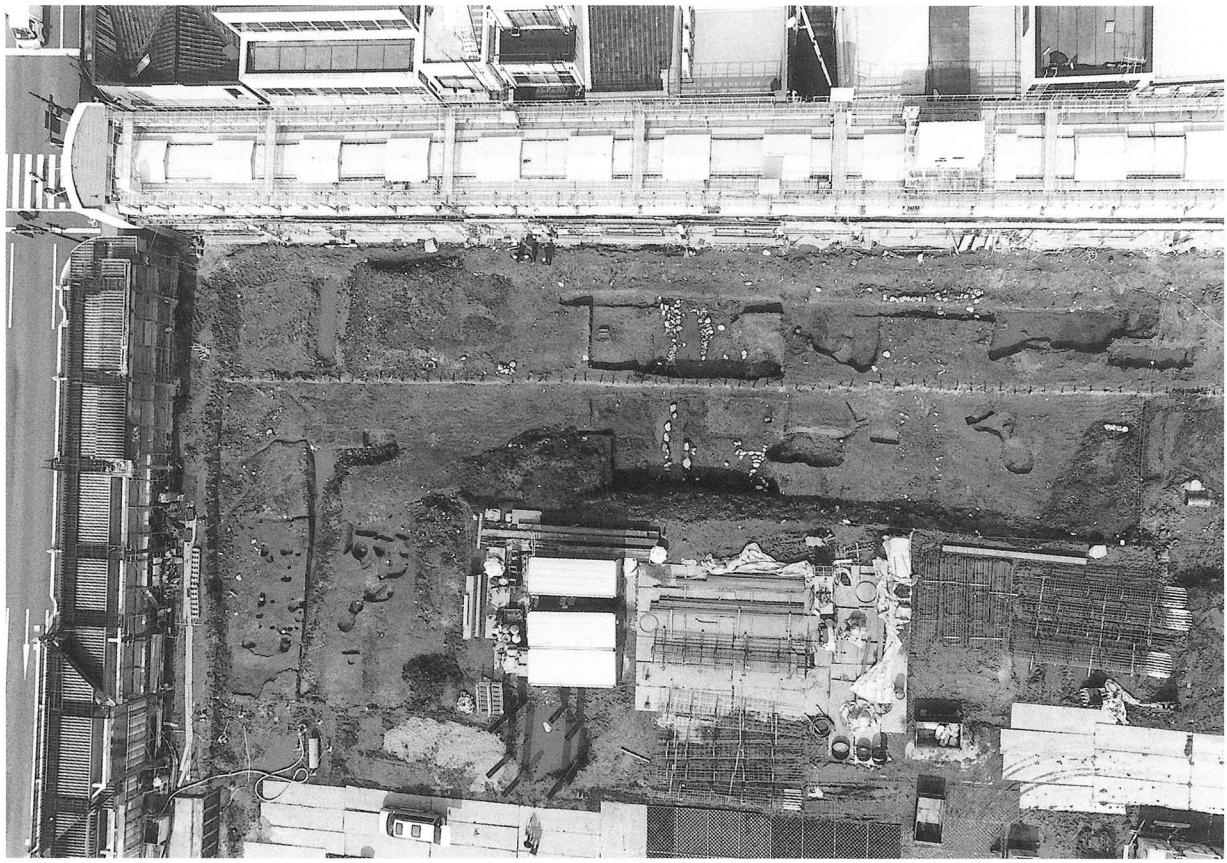
④B区SK04（南から）

⑤B区SK05（北から）

図版6　C区全景



① C区遠景（南東から）



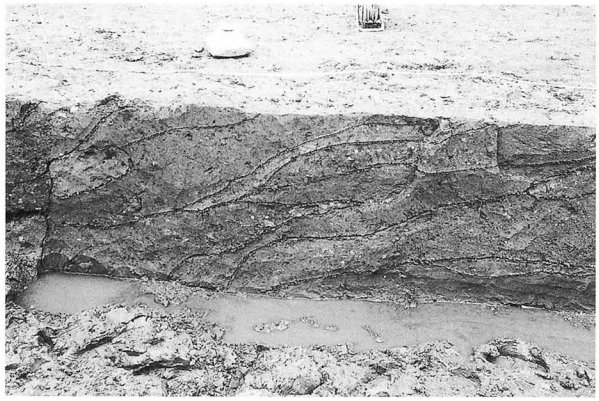
② C区（真上から）

① C区SD08（真上から）

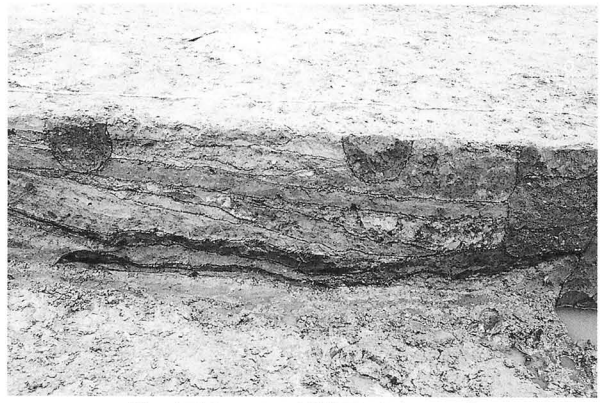
② C区SD08（南東から）

③ C区SD08南壁セクション（北西から）

図版8　C区遺構(2)



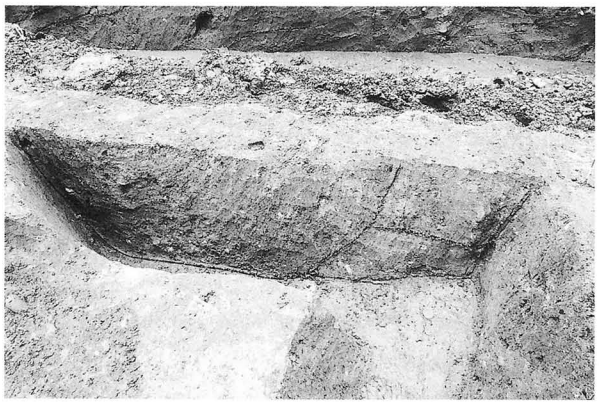
① C区トレンチ断面（東から）



② C区トレンチ断面（東から）

③ C区SK10・11（南西から）

④ C区SK11・12（南東から）



⑤ C区SK44・SD48（東から）

⑥ C区SK45（東から）

⑦ C区SP18（東から）

⑧ C区D2グリッド完掘状況（北西から）

図版9　越中瀬戸　皿(1)

1

2

3

4

5

6

7

5

8

9

10

11

12

13

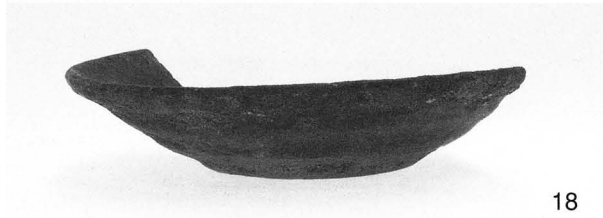
14

図版10　越中瀬戸　皿(2)

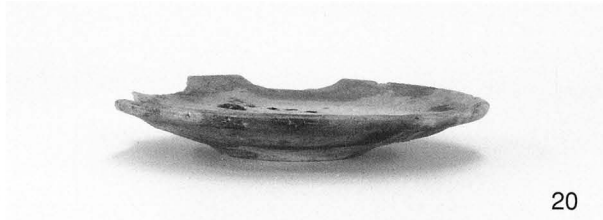
15

16

17


18

19


20

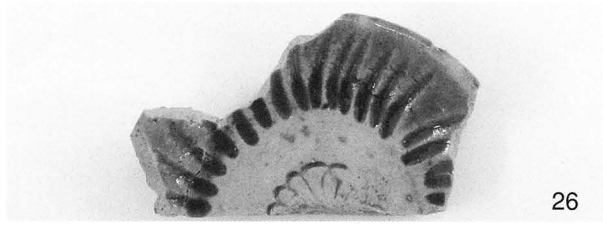
21

22

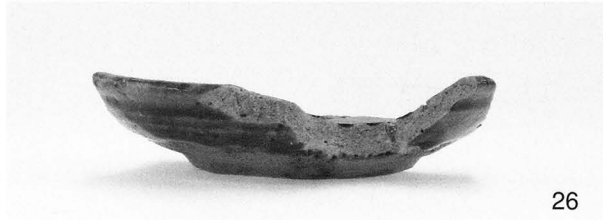
23

24

25


26

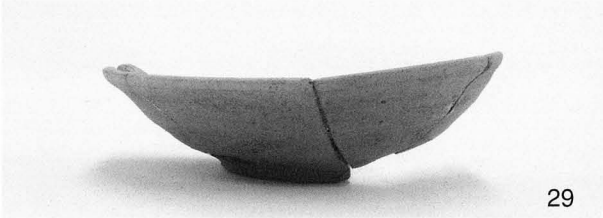
28


26

28

27

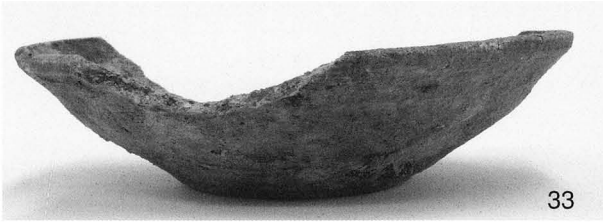
図版11　越中瀬戸　皿(3)


29

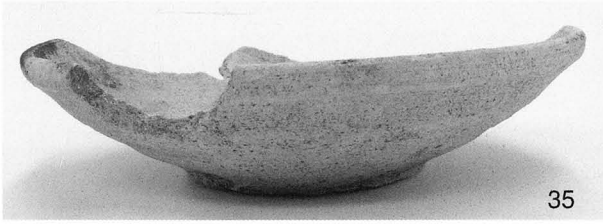
30

31

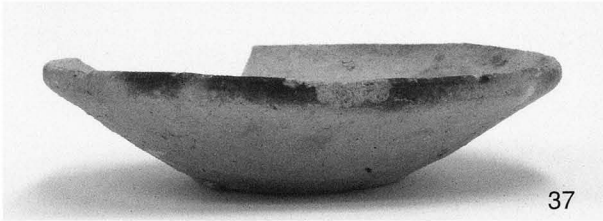
32


33

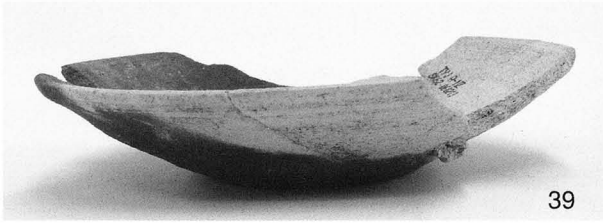
34


35

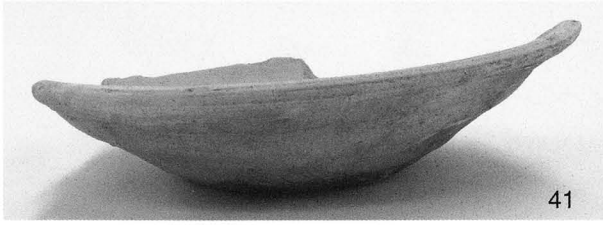
36


37

38


39

40

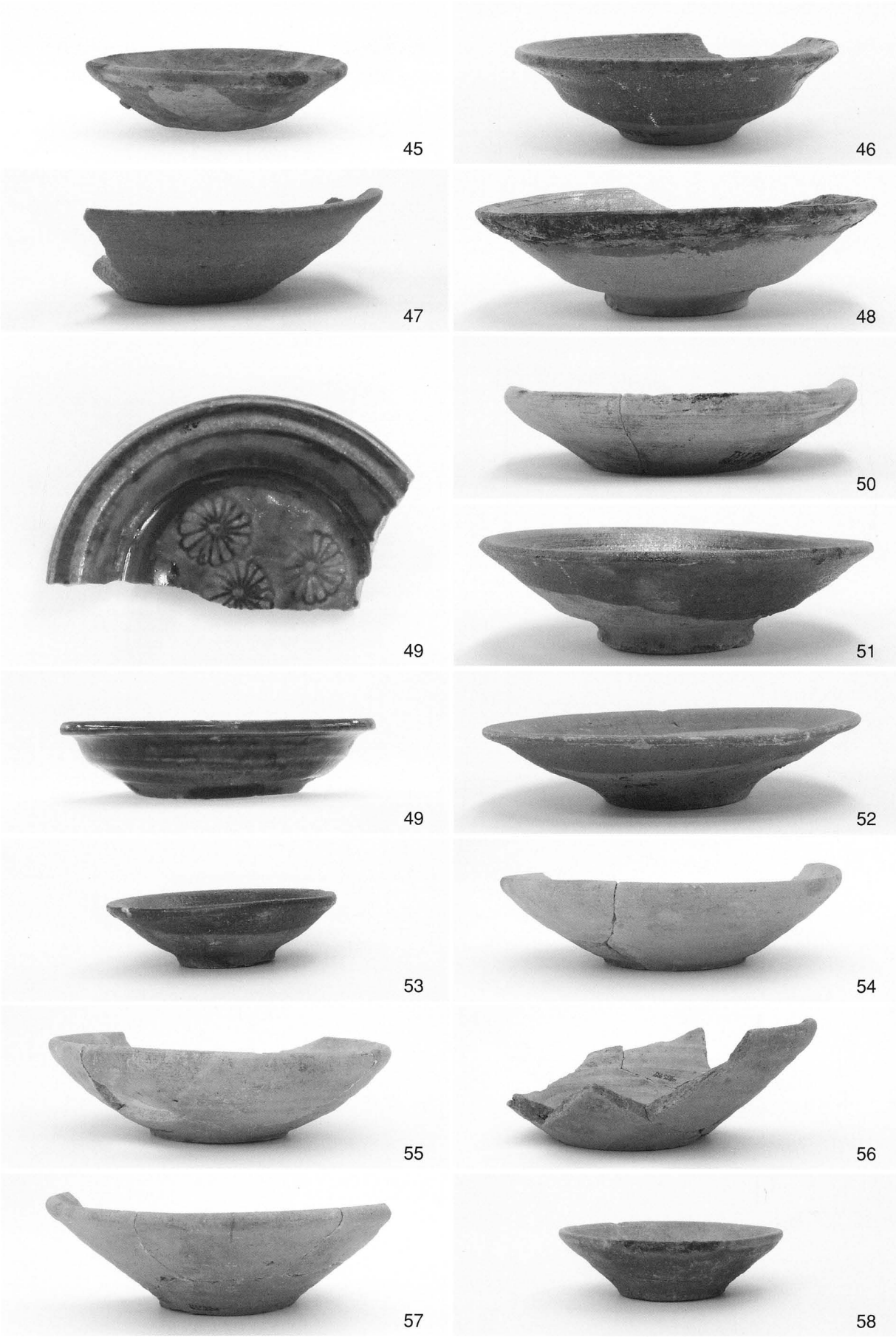

41

42

43

44

図版12　越中瀬戸　皿(4)



59

60

61

62

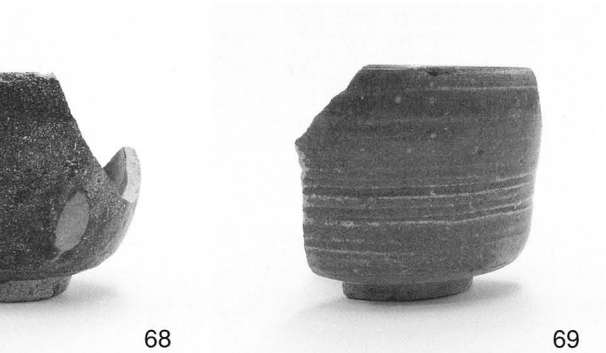
63

64

65

66

67


68

69

70

71

72

図版14　越中瀬戸　壺・建水

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

図版15　越中瀬戸　擂鉢

86

87

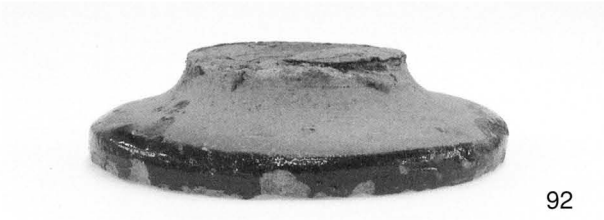
88

89

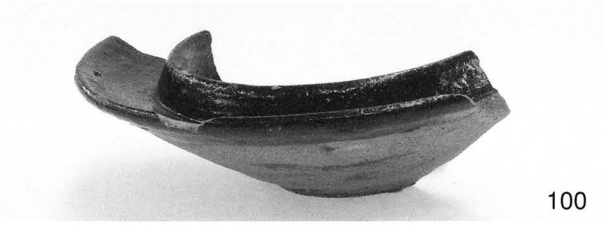
90

91

図版16　越中瀬戸　その他


92

93


100

101

102

103

104

105

96

106

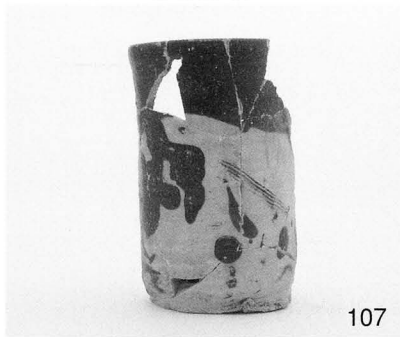
97

98

99

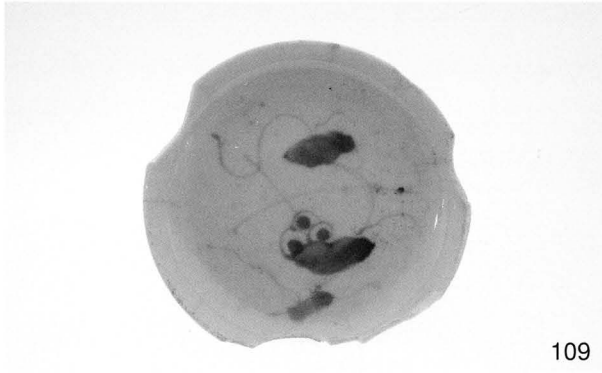
95

94

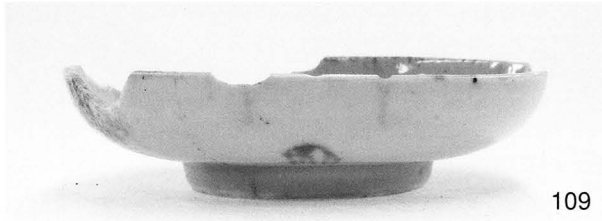

107

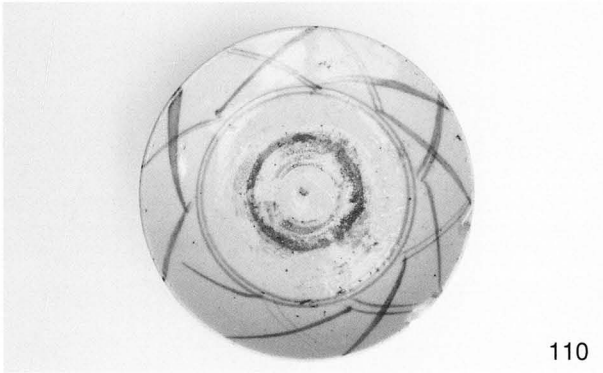
図版17　伊万里　皿(1)

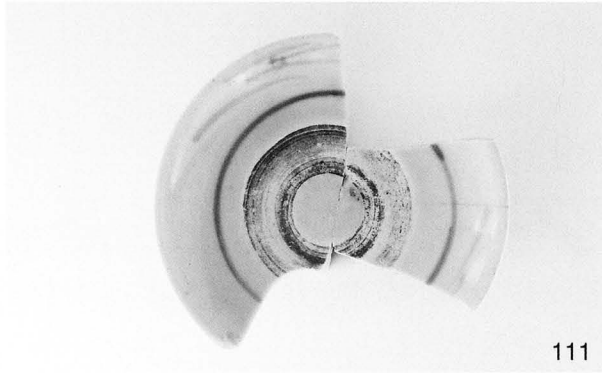
108


109

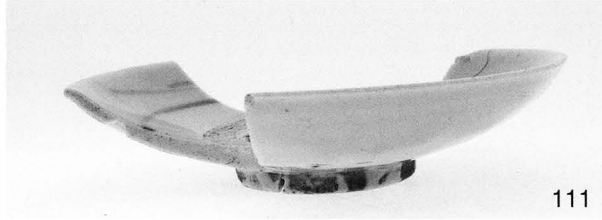
108

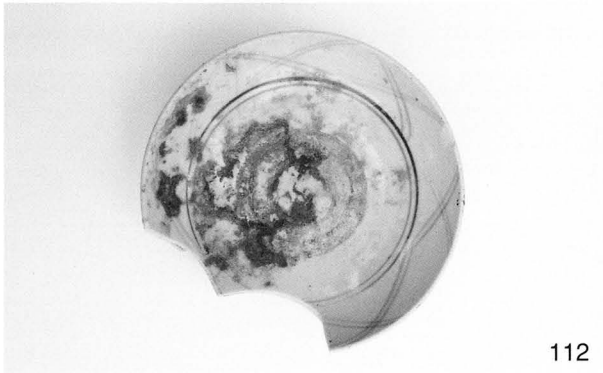

109

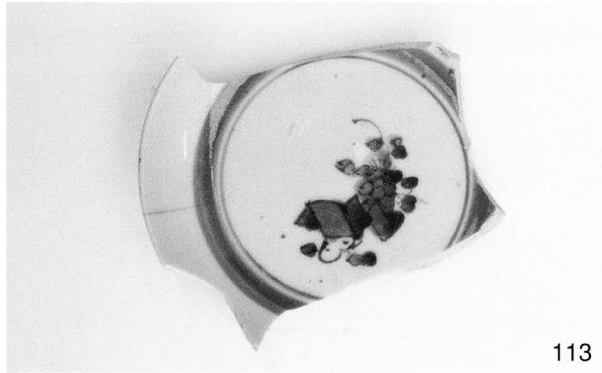

110


111

110


111

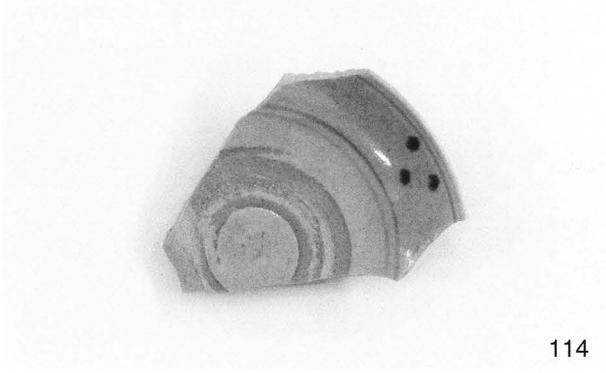

112

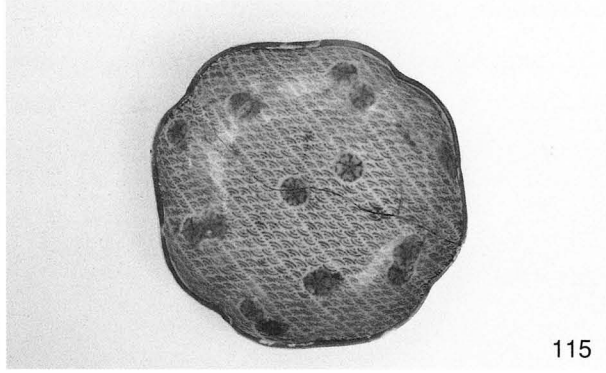

113

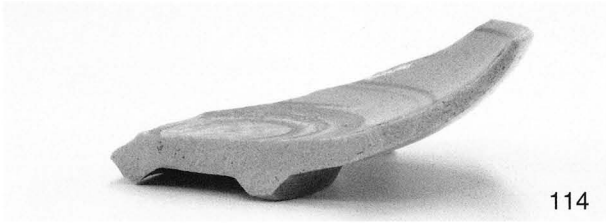
112

113

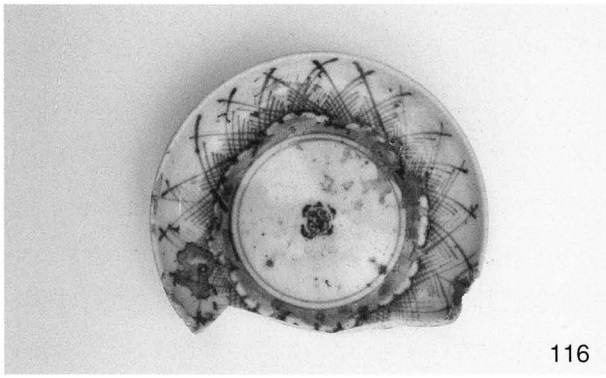
図版18　伊万里　皿(2)

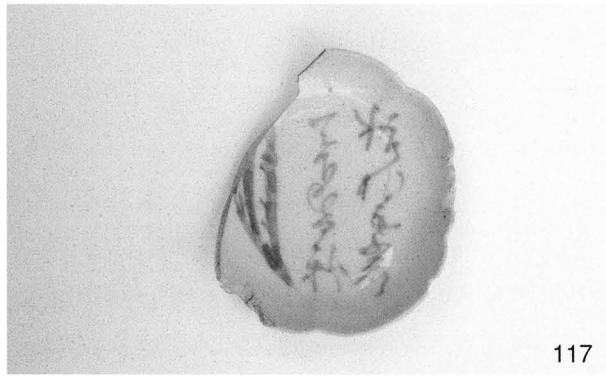

114

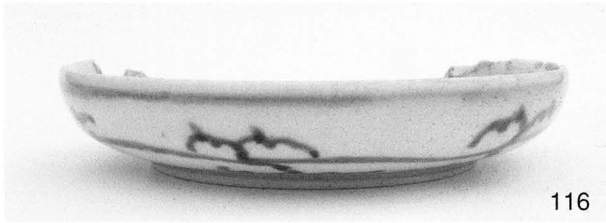

115


114

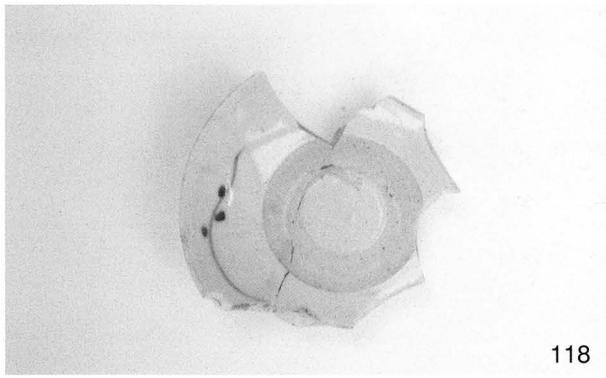
115

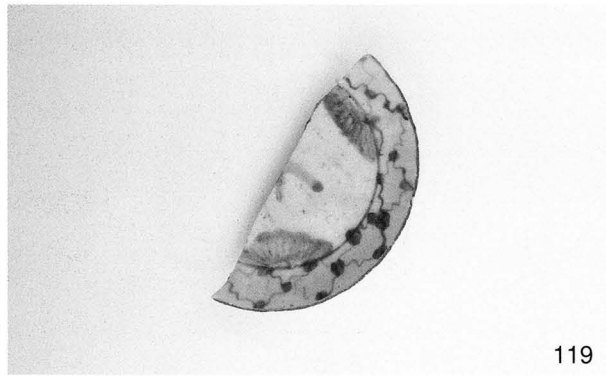

116


117

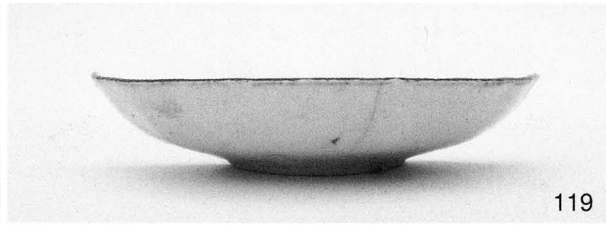

116

117

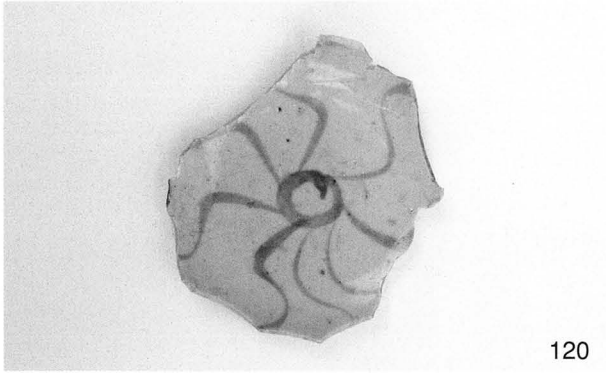

118


119

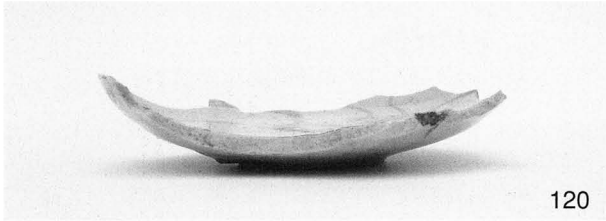
118


119

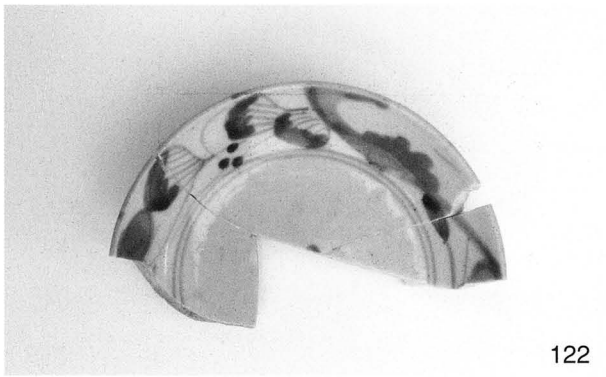
図版19　伊万里　皿(3)

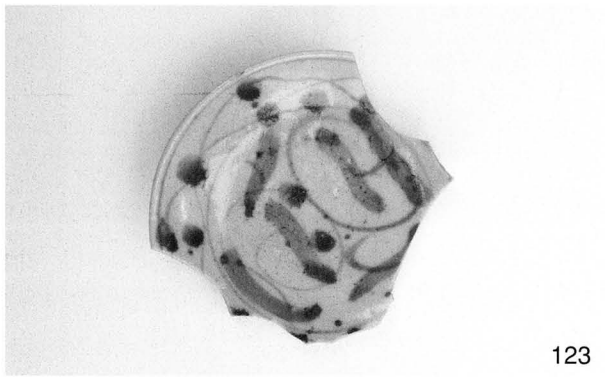

120

121

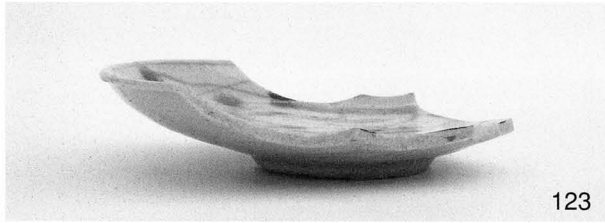

120

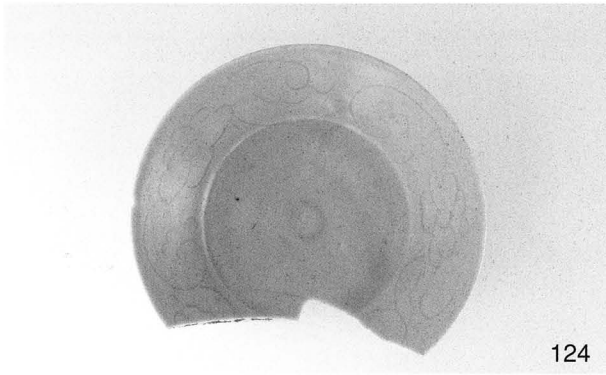
121

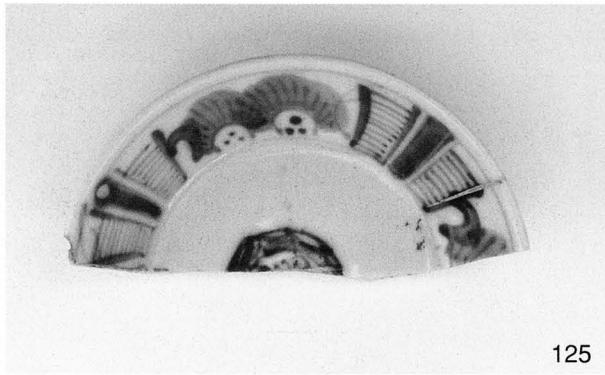

122

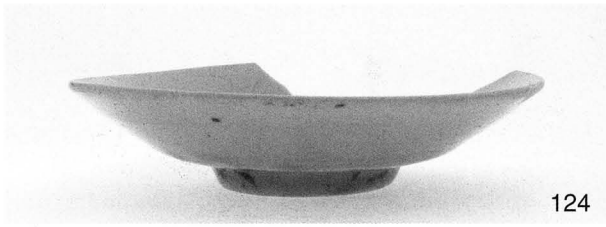

123

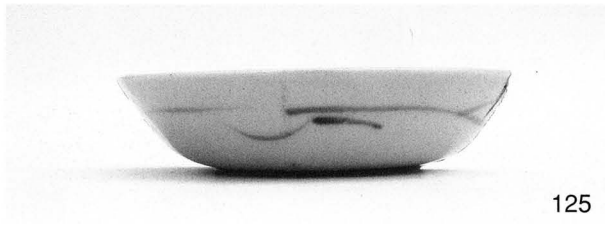
122


123

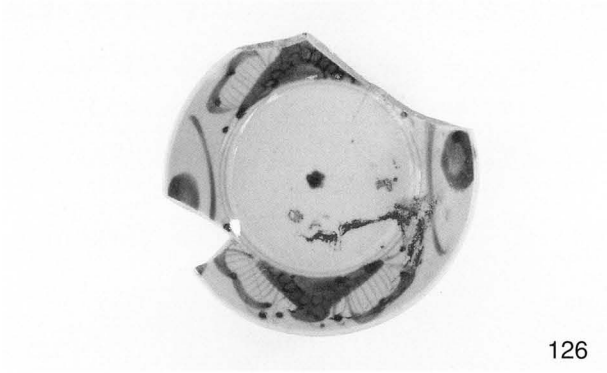

124

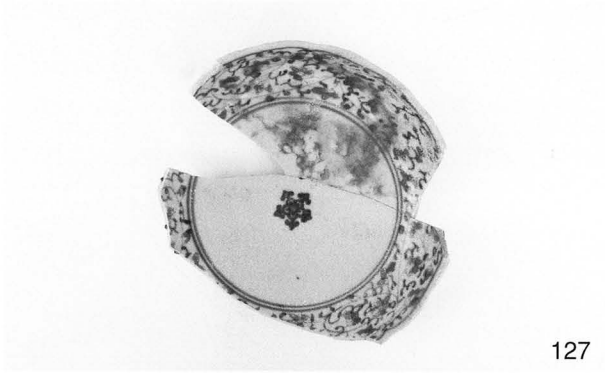

125


124


125

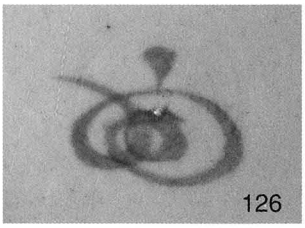
図版20　伊万里　皿(4)

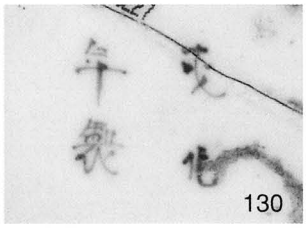

126

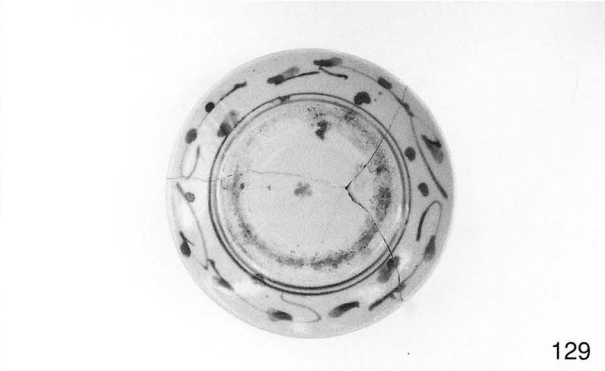

127

126

127

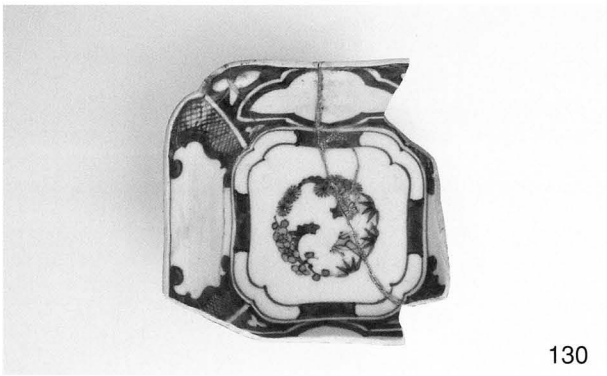

126


130


129

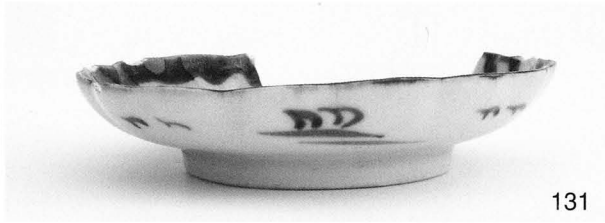
128

129


130

131

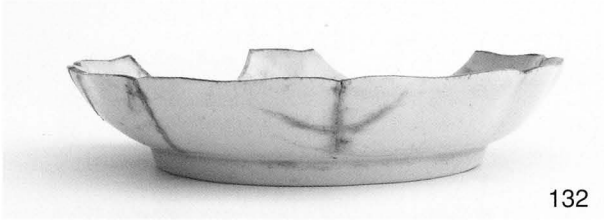
130


131

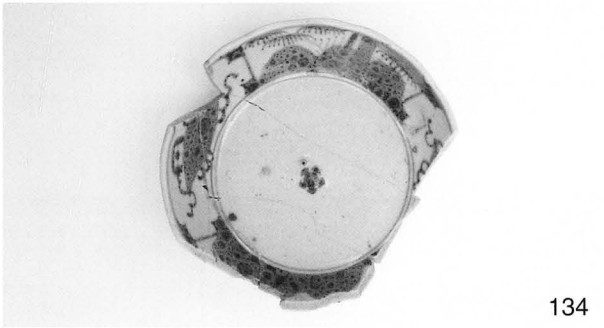
図版21　伊万里　皿(5)・碗(1)

132

133


132

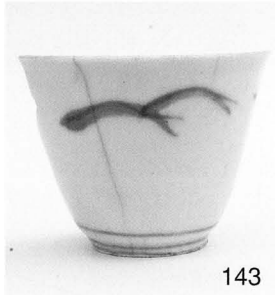
133


134

135

134

136


143

137

138

139

140

191

図版22　伊万里　碗(2)

142

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

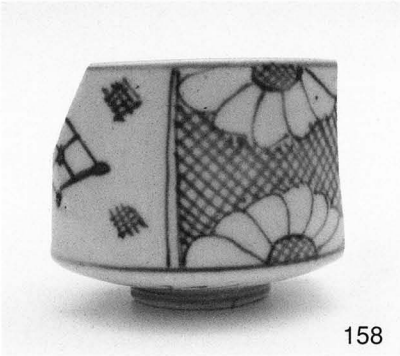
154

155

156

157

図版23　伊万里　碗(3)

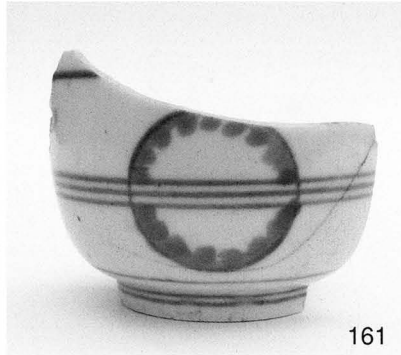

158

159

160

158

159


161

162

163

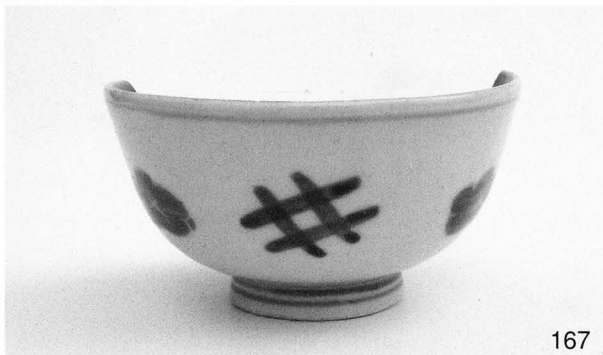
164

165

170

171

166


167

図版24　伊万里　碗(4)

168

169

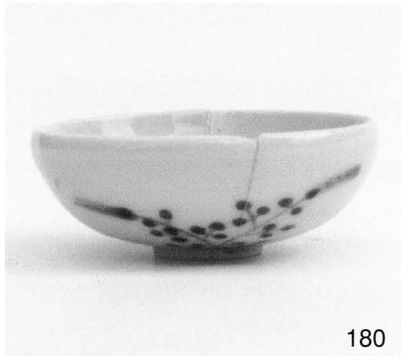
172

173

174

175

178


180

176

177

179

181

図版25　伊万里　碗(5)

182

185

188

183

184

186

187

189

190

193

191

192

図版26　伊万里　猪口・その他

194

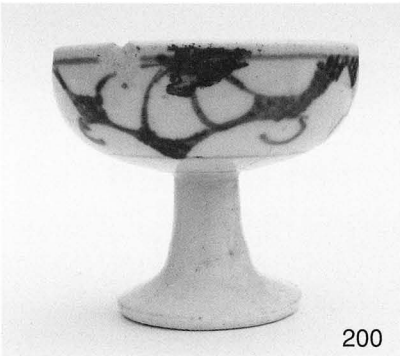
195

196

197

198

199

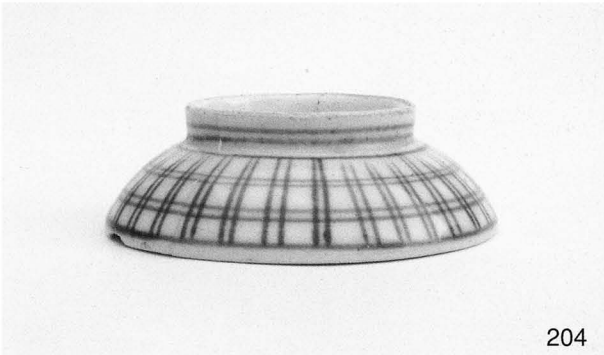

200

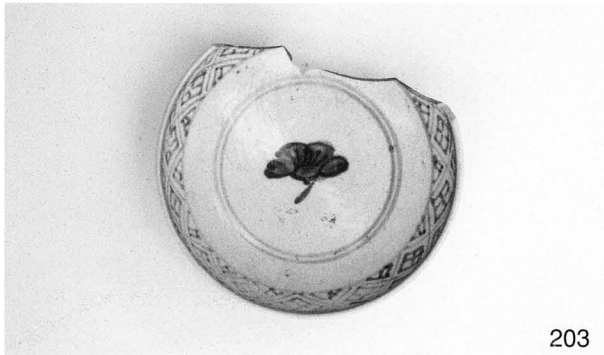
201

205

202

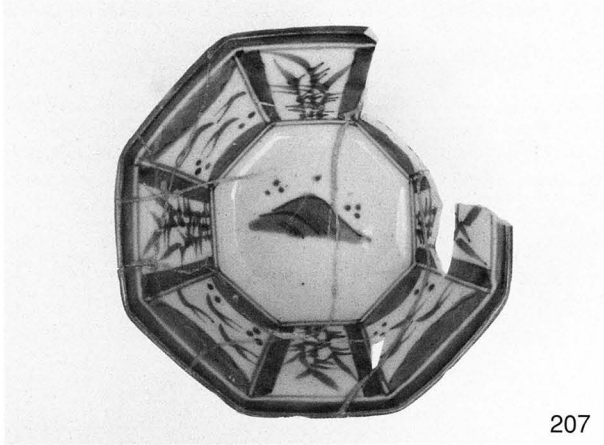
203


204

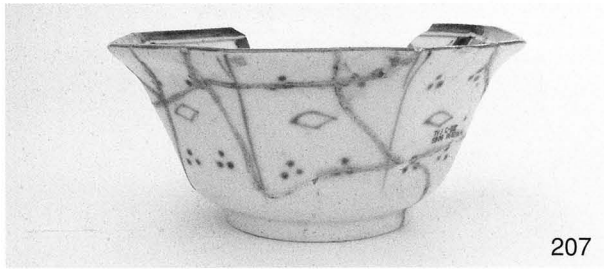

203

図版27　伊万里　その他　唐津焼　碗・皿

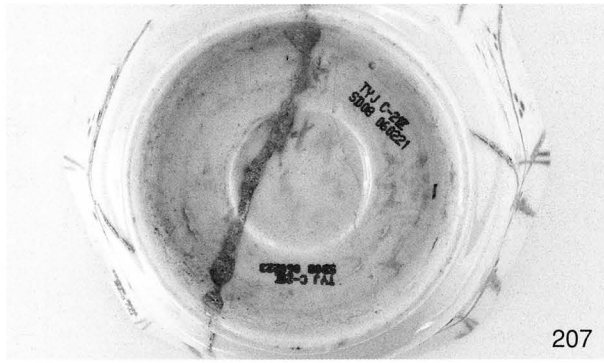
206


207

206


207

208


207

209

210

211

212

216

図版28　唐津　碗・皿・鉢

213

214

213

214

215

217

215

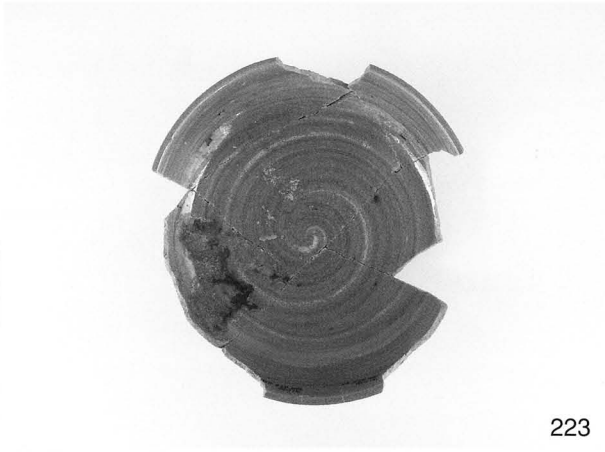
217

218

218

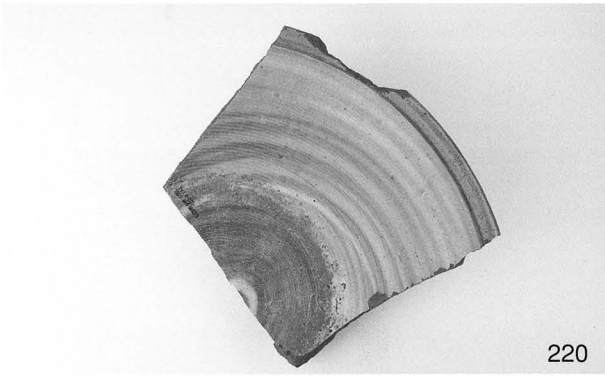
図版29　唐津　鉢・その他

219


223

219

223


220

224

220

221

222

225

図版30　唐津　擂鉢・瀬戸美濃(1)

226

227

228

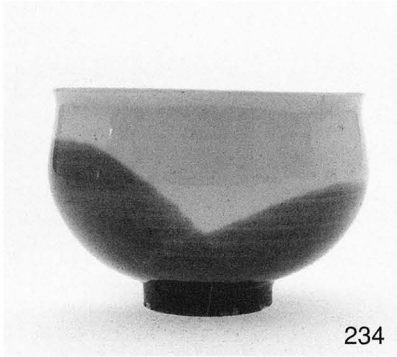
229

230

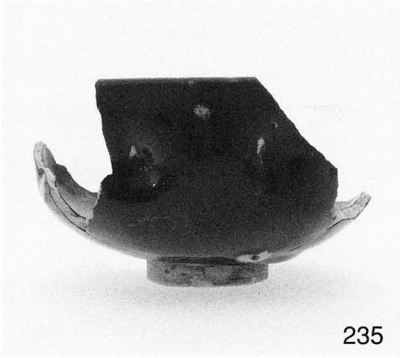
233

231

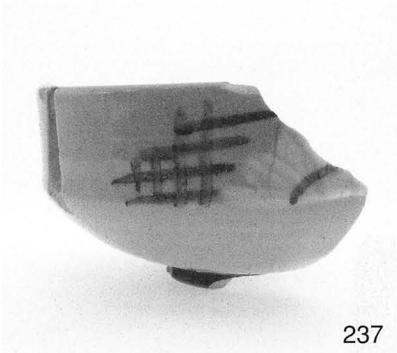
232


234

231


235

236


237

238

239

240

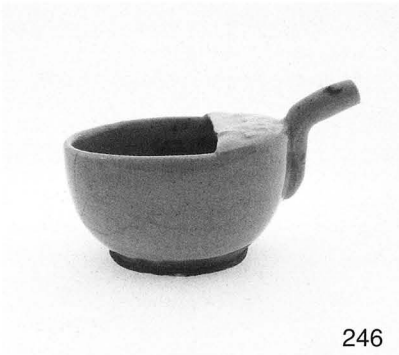
241

242

243

244

245


246

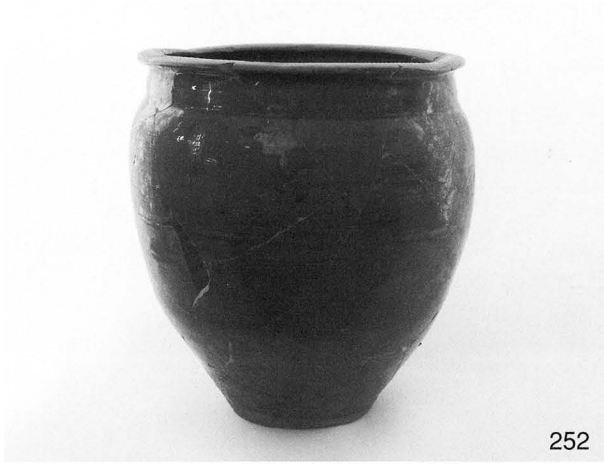
247

248

249

250

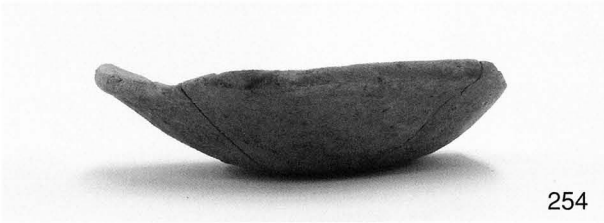
251

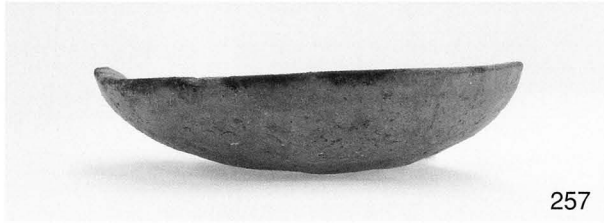

252

253

255

256

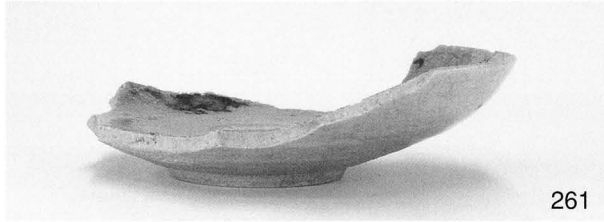

254

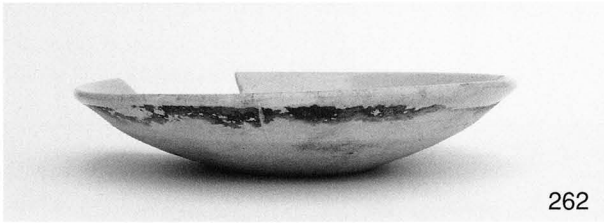

257

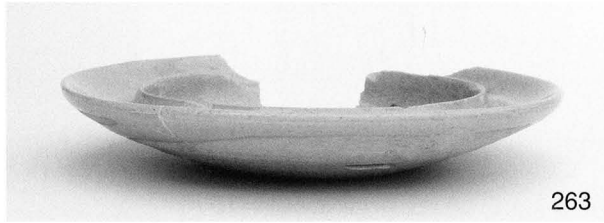
258

259

260


261


262


263

264

265

264

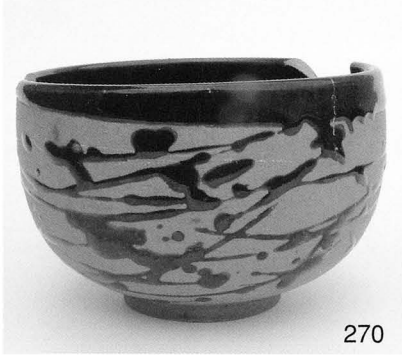
265

266

267

268

269


270

271

272

273

274

図版34　その他陶磁器(2)

275

276

277

278

279

282

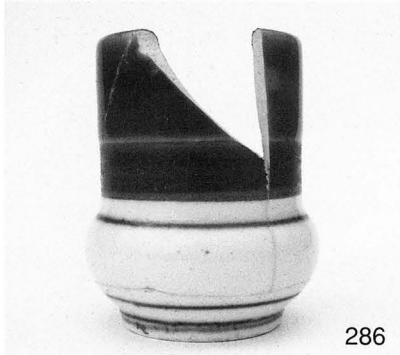
280

281

283

284

285


286

287

図版35　その他陶磁器(3)

288

289

290

291

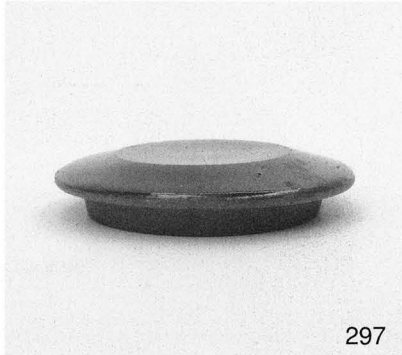
292

293

294

295

296


297

図版36　その他陶磁器　その他

298

299

300

298

301

302

303

304

305

303

304

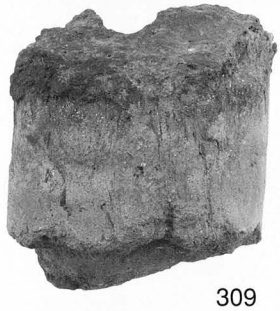
305

306

307

307

308


309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

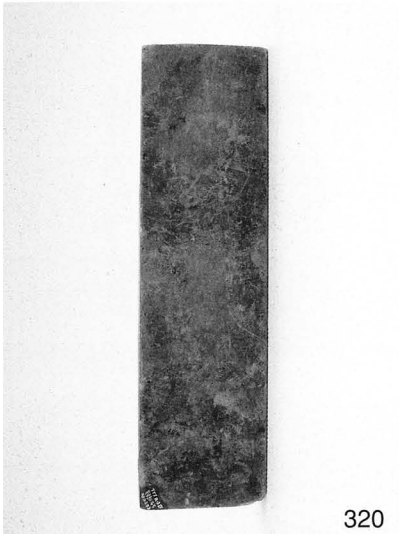
図版38　硯・石製品(1)

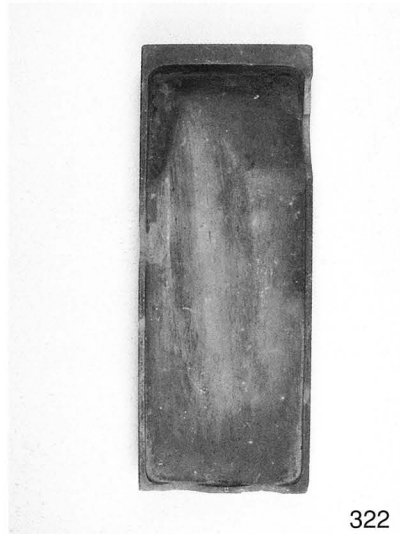
319

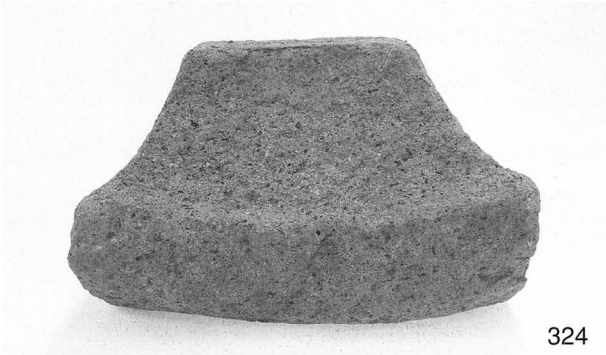
319

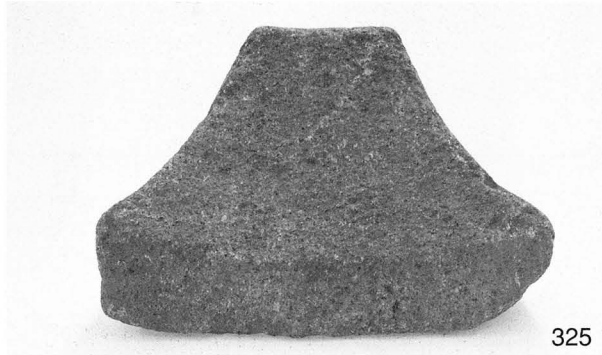
321

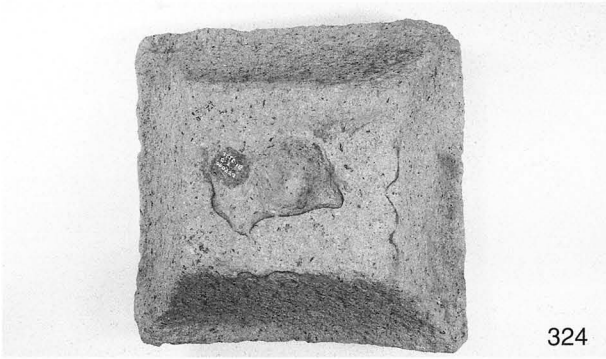
320


320


322


324


325


324

325

図版39　石製品(2)・金属製品(1)

323

326

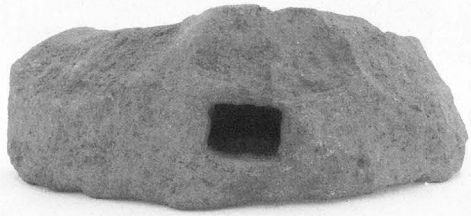
327

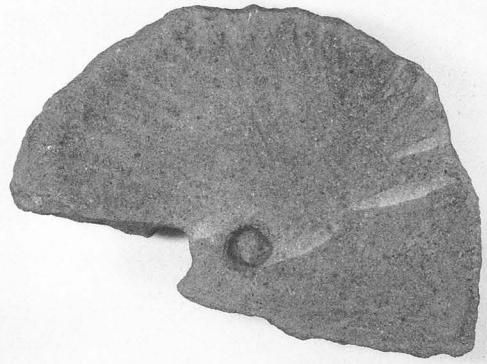
328

329

330

331


326


326

332

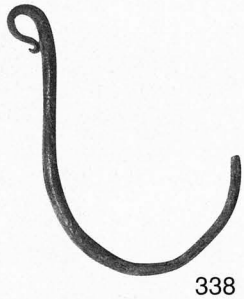
333

334

335

336

337


338

340

344

図版40　金属製品(2)

339

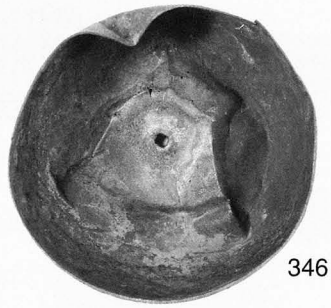
341

339

342

343

346



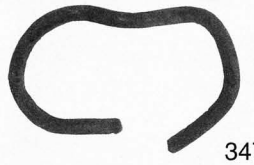
346

345

348

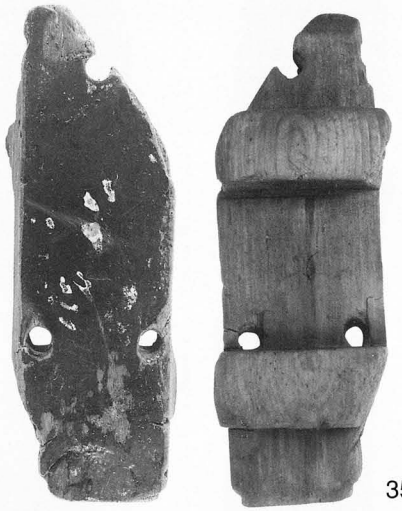
349

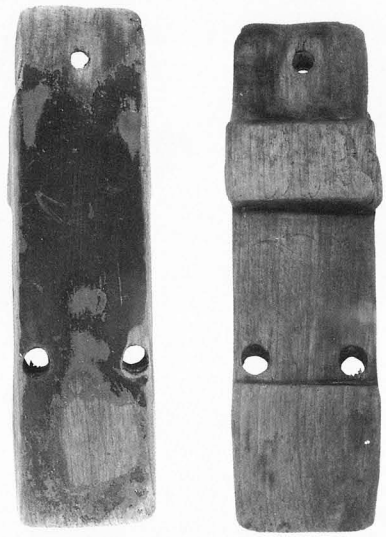
350



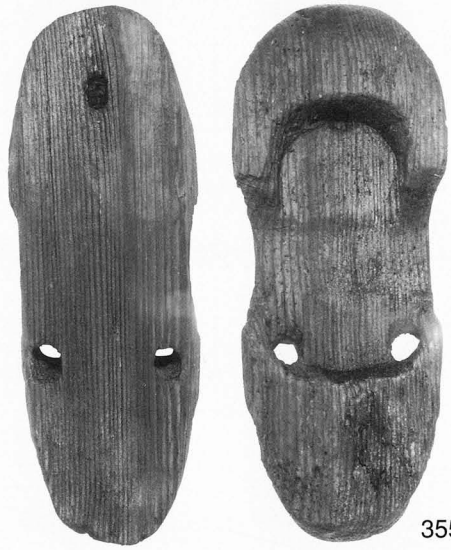
347

351

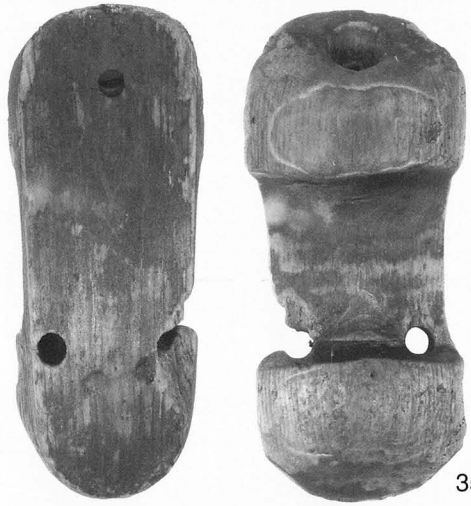

352


353

354


355

356


357

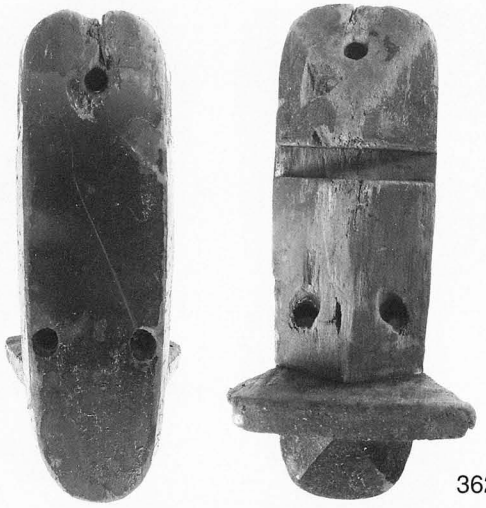
図版42　木製品　下駄(2)

358

359

360

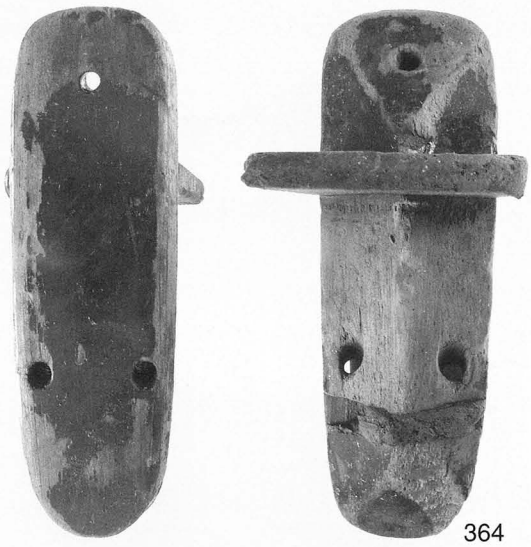
361

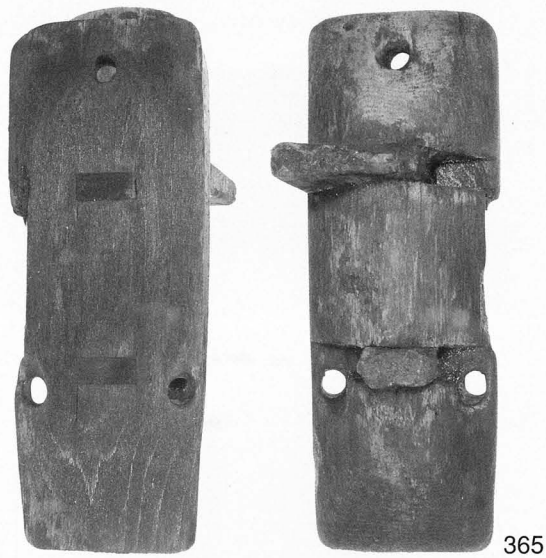


362

363

図版43　木製品　下駄(3)・漆器(1)


364


365

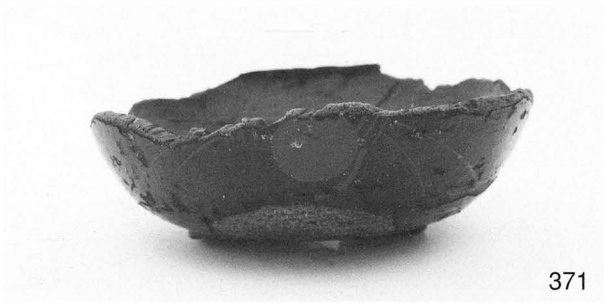
366

367

368

370

368


371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

390

389

390

図版46　木製品　漆器(4)

391

392

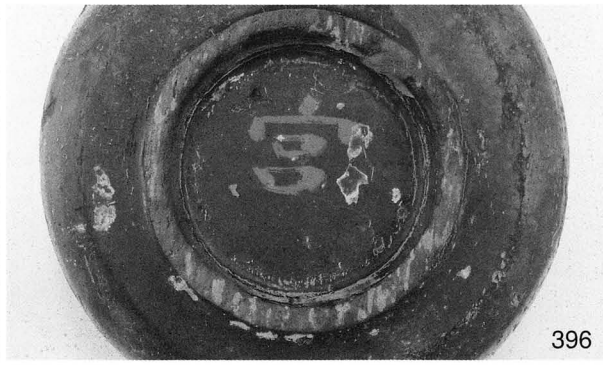
393

394

395

396

397


396

398

399

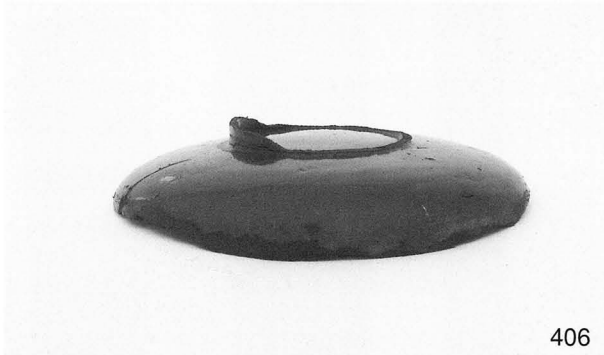
400

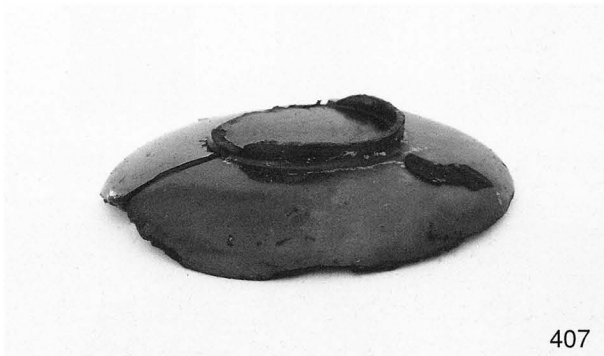
401

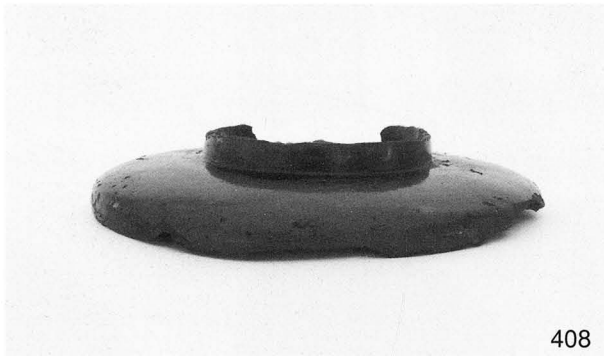
402

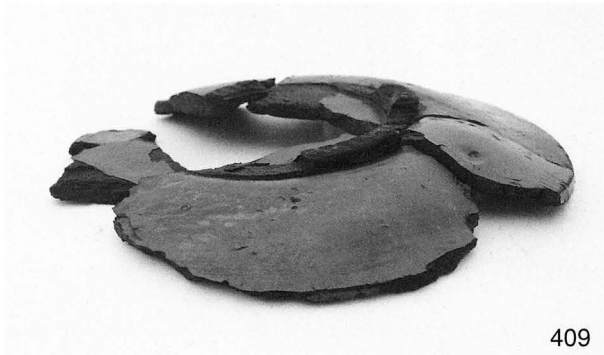
404

405


406


407


408


409

410

図版48　木製品　木札(1)

411

412

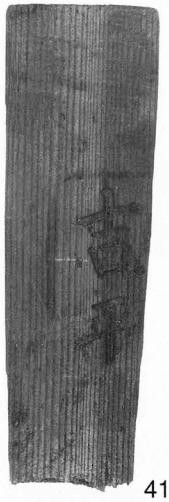
413

414

415

416

417

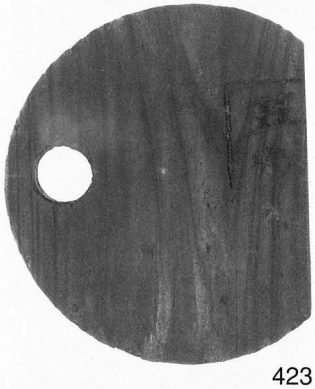

418

419

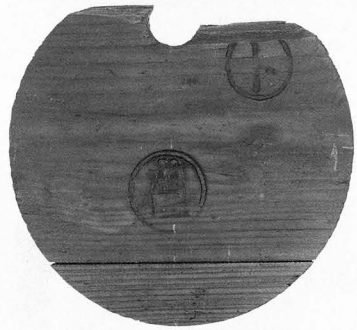
420

421

422

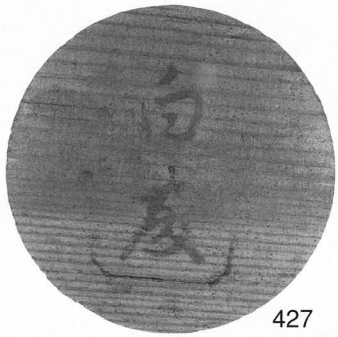

423

424

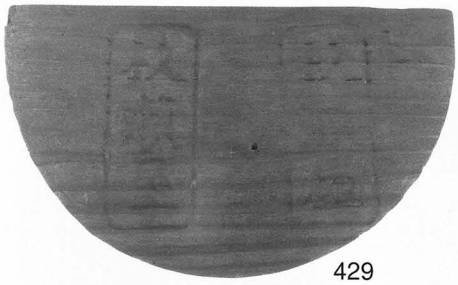

425

図版49　木製品　木札(2)

426


427

428


429

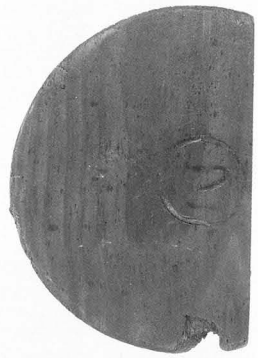
431

432

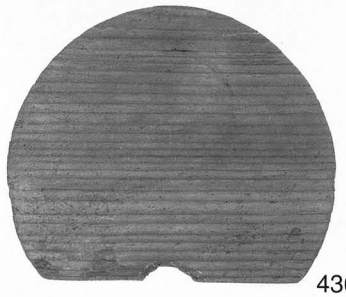
430

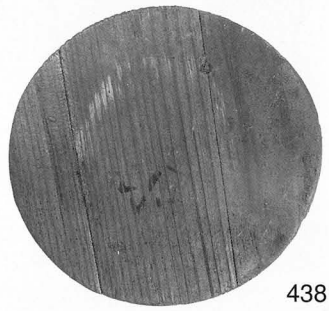
433

434


437

435


436


438